ISSN-0289-9760

常盤大学人間科学部紀要

人間科学

第29巻　第2号
2012年　3月

研究論文

現代社会の組織変容に関する理論的・実証的考察－茨城県下の諸組織を中心に－
…… 長谷川　幸一・日向野　弘毅・林　寛一・文堂　弘之・砂金　祐年　1
宮崎アニメ「千と千尋の神隠し」における久石音楽の特徴
……………… 岡部　玲子・三宅　光一　21
大学生の就職活動に関する調査研究
－常盤大学人間科学部コミュニケーション学科卒業生の事例Ⅱ－…… 石川　勝博　47
大学生のチームワークに関するスキルを向上させるトレーニングの有効性
………… 太幡　直也　59

研究ノート

緑茶成分の経時変化（1）
－細胞毒性を検討するための緑茶の色調変化とタンニン量変化の追跡－
………… 佐塚　正樹　71

常盤大学人間科学部

常磐大学人間科学部紀要『人間科学』編集規程

第１条　この規程は、人間科学部紀要編集委員会（以下、委員会と言う）が行う編集作業に関して必要な事項を定めることを目的とする。
第２条　この規程は人間科学部紀要編集委員会規程第４条に基づく。
第３条　常磐大学人間科学部の研究発表誌『人間科学』（HUMAN　SCIENCE）（以下、研究紀要と言う）は、毎年度に１巻とし、２号に分けて編集し冊子体で700部発行する他、その電子版を常磐大学のホームページに公表する。
第４条　研究紀要へ寄稿する資格を有する者は、本学部の専任教員および委員会が認めた者とする。
第５条　委員会は、委員会に提出された論文が学術論文として相応しい内容と形式を備えたものであり、かつ未発表のものであることを確認しなければならない。
第６条　研究紀要に掲載される論稿は次の１から６のいずれかに当てはまるものでなければならない。
１．論文　論文は学術論文に相応しい内容と形式を備えた理論的又は実証的な未発表の研究成果をいう。
２．研究ノート　研究ノートは研究途上にあり､研究の原案や方向性を示した未発表の研究成果をいう。
３．書評　書評は新たに発表された内外の著書・論文の紹介であって未発表のものをいう。
４．学界展望　学界展望は諸学界における研究動向の総合的概観であって未発表のものをいう。
５．課題研究助成報告　本学課題研究助成制度に基づく研究の経過報告および研究成果の報告をいう。
６．その他　その他の論稿であって委員会が寄稿を認めたものをいう。
第７条　研究紀要の編集は前条までに規定された事項を除く他、次の各号に従って行われなければならない。
１．必要に応じて、片方の号はテーマを決めて特集号とする。
２．論文の体裁（紙質、見出し、活字など）は可能な限り統一する。
３．紀要のサイズはＢ５とし、論文、研究ノート、書評、学界展望は二段組、その他は一段組で、いずれも横組とする。活字の大きさは論文、研究ノート、書評、学界展望、その他いずれも10ポイントとし、いずれも明朝体とする。

常磐大学人間科学部紀要『人間科学』寄稿規程

第１条　この規程は、冊子体および電子媒体で公表される常磐大学人間科学部の研究発表誌『人間科学』（HUMAN SCIENCE）（以下、研究紀要と言う）に寄稿を希望する執筆者について必要な事項を定めることを目的とする。
第２条　この規程は人間科学部紀要編集委員会規程第４条に基づく。
第３条　研究紀要へ寄稿する資格を有する者は、常磐大学人間科学部紀要『人間科学』編集規程第４条に定める者とする。
第４条　研究紀要への寄稿希望者は、寄稿に関してはこの規程を遵守するほか、この規程の解釈については紀要編集委員会（以下、委員会と言う）の決定にしたがわなければならない。
第５条　寄稿希望者は、委員会が定める原稿募集要領に従って寄稿希望書ならびに原稿を委員会に提出しなければならない。
②委員会に提出する原稿は編集規程第６条に定める論稿の種別に当てはまるものでなければならない。
③委員会に提出できる原稿は原則として一号につき一人一編とする。
④原稿は、手書きの場合は横書きで、Ａ４版400字詰め原稿用紙で提出する。パソコン入力の場合にはテキストファイルのフロッピー・CD-R 等のメディアと、横書き40字30行でＡ４版用紙に印刷されたものを提出する。
⑤原稿の長さは､図表等を含め､論文は24000字(400字詰め原稿用紙換算60枚)､研究ノートは12000字(30枚)､書評は4000字(10枚)､学界展望は8000字(20枚)を基準とする。課題研究助成報告は1300字(3.25枚）以内とする（ただし、研究計画年次終了分に関しては、論文又は研究ノートに準じたものとする)。そのほかのものについては委員会で決定する。
⑥提出原稿は執筆者がコピーをとり、オリジナルを委員会に提出し、コピーは執筆者が保管する。
第６条　寄稿希望者は原稿執筆にあたっては、次の各号に従わなければならない。
(1)　原稿の１枚目には原稿の種別、題目、著者名および欧文の題目、ローマ字表記の著者名を書くこと。
(2)　論文には200語程度の欧文アブストラクトを付すこと。なお､アブストラクトとは別に欧文サマリーを必要とする場合は、Ａ４版ダブルスペース３枚以内のサマリーを付すことができる。
(3)　書評には著者名、書名のほか出版社名、発行年、頁数を記載すること。
(4)　日本語以外で執筆された部分については、執筆者の責任においてネイティブチェックを行う。
(5)　数字は、原則として算用数字を使用する。
(6)　人名、数字、用語、注および（参考）文献の表記等は、執筆者の所属する学会などの慣行に従う。
(7)　図、表は一つにつきＡ４版の用紙に１枚に描き、本文には描き入れない。なお、本文には必ずその挿入箇所を指定すること。
(8)　図表の番号は図１．、表１．、とする。そのタイトルは、図の場合は図の下に、表の場合は表の上に記載すること。
(9)　図表の補足説明、出典などはそれらの下に書くこと。
第７条　初校の校正は執筆者が行う。
第８条　執筆者は、本人が寄稿した研究紀要の発行報告に代えて、論稿が掲載された当該研究紀要２冊と抜刷50部を研究教育支援センターにおいて受取ることができる。
②執筆者が前項に規定する数量を超える複製を希望する時は本人がその実費を負担しなければならない。

論　文

現代社会の組織変容に関する理論的・実証的考察
―茨城県下の諸組織を中心に―

長谷川幸一　日向野弘毅　林　寛　一
文堂　弘之　砂金　祐年
Hasegawa Kouichi　Higano Kouki　Hayashi Kanichi
Bundo Hiroyuki　Isago Sachitoshi

Theoretical and empirical consideration about the transformation of organizations in contemporary society － mainly the organizations of Ibaraki Prefecture －

Abstract

Organizations of modern society, such as business organization, administrative organization, and resident organization are changing rapidly through development of information technology and globalization. The purpose of this paper is to conduct positive analysis especially centering on Ibaraki Prefecture about the change process of organizations accompanying change of society. And further, based on the analysis, we try to build the theory about change of present age organizations. Although some significant researches have so far been done about these problems, accumulation of information and knowledge is fully omitted yet. Especially, there are few trials that make the change process of the various organizations of modern society applicable to analysis simultaneously. The feature of our research is that we do not limit concern to the organisation of one domain in modern society. As a result of our analyzing the change process of organizations simultaneously, we understand that many organization of our country accomplished the big change in common after the 1990s.

１．研究の目的

本稿は、課題研究（共同）「現代社会の組織変容に関する理論的・実証的考察－茨城県下の諸組織を中心に－」（2009－2010年度常磐大学課題研究助成）に基づくものである。

IT化、グローバル化といわれる現代社会の急速な変化は、企業組織、行政組織、そして住民組織等に大きな影響を与えている。本稿の目的は、こうした時代の変化に伴う企業組織の変容、政治・行政組織の変容、そしてNPOを含めた市民･住民組織の変容等について、

茨城県下の諸組織を中心にまずこの変容プロセスに関する実証的な分析を行い、次いでその研究に基づき現代組織の変容に関する理論化を試みることにある。IT化、グローバル化による組織アイデンティティの変容、あるいは組織成員の帰属意識の現代的な変容に関しては、国内外において理論的なレベルにおけるいくつかの先行研究が存在するとともに、いくつかの有意義な実証研究が行われてきたが、それに関する理論的・実証的知見の蓄積はいまだ十分とはいい難い。とりわけ、現代社会における複数領域の組織変容プロセスを同時に分析対象とするような試みは少ないといえるだろう。

本稿の特徴は、分析対象を、従来のように、企業組織、政治・行政組織、市民・住民組織のうちのどれかひとつに限定しない点にある。本稿を執筆する過程において、共同執筆者はまず、それぞれの専門領域の組織を調査・分析した後、それらの成果について共同執筆者間での情報の共有と議論を行うことを通して、自己の研究分野以外の組織についての情報を獲得し、それぞれの担当部分の調査研究を再度見直したうえで原稿を完成させた。このような共同作業から明らかになった点は、1990年代後半以降、急速に進展したIT化とグローバル化の波は、われわれがそれぞれ個別の研究対象としている領域の組織に対して、極めて大きな共通の衝撃を与え、組織変容をもたらしている、という点である。

２．「教育」から「職業」への移行過程の変容

1990年代後半以降、いわゆるバブル経済の崩壊により、我が国は深刻な不況に陥り、1955年以降の我が国の高度成長を根底で支えてきた日本的雇用慣行の維持も困難になった。日本的雇用慣行を支える１つの重要なシステムとして「新規学卒一括採用」が挙げられるが、バブル経済崩壊後にこのシステムがうまく働かなくなったことが、我が国における「教育」から「職業」への移行過程における変容の原因であることは、多くの論者が指摘してきた点である。

周知の通り、我が国では学校が「教育」から「職業」への移行の機能を担い、「教育」から「職業」への移行を、「学校」から「会社」への移行にすることで、その移行過程をきわめてスムーズにしてきた。しかし、バブル経済の崩壊による深刻な雇用情勢の変化は、長年にわたって構築されてきた日本的システムを根底から突き崩すことになったのである。

このような状況の中、日本政府は1997年５月「経済構造の変革と創造のための行動計画」を閣議決定し、新しい産業構造に対応する人材の育成（具体的な内容としては、ベンチャー企業の育成ならびに企業家の養成、さらにはインターンシップの推進）が国策として決定された。それと同時に大学等のインターンシップを推進するため、当時の文部省と労働省、通商産業省の三省が「インターンシップ推進のための三省連絡会議」を設置した。

茨城県においては、1999年、若者の職業意識の高揚や職業体験によって「雇用のミスマッチ」を防止するという意図のもと、緊急雇用対策の一環として「大学・短大等緊急インターンシップ支援事業」が計画され、1999年秋から「茨城県経営者協会」が同事業の委託を受け、支援事業を展開した。さらに同協会は、2000年と2003年に「茨城県内における大学・短大等インターンシップ実態調査」を行い、報告書を作成している。

このような問題状況を踏まえ、われわれは2009年度において、行政に関しては福島県商工労働部雇用対策担当者、栃木県産業労働観光部雇用対策担当者、福岡県福岡市雇用対策担当者、企業に関しては株式会社カスミ人事担当者、関東つくば銀行人事担当者に対し、それぞれインタビュー調査を行った。これらのインタビュー調査において共通に聞かれた見解は、2008年秋以降の経済収縮に伴う雇用の極端な低迷と、若年求職者についての「求人」と「求職」との間の「ミスマッチ」であった。また、栃木県および福岡県の調査からは、それぞれの自治体が若年者に向けたコミュニティ・ビジネスなどの新しいビジネス形態の展開を模索していることが明らかになった。

さらに、先述した2000年ならびに2003年に茨城県経営者協会が実施した「茨城県内における大学・短大等インターンシップ実態調査報告書」から、茨城県内の多くの事業所がインターンシップの実施にあたって困難な事項として挙げているのは、「指導担当者の確保」、

「指導計画・プログラム作成」、「受け入れ部署の確保」といった事項であることを確認した。同報告書によれば、インターンシップを実施している事業所は、2000年の調査（県内企業等3,500事業所を対象として実施）では、回答のあった653事業所のうち14%にあたる91事業所、2003年の調査（県内企業等2,318事業所を対象として実施）では、回答のあった398事業所のうち21.1%にあたる84事業所であった。ちなみに、2010年に行ったわれわれの調査の際に依拠した茨城県経営者協会作成の「平成22年度茨城県内インターンシップ受け入れ企業一覧」では、87事業所が掲載されていた。

以上のように、2009年度に行ったインタビュー調査ならびに資料収集からは、1997年当時、政府がインターンシップ制度導入の主要な目的として掲げた「雇用のミスマッチの防止」という課題が解決されてはいない、という点が推察された。そこでわれわれは、2010年10月、「職業意識の形成と職業選択に対するインターンシップの意義についてのアンケート調査」を実施するとともに、いくつかの先行研究ならびにわれわれが実施したインタビュー調査においても浮き彫りになった「インターンシップの形骸化」の問題について検討を加えるため、地域に根ざした「長期インターンシップ」を企画・仲介している仙台市の株式会社デュナミス代表取締役にインタビュー調査を行った。

デュナミス代表取締役社長渡辺一馬氏（1978年生）は、宮城大学事業構想学部入学後にサークル「デュナミス」を立ち上げ（渡辺氏は事業構想学部の一期生である）、100人弱のメンバーで、WEB制作や企画、パソコン講習事業などを展開し、卒業後に法人化したが、後輩のフォローを行うことが難しくなったことをきっかけに、企業経営者や大学教員等の協力を得て、インターンコーディネートを開始するようになった。渡辺氏が考えるデュナミスのミッションとは、地域社会におけるコーディネーター役を担うことであり、あくまで渡辺氏の最終的な目的は、仙台市さらには宮城県を担うことのできる有望な若者たちを育成する手助けをするという点にある。渡辺氏の見解は、やはり2週間のインターンシップによって若者の職業意識を形成することは難しく、長期のインターンシップ（半年以上）にこそ意味がある、というものであった。

他方、2010年10月に実施した「職業意識の形成と職業選択に対するインターンシップの意義についてのアンケート調査」においては、インターンシップの受け入れを行っている全国の企業（事業所）・行政組織等1500社（団体）を対象に、それらの諸組織がインターンシップの意義ならびに現行制度の問題点をどのように認識しているのかを把握するとともに、1997年にインターンシップ推進施策が開始されて以降、我が国における「教育から職業への移行過程」がどのように変容しつつあるのか、把握することを試みた（この点については、文末の調査票についても参照されたい）。地方別の送付件数は次の通りである。北海道地方29件、東北地方87件、関東地方706件、中部地方290件、近畿地方35件、中国地方112件、四国地方120件、九州・沖縄地方121件。なお、回収数は511件（回収率34.1％）であった。質問項目の問12では、「インターンシップを実施する上で難しい点は何か」を複数回答で聞いたが、「指導担当者の確保」262件（51%）、「指導計画・プログラムの作成」248件（49%）という結果となり、茨城県経営者協会が県内事業所に対して行った調査結果と同様の傾向であった。このことから明らかなのは、「指導担当者の確保」、「指導計画・プログラムの作成」が困難であると認識する企業・団体が、インターンシップの専任担当者が必要となる長期インターンシップを避け、指導計画・プログラムの作成が比較的容易な短期インターンシップを実施する傾向にある、という点であろう。

（長谷川幸一）

3．基礎自治体における組織的変容

1999（平成11）年の所謂地方分権一括法の制定以後、ローカル・ガバメントはそのガバナンスを大きく変容させてきている。とりわけ、地方分権は、脱中央集権のプロセスの中で、機関委任事務の廃止等、団体自治面で大きく進展したといわれる。しかし、それを動かす住民自治面では、現在、各自治体で模索が続いているといってよい。今回の調査・研究では、われわれは、基礎自治体のこうした面での組織的変容過程について、収集した県外の先進事例を県内の取り組み事例と比較考量し、分析・考察することを目的としていた。

愛知県犬山市：2001（平成13）年、「犬山市市民活動の支援に関する条例」を制定し、市民活動支援センター「しみんてい」を設置する。全国的にも早くから、市民活動を推進するための環境整備に取り組み、市民と行政との協働のまちづくりを進めてきた。その「しみんてい」は、環境美化、子育て支援、高齢者のサポート、多文化共生等、様々な取り組みを行っている市民活動団体に対し相談･助言を行い、市民活動の充実･拡大を推進している。他方、既存のコミュニティの再編については、町内会を単位としたコミュニティ形成と、小学校区を単位としたコミュニティ推進協議会が組織され、まちづくりの新たなプラットフォームとして比較的早く取り組んだ事例として注目される。

福岡県福岡市：2006（平成18）年に設置された「福岡市コミュニティ関連施策のあり方検討会」の最終提言が、「コミュニティの自治」と「コミュニティと市の共働」で整理され、その後の方針が示された。すでに、2004（平成16）年に、小学校区を単位とする自治協議会が自治システムとして制度化されていた。同時に、区役所内に「コミュニティの総合窓口」として地域支援部が置かれ、そこに校区を担当し共働のパートナーとして校区担当職員が配置されていた。都市型プラットフォームとしては先進的であり、今日標準的なパターンとなりつつあるが、政令市としての独自の問題として、他の政令市同様に、集合住宅の自治と共働についてはほとんど手つかずであるのが現状である。

長野県小布施町：1976（昭和51）年に「北斎館」が完成し、その後、町並み修景事業を経て、新しい観光地としての成功例として全国的な注目を集めている。2005（平成17）年、小布施役場の２階の一室を「東京理科大学・小布施町まちづくり研究所」として、協働事業を行う場として、開設した。大学の先端技術および知識をまちづくりに活かし、小布施町全体を「大学のまち」とする実験を試みている。現在、まちづくりの第２ステージに入り、ハードからソフトに向けて、住民参加型の協働のまちづくりのための施策が行われている。産官学の協働の先進事例として注目されているが、課題は、地域コミュニティとの連携である。これは、観光地としての先進事例に多いパターンである

岩手県遠野市：①「遠野スタイル」に依拠した地域総合力の確立、②「永遠の日本のふるさと遠野」を市の将来像とし、地域経営改革の具現化を目指す「遠野市第三セクター等地域経営改革2009」が、2009（平成21）年に策定された。これは、市の審議会等や第三セクター等、約400ある団体の役割や事業内容を検証し、スリムで横断的な組織体制の構築に努める市の基本方針である。各種団体の自己評価を「第１次評価」、市の所管課が行う評価を「第２次評価」、そして外部有識者８人で構成する「遠野市進化まちづくり検証委員会」と20・30代の若者30人で構成する「遠野スタイル青年会議」を「第３次評価」としてPDCAを回している。事業評価に力点を置き、地域特性を活かしたまちづくりという点で、特色がある地域経営型パターンである。

少子高齢化、都市化等、茨城県内の自治体においても，視察、資料収集、ヒアリング等を行った上記自治体とほぼ同様の問題に、現在、直面して対応している。人口等都市規模や産業構造の違い、そして地域の歴史･文化等の違いから一律に評価できないが、今後、共時的・通時的・多面的・多層的な比較分析が求められよう。とまれ、以下のような点が課題として浮かび上がってきた。

① 既存のコミュニティ（町内会・自治会等）が、少子高齢化等で再編を迫られているため、学区を単位とした多層システムをプラットフォームとする自治体が増えていること。

② 補完性原理を導入し、再編された新しいコミュニティの自立が各自治体の課題となっているが、そこに至るルートは、通時的にも，共時的にも、地域個性が反映すること。

③ 自立のためのマネジメント能力が単位コミュニティにおいても求められてきていること。

④ NPO等「新しい公共」が包摂する多様な団体と共生する既存のコミュニティとの間に、軋轢や排除等があり、グローバル化の社会変容と伝統的な価値観の間にある問題が少なくない。

⑤ NPO法人化したコミュニティ（地縁組織？）も増加しており、変容するコミュニティの多面性や多様化を実態にそくして整理し、分析するためのコンセプト・メイキングが十分なされていないこと。

等、今回の調査・研究から今後取り組むべき課題のいくつかが明らかとなってきた。

（林　寛一）

4．裁判員制度導入に伴う裁判所組織の変容

現代社会における組織変容の法的側面を研究するにあたり、私は、司法行政組織としての裁判所をその対象に選んだ。何となれば、2009年５月21日の裁判員制度導入に伴い、裁判所組織の物的及び人的側面において変容がみられるのではないかと考えたからである。

裁判所にあっては、裁判員裁判用の法廷を新たに設置（場合によっては専用の建物を新築）したり、担当部署を新設するなどの施設や人員の面はもとより、裁判官や裁判所書記官等の職員の意識や姿勢も少なからず変化しているように思われる。そこで、私は、いくつかの裁判所で開催されている裁判員制度説明会及び（又は）刑事（又は民事）裁判傍聴ツアーに参加し、裁判官や裁判所書記官等との質疑応答や聞き取りなどを通じて、その意識等の変化を探ることを試みた。

前記裁判員制度説明会等は、基本的には数多くの地裁レベルでおこなわれている（積極的に広報活動をおこなっているところもあれば、そうでないところもあり、裁判所間で微妙な温度差があるようである）。その中で、大学の学外研修日以外に開催されるもの、個人では参加がむずかしいもの（原則として団体に限定）、当該裁判所所在地の都道府県民限定のもの、事前申し込みが必要ですでに締め切られているもの、参加人数が少数に限定されており（事前予約不可）、当日現地に直接行っても人数オーバーで断られるおそれがあるもの、開催日程が直前に変更されるおそれがあるもの（とりわけ裁判傍聴がセットになっている場合、そのおそれは十分ありうる）を除くと、出張可能な前記説明会等は自ずと限られてくる。

前述のような様々な制約はあったものの、私は、できうるかぎり、それこそ北は北海道から南は九州に至るまで万遍なく前記説明会等に参加するよう努めた。具体的には、札幌、秋田、福島（本庁及びいわき支部）、東京、横浜、神戸、松江、福岡、宮崎、鹿児島（以上、2009年度）、横浜、神戸、山口（以上、2010年度）の各地裁である（横浜・神戸両地裁は各２回赴いた）。ほとんどの裁判所では裁判員制度説明会と刑事裁判傍聴がセットになっているが、東京・横浜・神戸の各地裁は、民事裁判傍聴ツアーも行っている稀有な裁判所である。

なかでも、特筆すべきは、横浜･神戸の両地裁である。このふたつの地裁は、裁判員制度説明会や刑事・民事裁判傍聴会（ツアー）など各種の催しがバラエティに富んでおり（特に横浜地裁）、きわめて充実している。民事裁判傍聴ツアーは、裁判の性質上、そのセッティング等がなかなか大変であり（ハイライトである当事者尋問や証人尋問を見学させるため）、裁判所の担当者のご苦労はいかばかりかと思う。両地裁では、裁判官が説明役を務め、一般の参加者の稚拙な質問にも嫌な顔ひとつせず、懇切丁寧に答えてくれる。とくに神戸地裁では、各民事部が大体１、２カ月おきに持ち回りで裁判傍聴ツアーを開催しており、部総括の挨拶に始まり、それこそ部総がかりで取り組んでいるかの印象を受ける。一般市民に司法を身近に感じてもらおうという真摯な姿勢や熱意がひしひしと感じられ、本当に頭の下がる思いがする。

東京・横浜・神戸以外の地裁では、主として、裁判所書記官や裁判所事務官が説明や案内にあたっていたが、いずれの職員も真摯かつ熱のこもった対応であった。

裁判員裁判が導入される以前（導入が決まる前）は、前記のような説明会やツアーはあまり開催されていなかったし、裁判官をはじめとする裁判所職員は必ずしも市民に身近な存在ではなかったといえよう。しかし、今回、全国の十数か所の地裁を回ってみて思ったのは、程度の差こそあれ、裁判官等の裁判所職員が一致協力、一丸となって、一般市民に司法を身近に感じてもらおう、親しみをもってもらおうと努力しているということである。かつての裁判所と比べるとまさに隔世の感があるが、裁判員裁判導入による裁判所の組織変容といっても過言ではなかろう。

（日向野弘毅）

5．合併に伴う企業組織の変容

企業組織の変化・変容の中でも変化の度合いの大きなものの一つは、合併に伴う変化である。茨城県下で

近年行われた企業合併の事例として、2010年３月１日に関東つくば銀行と茨城銀行が合併して形成された筑波銀行がある。そこで、2010年11月22日に筑波銀行総合企画部調査広報室を訪問し、合併に伴う組織変容の状況と取り組みについて聞き取り調査を行った。その結果は以下のとおりである。

まず経緯について述べると、関東つくば銀行と茨城銀行は、ともに茨城県を地盤とした地方銀行であった。両行の合併の背景には、茨城県のオーバーバンキングという状況があった。また、１県に２地銀程度に集約されるべきという金融当局の方針もあったようである。このような背景のもと、2001年10月に、関東銀行、つくば銀行、茨城銀行の３行が「包括的業務提携」に合意した。これはあくまで業務提携であるが、この時点で将来における統合が意識されていたと推測される。この後、2003年４月に関東銀行とつくば銀行が合併し、関東つくば銀行が形成された。その後、関東つくば銀行と茨城銀行の間で合併に関する協議が行われたが、合併に伴うのれんの負担の問題ですぐには合意には至らなかった。さらに合併破談に関連して茨城銀行による関東つくば銀行への提訴も行われたが、2009年2月には和解が成立した。ただし、この提訴は両行を対立的な関係にしたわけではなく、むしろその逆だったようである。実際に、その２ヶ月後の同年４月28日に両行は合併に基本合意し、2010年３月１日に合併効力発生日を迎えた。

この合併の主な目的は、重複する機能の集約化によるコストメリットの実現である。通常の銀行合併におけるその典型的な方法は、合併に伴って重複立地となる支店の統廃合である。筑波銀行の合併においても同様に支店の店舗統合を進めている。ただし、その方法は「ブランチ・イン・ブランチ（店舗内店舗）形式」である。これは、近距離で同一エリアに重複する旧両行の店舗を実質的・物理的には１つの店舗に統合するが、形式的には２つの支店のまま運営するという方式である。したがって、どちらの店番号も統合後に存続する。しかし、統合後に使用する店舗は、店舗の立地や規模、現地の状況を検討したうえでどちらかに決定し、使用しなくなる店舗から使用する店舗へ人やモノを移転する。これによって店舗の重複を解消し、コスト削減を図っていくことが狙いである。また、店舗統合は既存顧客にとってマイナスの印象を与える可能性があるが、ブランチ・イン・ブランチによる「店舗移転」という方式で形式的には統合対象店舗を存続させることによって、そのような印象を弱める効果も見出せよう。なお、合併に伴って支店の廃止は行われていない（無人ATMのみの出張所の廃止は一部実施されている）。

このような支店統合と並行して、合併前後に人事交流が進められている。すなわち、旧関東つくば銀行の支店に旧茨城銀行の支店出身の行員が異動するなど旧行出身者間の交流人事が、すでに200人を超える規模で行われているようである。今後もこの人事交流を400名近くになるまで実施する予定とのことである。これらを通じて、それまでの銀行で行ってきた業務の仕方を見直し、新たな発想で仕事に取り組む姿勢を行員全体に持たせる効果があるようである。

合併に伴う部署の変化については、存続会社である旧関東つくば銀行の組織図がそのまま踏襲され、旧茨城銀行の行員は、その中のそれぞれ対応する部署に移ったとのことである。したがって、外形的には部署の構成に変化は起きていない。しかし、営業本部のなかに、法人融資開拓チームとビジネスソリューション室が設置された。これは合併に伴う実質的な新設部署である。現在の経済状況では、有望な融資先が少なく、たとえそのような融資先があっても多数の銀行が融資条件を厳しく競い合うため、獲得することが困難である。そのような中、営業の現場では目先の数字に追われて金融商品の提案という手数料収入に力を入れてしまう場合がある。しかし、これからは金融商品売買などの手数料収入は支店での店頭販売にて行う割合を増やし、店外営業では地方銀行の本来業務である中小企業融資の拡大に注力していく狙いがあるようだ。そこで、新たな融資先を開拓するために、専門のノウハウをもった人員を集めた法人融資開拓チームを本店営業本部に設置した。

また、ビジネスソリューション室は、ビジネスマッチングやM&Aに関する事業展開を推進する組織である。これらは支店の営業現場における顧客との情報交換の中で潜在的あるいは顕在的なニーズとして把握さ

れていたが、専門のノウハウを必要とするためにこれまで支店では後回しにされがちな業務であった。しかし、頭取の強い意向のもと、今後はこれらを専門的に推進するための組織としてこの部署を設置した。この部署には、FPや中小企業診断士など約10名の専門的なノウハウをもつ人材を集めた。これらの新設組織はいずれも、これまで必要性は認識していたが、具体的には進められなかった業務を専門的に推進する部署であり、合併を好機に着手したものといえる。また、支店の統合によって余剰となった人員が発生したことがこれらの組織の新設を可能にした面もあるようだ。

本部で勤務する行員については、旧両行の本部勤務者がほぼそのまま合流し、合併後約９ヶ月経過した調査日時点において400名近くである（旧両行出身者がおよそ半分）。これでも20 ～ 30名ほどは減少した数のようであるが、まずは合併に伴う両行の組織融合を優先させた結果である。しかし合併効果を高めるために、今後は本部のスリム化を進めていく必要性があると認識されているようである。

今回、茨城県を基盤とした地方銀行同士の合併における組織変容の事例として、関東つくば銀行と茨城銀行の合併によって誕生した筑波銀行を調査した。その結果、積極的な店舗統合、戦略的な専門組織の新設、旧銀行の枠を越える交流人事といった施策が合併直後から積極的に進められていることが確認された。地域経済が低迷するなか、今後は明確なビジョンと戦略のもと、行員全体がそれを共有しつつ各自の能力を発揮するための効果的・効率的な組織づくりへのさらなる努力が求められよう。

（文堂弘之）

６．住民組織の変容と行政とのかかわり

近年、地方分権の推進、及び市町村合併と軌を一にして、基礎自治体の中に「まちづくり協議会」や「コミュニティ協議会」といった名称の住民組織が作られ、政策形成や政策実施に関与する事例が増えている。これらの住民組織は理念的には住民自治の実現を目指すものであるが、現実には、自治体主導によるいわば「官製の」組織に留まっている事例も少なくなく、行政と住民組織との関係をどのように構築するかが課題となっている。そこで本研究では、先進的な住民自治制度を推進している福岡県福岡市のコミュニティ推進課及び市民公益活動推進課にヒアリングを行い、福岡市が住民組織に対してどのように関与し、どのような支援を行っているのか、またそこにはどんな課題があるのかについて明らかにする。

Q：「自治協議会制度」について

Ａ：平成16年度より実施している。福岡市オリジナルの制度で、住民のみが参加し、行政は関与しない。以前は、市の非常勤特別職員として「町世話人」を設置し、コミュニティに行政情報を伝達したり、協力を依頼したりしていた。しかし、前市長が「地域自治は特定の人を介する関係ではない」という考え方から町世話人を廃止し、地域の自治を作る器として「自治協議会」を発足させた。また、地域には昔から自治会・町内会があり、各種団体がそれぞれ独立して存在していた。例えば体育振興会などは市から補助金が出ていたが、タテワリの弊害があるうえ、146校区全部で同じ内容のことをやっていた。しかし、地域によってニーズは異なる。地域の課題は自分たちで話し合い、合意を形成して推進すべきだ。その合意の場が自治協議会である。だが、146ある小学校区すべてに自治協議会が設置されているわけではなく現在は144に留まっている。市は制度は提案はしたが強制ではないので、地域によっては、現在も各種団体型を続けているところもある。

Q：「自治協議会制度」の予算について

自治協議会の予算は、従来の「人を通じて」「一律補助金」を改め、「統括補助金」とした。原資は各種団体の補助金、及び従来の「町世話人」の予算も原資とし、１校区あたり約300万円ほどである。使い道は地域で自由だが、飲食や各家庭への分配は禁止されている。なお、自治会・町内会からの拠出金や、行政からの報奨金、広告収入といった自主財源については、使い道を制限していない。

Q：「自治協議会制度」の課題について

課題としては、行政の各部局の対応が不十分という指摘がある。例えば、公園改修などを自治協議会を通さず行ったことなどの批判がきたことがある。行政組織は依然としてタテワリ型なので、自治協議会制度との整合性が不十分な分野も多い。加入率の問題もある。

平成18年に実施したアンケートでは、加入率が90％だったが、実際は80％程度と行ったところである。人口減少地区などは、参加者が高齢化したり、人数が減ったりしているので、活動も硬直化しがちである。また「町世話人」を廃止した反発も根強く、事実廃止に踏み切った前市長は落選してしまった。とはいえ、現市長も自治協議会制度の推進に熱心である。基本的には意識改革や人材育成を基本としていくべきである。そのため、コミュニティの総合窓口を地域支援部に設置し、係長級の36人が対応している。また、この制度については行政内部からの批判もある。特にイベントの開催、献血、共同募金といった人を動員しなければならない事業の関係部局からは「人を集めにくくなった」という声が聴かれる。だが、総合的に考えて仕方がないことだと思う。人を無理やり集めるのは、住民の意思を無視した話であり、むしろ積極的に人が集まるような方法を行政が考えるべきだ。現在、市長がトップに立って地域へ依頼する事業の仕分けを行なっている。また、最近も問題として、賃貸マンション・アパートの管理会社が町内会費を払わないケースが多発している。ただ、一部にはマンション管理組合のNPOなども存在している。マンションもコミュニティが付加価値になるような販売方法を模索して欲しい。

Q：「福岡市共同事業提案制度」の概要について

A：「福岡市基本計画」で記されたもので、平成20年度から募集している。事業は３年であり、初年度に選定、２年目に実施、３年目に評価を行う。平成20年度は36事業が提案され、７事業が採択された。平成21年度現在事業実施中であり、平成22年度に評価を行う予定である。また、平成21年度には６事業が採択された。

Q：「福岡市共同事業提案制度」の実施状況について

A：市の職員の方でも、NPOと面識がなかったり、どう付き合っていいかわからなかったり、不安を抱えていることもあるので、担当課とNPOを早い段階から話し合いをさせる。事業採択後に組織される実行委員会には必ず担当部局の職員も入っている。実行委員会にも違いがあり、NPO中心のところもあるが、NPOと行政が半々のところもある。平成21年度に実施中の７事業の感じからすると、事業ごとに差はあるがおおむねうまくいっているようである。基本的には単年度事業だが、５事業は共同事業として継続していくことになっている。また、残りの２事業も発展的に次の事業に繋げていく予定である。

Q：「あすみん夢ファンド」の設立の経緯

A：平成８年の第７次福岡市基本計画に「ボランティア活動支援」を位置づけた（阪神大震災の震災の翌年である）。それから年々いろいろなNPO・ボランティア支援を続けていたなかで、前市長が２期目の選挙のときに公約に掲げた。平成16年度に基金の設置。共同事業提案制度も支援策のひとつである。

Q：どこからどの程度の寄付が集まっているか？

A：個人・法人併せて、１年間に平均７、80万円程度集まっている。昨年度は113万円だったが、最も少なかった平成16年度には64万円だった。寄付はなかなか見込めない独自の取組として、不要入れ歯や、寄付付の自販機の設置も行っている。

（砂金祐年）

７．結びに代えて

本稿の目的は、現代社会のIT化、グローバル化に伴う政治・行政組織、企業組織、さらにはNPOを含めた市民・住民組織の変容過程について実証的な分析を行い、さらにはその分析に基づいて現代組織の変容に関する理論化を試みることにあったが、本論のそれぞれの部分における考察を通して読んでみると、ひとつの興味深い事実が明らかになる。それは、我が国の地方自治体や司法制度、企業組織、雇用システム等が大きく変容した時期を、共通に1997年から2000年にかけての時期であるとしている点である。1997年の「経済構造の変革と創造のための行動計画」の閣議決定（インターンシップ制度の導入）、1999年の所謂「地方分権一括法」の制定、1999年から2000年にわたって「司法制度改革審議会」により制度設計が行われ、2009年に施行された「裁判員制度」など、これらの制度改革はいずれも、現代社会のIT化が本格的に進展したとされる1995年以降に生じた事象である。本稿の段階では、それらの制度改革とそれに対応した組織変容がなぜその時期に生じたのか、に関して詳細な分析を行うことはできなかったが、それは今後のわれわれの共通の課

題としたいと思う。

ところで、本稿のもとになった共同研究は、「リーマン・ショック」直前の2008年の夏に企画された。周知の通り、サブプライムローンによって多大な損失を被ったリーマン・ブラザーズが2008年9月15日、連邦破産法の適用を申請したことをきっかけに生じた世界的な金融危機は、我が国の経済にも極めて大きな影響を与えた。「リーマン・ショック」による経済収縮ならびに雇用収縮は、われわれが研究対象とする諸組織を根底から変える可能性をもつものであったため、当初の研究計画はいくつかの点で重要な変更を迫られることとなった。そしてさらに、2か年計画で実施された共同研究の最終月であった2011年3月11日には、東日本大震災が発生し、2万人を超える死者・行方不明者が出るとともに、福島第一原子力発電所事故が起き、われわれが本稿において分析対象とした諸組織も再び大きな影響を受けることとなった。

図らずもわれわれは、共同研究の過程で、瞬時に劇的な組織変容をもたらしてしまう歴史的な出来事に2度も遭遇したことになる。われわれの研究目的は、IT化、グローバル化の進む現代社会において、異なった領域の諸組織がどのようなメカニズムで変容するのかを分析することにあったが、「リーマン・ショック」以後の世界経済とそれに伴う諸組織の変容は、グローバリゼーションの意味をわれわれに再認識させる結果となった。本稿ではまさに「地方銀行における組織変容」が、「リーマン・ショック」以後の茨城県の企業組織の変容を対象としている。またそれ以外の担当者の論述においても、グローバル化した現代社会のもと、2008年秋以降の経済収縮ならびに雇用収縮が行政組織、住民組織等に与えた影響がいかに大きいものであったのかを読み取ることができるだろう。

さらにまた、東日本大震災と福島第一原子力発電所事故は、政府、企業、自治体、住民組織等の危機管理ならびに情報管理のあり方を根底から問い直すきっかけとなったが、この問題はいまだに収束したとはいえない状況であり、これに関する検討にはさらに多くの時間が必要となるに違いない。2011年3月11日を境に、われわれが対象とする諸組織が、どのような変容を遂げるのか。この問題は、今後のわれわれの共通の課題としたいと思う。

現代社会の組織形態及び組織間関係の
変容に関するアンケート調査

■ IT化、グローバル化といわれる現代社会の急速な変化は、企業組織、行政組織、そして住民組織等に大きな変容をもたらしています。本研究の目的は、こうした時代の変化に伴う企業組織の変容、政治・行政・司法組織の変容、住民組織の変容等について、「市民」の認識を明らかにし、理論化を試みようとするものです。ご多用中、お手数をおかけいたしますが、どうか趣旨をご理解いただき、何卒、ご協力賜りますようお願い申し上げます。

■ このアンケート調査は、茨城県内にお住まいの方3000人を無作為抽出してお送りさせていただいております。アンケートの集計・分析は統計的処理を行いますので、ご回答いただいた方の個人情報等は一切公表されません。また、研究以外の目的には使用しません。

■ なおこのアンケート用紙は、電話帳に記載された世帯主様にお送りしておりますが、**①世帯主様と同一市町村内に居住し、②現在20歳以上**、のご家族様であれば、どなたにお答えいただいてもかまいません（**男性でも女性でもかまいません**）。

■ ご回答は、同封の返信用封筒に入れていただき、平成21年２月28日（日）までにご投函下さいますようお願い申し上げます。

平成22年２月１日

常磐大学人間科学部教授

長谷川　幸一

なお、このアンケート調査は、常磐大学平成21年度課題研究助成（研究代表：長谷川幸一人間科学部教授）の支援を受けて行うものです。

この調査票についてのお問い合わせは下記までお願い致します。

〒310－8585　茨城県水戸市見和１－430－１
常磐大学コミュニティ振興学部
砂金（いさご）研究室
TEL&FAX：029-232-2964
Email：sakin@tokiwa.ac.jp

Ⅰ「協働のまちづくり」についてお聞きします。

問１　あなたの住んでいる市町村におけるまちづくりについて、「市民と行政との協働」はどうあるべきだと思いますか。ひとつだけ○をつけて下さい。

1．基本的に市民が中心となって取り組むべきであり、それを行政が支援するのがよい。
2．基本的に行政が中心となって取り組むべきであり、それを市民が支援するのがよい。
3．市民中心か行政中心かではなく、内容によって互いに役割を分担するのがよい。
4．協働にこだわらず、市民と行政がそれぞれ別個に取り組むのがよい。

問２　これからの「協働のまちづくり」を進めるために、次のそれぞれの主体に特にもとめられるのは何ですか。

問２－１　市民に求められるものはなんですか。３つまで○をつけて下さい。

1．まちづくりに関心をもつこと
2．まちづくりに関する審議会や懇談会などに参加すること
3．まちづくりへの計画づくりや事業実施・運営に参加すること
4．市民から情報提供や企画提案をすること
5．市民からの寄付
6．その他（　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　）

問２－２　NPOなど市民活動団体に求められるものはなんですか。３つまで○をつけて下さい。

1．まちづくりに関心を持つこと
2．まちづくりに関する審議会や懇談会などに参加すること
3．まちづくりへの計画づくりや事業実施・運営に参加すること
4．他の市民活動団体等との情報交換とネットワークを形成すること
5．市民活動団体間をまとめるリーダーの育成
6．その他（　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　）

問２－３　自治会や町内会などに求められるものはなんですか。３つまで○をつけて下さい。

1．まちづくりに関心を持つこと
2．まちづくりに関する審議会や懇談会などに参加すること
3．まちづくりへの計画づくりや事業実施・運営に参加すること
4．市民活動団体等との情報交換とネットワークを形成すること
5．複数の自治会・町内会をまとめるリーダーを育成すること
6．その他（　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　）

問２－４　事業者（企業）に求められるものはなんですか。３つまで○をつけて下さい。

1．まちづくりに関心を持つこと
2．まちづくりに関する審議会や懇談会などに参加すること
3．まちづくりへの計画づくりや事業実施・運営に参加すること
4．専門的な知識を持った人を派遣すること
5．機材・資材・人員等を提供すること
6．場所・施設等を提供すること
7．事業者からの寄付
8．その他（　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　）

問２－５　行政に求められるものはなんですか。３つまで○をつけて下さい。

1．協働のまちづくりに関する啓発
2．協働のまちづくりにリーダーとなる人材を育成すること
3．行政サービス（公共施設や公園等の管理）を委託すること
4．市民や市民活動団体等から活動情報を収集したり提供すること
5．市民や市民活動団体等が活動の相談ができる窓口を充実させること
6．担当職員の意識や能力を向上させること
7．場所や施設を提供すること
8．その他（＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿）

問３　あなたは、日常生活で、家族以外の誰かの助けを借りたいことがありますか。ひとつだけ○をつけて下さい。

1．大いにある　2．多少ある　→　*問３－１にお進み下さい。*
3．あまりない　4．まったくない　→　*問４にお進み下さい。*

問３－１　問３で「1．大いにある」「2．多少ある」と答えた方にお聞きします。誰に助けを借りたいですか。ひとつだけ○をつけて下さい。

1．親戚　2．近所の人や友人　3．居住地区の自治会・町内会
4．NPOなど市民活動団体　5．事業者（企業）　6．行政
7．その他（＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿）

問３－２　どんな助けを借りたいですか。自由にお書き下さい。

Ⅱ　地域の人々付き合いや、地域外の人々との付き合いや信頼についてお聞きします。

問４　あなたは普段、隣近所に住む人びととどの程度付き合いがありますか。ひとつだけ○をつけて下さい。

1．かなり付き合いがある　3．どちらともいえない　5．全く付き合いはない
2．ある程度付き合いがある　4．あまり付き合いはない

問５　あなたは普段、隣近所に住む人々以外と（仕事以外で）どの程度付き合いがありますか。ひとつだけ○をつけて下さい。

1．かなり付き合いがある　3．どちらともいえない　5．全く付き合いはない
2．ある程度付き合いがある　4．あまり付き合いはない

問６　隣近所の人びとは信頼できると思いますか。ひとつだけ○をつけて下さい。

1．十分信頼できる　3．どちらともいえない　5．全く信用できない
2．ある程度信頼できる　4．あまり信用できない

問７　知人か他人かを問わず、一般的に、人は信頼できると思いますか。ひとつだけ○をつけて下さい。

１．十分信頼できる　　３．どちらともいえない　　５．全く信用できない
２．ある程度信頼できる　　４．あまり信用できない

問８　あなたは地域の行事や地縁的な活動に、どの程度参加していますか。ひとつだけ○をつけて下さい。

１．積極的に参加している　　３．どちらともいえない　　５．全く参加していない
２．ある程度参加している　　４．あまり参加していない

問９　あなたはNPO・ボランティア活動・趣味サークルなどにどの程度参加していますか。ひとつだけ○をつけて下さい。

１．積極的に参加している　　３．どちらともいえない　　５．全く参加していない
２．ある程度参加している　　４．あまり参加していない

Ⅲ　司法制度の変容（裁判員制度）についてお聞きします。

問10.　裁判員候補に選ばれたらどうしますか。ひとつだけ○をつけて下さい。

１．すすんで参加する　　２．国民の義務なので参加する
３．いやいやながら参加する　　４．裁判員に選ばれないように理由を考える
５．拒否する

問11　裁判員制度についてどう思いますか。ひとつだけ○をつけて下さい。

１．賛成である　　２．しばらく様子をみてから存廃を決めればよい
３．将来的に廃止したほうがよい　　４．ただちに廃止すべきである
５．わからない

問12　刑事裁判だけでなく民事裁判にも裁判員制度を導入したほうがよいと思いますか。ひとつだけ○をつけて下さい。

１．思う　　２．さほど思わない　　３．まったく思わない　　４．わからない

問13　裁判員制度が導入されたことにより、裁判が従来よりも公正に運営されるようになると思いますか。ひとつだけ○をつけて下さい。

１．思う　　２．さほど思わない　　３．まったく思わない　　４．わからない

問14　有罪か無罪かだけでなく、量刑の判断（どのくらいの刑を課すか）も裁判員が行うことは妥当だと思いますか。ひとつだけ○をつけて下さい。

１．思う　　２．さほど思わない　　３．まったく思わない　　４．わからない

問15　裁判員制度により、裁判官、裁判所書記官等の裁判所職員の意識や姿勢が良い方向に変化すると思いますか。ひとつだけ○をつけて下さい。

１．思う　　２．さほど思わない　　３．まったく思わない　　４．わからない

問16　裁判員制度が導入されたことにより司法が身近に感じられるようになりましたか。ひとつだけ○をつけて下さい。

1．なった　　2．少しなった　　3．ならない
4．なんともいえない　　5．わからない

問17　裁判員制度が導入されたことにより冤罪（本当は無実なのに、間違って有罪という判決が出ること）が減ると思いますか。ひとつだけ○をつけて下さい。

1．思う　　2．さほど思わない　　3．まったく思わない　　4．わからない

Ⅳ　働く環境の変化、及び職業に関する意識についてお伺いします。

問18　あなたは現在、有給の職業についていますか。ひとつだけ○をつけて下さい。

1．ついている　→　*問18にお進み下さい。*
2．ついていない　→　*6ページの問24にお進み下さい。*

問19　働く目的について、あなたは次のどれが自分の考えに一番近いと思いますか。最も当てはまるものひとつに○をつけて下さい。

1．豊かな生活を送るため　　2．社会的名声を得るため　　3．楽しい生活を送るため
4．自分の能力を生かすため　　5．社会に貢献するため　　6．会社の成長のため
7．その他（　　　　　　　　　　　　　　　　）

問20　あなたは、職場ではどんな時に一番生きがいを感じますか。最も当てはまるものひとつに○をつけて下さい。

1．仕事を達成した時　　2．自分の仕事が認められた時　　3．昇進した時
4．自分が成長していると感じる時　　5．同僚との関係が良好だと感じるとき
6．よい上司にめぐり合えたと感じる時　　7．会社に将来性があると感じる時
8．その他（　　　　　　　　　　　　　　　　）

問21　現在勤めている会社の将来について不安に思うことがありますか。最も当てはまるものひとつに○をつけて下さい。

1．まったく不安ではない　　2．それほど不安ではない
3．今は無いが将来を考えると不安である　　4．現在とても不安である
5．以前勤めていた会社が倒産（破綻）したことがある

問22　雇用に関する不安はありますか（リストラされるかどうか心配ですか）。最も当てはまるものひとつに○をつけて下さい。

1．まったく不安ではない　　2．それほど不安ではない
3．今は無いが将来を考えると不安である　　4．現在とても不安である
5．リストラされたことがある

問23　あなたはこの10年間で、何回、転職しましたか。最も当てはまるものひとつに○をつけて下さい。

1．していない　　2．１回　　3．２回　　4．３回　　5．４回以上

問24　退職まで今の仕事を続けたいですか。最も当てはまるものひとつに○をつけて下さい。
1．ずっと続けたい　２．状況が許せば続けたい　３．できれば辞めたい　４．すぐ辞めたい

問25　給与体系（給料の決め方）は、どちらの体系が望ましいと考えますか。最も当てはまるものひとつに○をつけて下さい。
1．各人の業績や能力が大きく影響する給与体系
2．年齢・経験により給与が上がる体系
3．どちらともいえない

問26　退職は、本来、何歳が望ましいと考えますか。最も当てはまると思うものひとつに○をつけて下さい。
1．各人の体力や能力に応じた決め方が良い
2．70歳　３．65歳　４．60歳　５．55歳　６．55歳以下

問27　あなたの暮らしは10年前に比べて、楽になりましたか。最も当てはまるものひとつに○をつけて下さい。
1．とても楽になった　２．やや楽になった　３．変わらない　４．やや苦しくなった
5．とても苦しくなった

最後に、ご回答いただいた方ご自身についてお聞きします。

（1）お住まいの市町村をお答え下さい。
＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿市　／　町　／　村

（2）お答えいただいた方の性別をお答え下さい。
男　／　女

（3）お答えいただいた方の年代をお答え下さい。
1．20代　２．30代　３．40代　４．50代
5．60代　６．70代　７．80代以上

（4）お答えいただいた方は市町村に何年お住まいですか。
1．３年未満　２．３年以上５年未満　３．５年以上10年未満
4．10年以上15年未満　５．15年年以上20年未満　６．20年以上

ご協力ありがとうございました。

職業意識の形成と職業選択に対するインターンシップの意義についてのアンケート調査

- 1990年代以降に生じた我が国における企業・行政・住民組織の変容は、「教育（学校）から職業（企業）への移行プロセス」にも大きな影響を及ぼし、学校から企業への橋渡しを行うことが重要な政策課題として認識されるようになりました。このような状況のもと、1997年（平成9年）にインターンシップ推進施策が開始されて以降、インターンシップ制度は我が国における「教育から職業への移行過程」の変容を象徴するものとなったことは周知の通りです。本調査の目的は、インターンシップの受け入れを実施している全国の企業（事業所）・行政組織等が、インターンシップの意義ならびに現行制度の問題点をどのように認識していかを把握し、理論化することにあります。ご多用中、お手数をおかけいたしますが、どうか趣旨をご理解いただき、何卒、ご協力賜りますようお願い申し上げます。
- このアンケート調査は、インターンシップの受け入れを実施している全国の企業（事業所）・行政組織等1500社にお送りさせていただいております。アンケートの集計・分析は統計的処理を行いますので、ご回答いただいた企業（事業所）・行政組織等の個別情報は一切公表されません。また、研究以外の目的には使用しません。
- ご回答は、同封の返信用封筒に入れていただき、平成22年10月31日までにご投函下さいますようお願い申し上げます。

平成22年10月１日

常磐大学人間科学部教授

長谷川　幸一

なお、このアンケート調査は、常磐大学平成22年度課題研究助成（研究代表：長谷川幸一人間科学部教授）の支援を受けて行うものです。

この調査票についてのお問い合わせは下記までお願い致します。

〒310－8585　茨城県水戸市見和１－430－１
常磐大学人間科学部
長谷川研究室
TEL&FAX：029-232-2693
Email：hasegawa@tokiwa.ac.jp

Ⅰ　貴社で行われているインターンシップの実施内容についてお尋ねします。

問１　インターンシップの受け入れ期間はどれくらいですか。（１つだけ○をつけてください。複数の受け入れパターンがある場合は、⑤その他に詳細を記入してください。）

①１週間未満　②１～２週間未満　③２週間～１ヶ月未満　④１ヶ月以上

⑤その他（　　　　　　　　　　）

問２　実施時期はいつごろですか。（１つだけ○をつけてください。複数の時期を設定している場合は、⑤その他に詳細を記入してください。）

①夏休み期間　②春休み期間　③冬休み期間　④学期期間中

⑤その他（　　　　　　　　　　）

問３　どのような経路を通じて学生を受け入れましたか。（１つだけ○をつけてください。）

①学校からの要請　②社外（団体・行政等）の要請　③会社独自の企画

④その他（　　　　　　　　　　）

問４　貴社が受け入れを始めたのはいつですか。（１つだけ○をつけてください。）

①1997年～ 2000年　②2001年～ 2004年　③2005年～ 2008年　④2009年～

⑤不明

問５　本年度は、何名の学生を受け入れましたか。あるいは、受け入れる予定ですか。（１つだけ○をつけてください。）

①１～９名　②10 ～ 19名　③20 ～ 29名　④30名以上

問６　実務経験する職務内容をご記入ください。

（　　　　　　　　　　）

問７　受け入れ部署をご記入ください。

（　　　　　　　　　　）

問８　対象学部・学科等はありますか。（②の場合はその部署を記入してください。）

①ない　　②ある（＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿）

問９　受け入れの際の学生への報酬取扱い。

①支給　　②無給　　③その他（＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿）

問10　受け入れの際の学生への交通費の取扱い。

①支給　　　　②一部支給　　　　③学生負担

Ⅱ　インターンシップの意義と問題点についてお尋ねします。

問11　貴社はインターンシップの実施に対し、どのような効果を期待しますか。（３つまで○をつけてください。）

①社内の活性化

②学校や学生に対する自社のPR効果

③学生の意見から社内の問題点を理解する

④学生の職業意識・能力を高める（企業の社会貢献）

⑤学校や学生との交流経験による採用活動へのプラス効果

⑥自社の求める人材像や必要とされる能力を学校や学生に伝える効果

⑦その他（＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿）

問12　インターンシップを実施する上で難しいのはどのような点ですか。（３つまで○をつけてください。）

①インターンシップ制度に対する社内の理解を得ること

②募集、選考体制の整備　　　　③受け入れ部署の確保

④指導担当者の確保　　　　⑤指導計画・プログラムの作成

⑥実習用の教材の作成　　　　⑦実習場所や備品などの確保

⑧学校との連絡体制の確立　　　　⑨予算の確保

⑩関連する社内規定の整備　　　　⑪保険の加入等事故への対応

⑫その他（＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿）

問13　インターンシップの今後についてお聞きします。（1つだけ○を付けてください。）

①企業と学生の双方にとって効果があるので、存続させるべきである

②企業にとって実施上の困難が多いので、それを改善して続けるべきである

③企業にとって何のメリットも無いので、廃止すべきである

④学生の職業意識の向上にはつながらないので、廃止すべきである

⑤現在のインターンシップではなく、新しいコンセプトの制度を作るべきである

⑥その他

（　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　）

問14　インターンシップ制度に対するご意見を自由にお書きください。

Ⅲ　最後に、貴社の事業内容等についてご記入ください。

（1）業種（　　　　　　　　　　　　　）

（2）事業内容（　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　）

（3）資本金（　　　　　　　　　　　　）

（4）従業員数（　　　　　　　　　　）

ご協力ありがとうございました。

論　文

宮崎アニメ『千と千尋の神隠し』における久石音楽の特徴

岡部　玲子　　　三宅　光一
OKABE Reiko　　MIYAKE Mitsukazu

Hisaishi's musical features in Miyazaki's animated film "Spirited Away"

The purpose of this paper consists in researching what features Hisaish's film music has and his way of thinking about composing it, focusing on the work titled "Spirited Away".

In general, in case of Hisaishi's composition of the film music he constantly intends to compose according to rules of the film art and requirements of the movie director. For instance, the main thematic music of "Howl's Moving Castle" is typical for his way to compose. This very popular tune is named "Merry-Go-Around in Life", which has the force of expression required in every character or scene represented.

On the other hand, as far as Chihiro's story is concerned, there doesn't exist, strangely enough, such a main thematic music that could keep the internal consistency of atmosphere of story itself. Instead, the common part of three tunes, i.e. "To That Summer（あの夏へ）", "The River of That Day（あの日の川）" and "The Day of Returning Home（帰る日）", plays a crucial role in "Spirited Away". In other words, while the heroin Chihiro is struggling hard to get good results in the new extraordinary circumstances, it rings on the appropriate occasions through the whole story. Slightly as it does, the appearance of these tunes, especially their common part, implies that the end as final purpose of actions is directed toward going back the way she came from.

In a dramatic representation, there ought to be a hero, or a heroine who sustains the chief part with no exception. And all the other characters belonging to the scene are subordinate to him or her. Appearance of various kinds of characters is depicted with instrumental accompaniment. Because it is indispensable to make use of such a technique, in order to make clearer the presence of such fictitious unreal figures as Yubaba（湯婆婆）, Zenība（銭婆）and Kao-nashi（カオナシ）and the like.

Last but not least, it is also worthy of remark that the idea of getting on a tram as a final stage shows sign of Chihiro's growing -up of great importance. But at the same time, impressions produced by the tune "The Sea（海）" must be regarded as lying entirely beyond the screen of visual experience and knowledge. It means that the effect on us, the audience, has uncovered its vivid real meaning hidden under a veil of distortion, deception and unknowingness in our everyday life.

Hence with Hisaishi we strongly feel conscious of subordination of film music to the movie. In spite of all this, there is any room for composing the object that the movie director either has failed to depict on the screen, or can accomplish insufficiently owing to the fantasy of stories. In trying to replace visual image on the screen by appeal of the auditory function, Hisaishi attempts to find a new collaboration between pictures on the screen and the instrumental accompaniment and musical songs to which they are attached.

まえがき

視覚芸術の映画にとって、音楽は欠かすことのできない道具装置である。アニメ作品も映画芸術の一形態である以上、そのような重要性に何ら変化はない。それどころか、実写映画という虚構性に輪をかけて、虚構の虚構とも称すべき芸術形態がアニメーションの特徴であってみれば、観客の心に本当らしさの念を惹き起こして、観客を物語世界に引き込むためには、あるいはまた緊張のあまり手に汗を握るような真剣さを喚起するためにも、聴覚芸術の効果に援けを借りずには済まされない。もっとも、そうした類の効果を上げるためには、やはりストーリーの良さや素晴らしい映像、魅力ある台詞回しなどへの配慮が、当然ながら必要とされてくる。従って、少しでもアニメ作品の本質に触れれば、諸芸術分野を結集した「総合芸術」的な側面の特徴がそこに伏在することに気づくであろう。つまりアニメ作品における音楽は、色彩や画面構成、光景など諸々の要素との機能的関連のうちに位置づけられて、成立しているのである。

上述の点がアニメに関する問題に対して正鵠を射ているとして、あるいはまたそれを前提に踏まえた上での話であるが、ひとつの疑問が湧いてくる。すなわち、では果たして音楽と映像、つまり聴覚芸術と視覚芸術との関係はどのようになっているのだろうか、といった疑問である。こうした問いかけは、全般的にみて、リアルな映像世界を演出すべきアニメ創作に係わる大きな問題であることは言を俟たない。それはいまだ決着を見ないまま、問われ続けている。おそらくは将来共に決定的な解答に到達しがたい性格のものだろうが、音楽の絵画映像に対する積極的な働きが、何らかの形で成立していることは疑いを容れない。

宮崎アニメは世界中で広く知れ渡り、絶賛されているが、その要因のひとつとして久石譲の音楽的魅力を挙げることができよう。本稿では、『千と千尋の神隠し』という個別の作品に限定して、そこにおける久石音楽の働き、さらには彼の音楽観の一端を究明していきたい。

1. メインテーマ曲に対する久石譲の思い

実写映画にせよ、アニメ映画にせよ、すべからく映画は無声映画でない限り、映像世界に密着して、音楽が活発に躍動する。しかし、よく考えてみると、初期の無声映画時代でもスクリーンの前で楽団が生演奏をしていた。また画面を眺めると同時に、演奏に耳そばだてながら、弁士が巧みに弁舌をふるっていた。「まえがき」で指摘したように、およそ映画というものには、視覚芸術と聴覚芸術との協働作業がその構成上、不可欠なのである。映画音楽は、物語の状況や登場人物の感情を伝達する重要な役割を担っている。普通そこでは、全体を通して頻繁に使われるメインテーマ曲が存在し、このテーマ曲の変奏やその曲自体の一部が様々な場面で使用されることにより、全体の音楽的な統一を図っていることが多い。久石の場合、個別の映画作品に対してそのメインテーマ曲を何にすべきであるかを見定めること、そしてそれを創作することを通じて、作品世界に入り込む契機を見つけるという。

「僕はやっぱりその映画で監督が何を訴えたいのかというテーマに主眼を置きたい。

もちろん映画は重層的なものだが、例えば監督が訴えたいのが『人生ははかない』ということだったとしたら、その『はかなさ』を表現できるようなメインテーマ曲を作り、それを感じるシーンを中心に、その音楽を変化させながらつけていく。そんな監督目線の音楽でありたい。[1]」

このようにどのような種類の映画であれ、メインテーマ曲は久石にとって、その映画の死命を制するほどに重要な位置を占めていると言ってよい。そうだとはいえ、監督・宮崎の要求は把握しがたいものになりがちである。

「いつもイメージポエムというか、キーになる言葉を頂いているんですが、『もののけ姫』のあたりからは、だんだん言葉だけじゃなくて、そこにこめた想いというか、ちょっと詩に近いものも頂けるようになってきました。それを核にしてこちらでもってイマジネーションを膨らませていました。[2]」

2001年２月12日、スタジオ・ワンダーステーション

でのインタビューに、久石は、このように答えている。それでは、『千と千尋の神隠し』のメインテーマ曲は何であろうか。実は、この作品では、全体を貫いて主軸を成すような音楽、それを様々にアレンジして、背景で頻繁に流されるような音楽、いわば通底的な音楽は存在しない。だが、そのような中にあって、最初に登場する楽曲《あの夏へ》は、後から出てくる楽曲の《あの日の川》と《帰る日》とに対して、一定の類似性および連携性を保っている。つまり、中心部を形成する部分においては、３曲において同じメロディーが使われているのである。そこで、まずはこれら３曲を比較することにより、『千と千尋の神隠し』における音楽の使い方の特徴を探ることとする。比較しやすいように、３曲のタイムテーブルを作成し、それを［表1］（pp.43-45）に示す。この表を参照しながら、以下の第２、３、４節でこの作品のメインテーマ曲ではないが、それに近いものと言ってよい音楽について考察したいと考える。それに加えて、登場人物特有の音楽付与という現象も認められるので、第６節では、登場人物に付随する音楽に関しても関心を向けたい。まさにその点にこの作品世界を活写させる要因が含まれてもいるからである。

２.《あの夏へ》について

《あの夏へ》（［譜例］pp.40-42参照）という音楽は、『千と千尋の神隠し』という物語世界の冒頭で流される。曲の構成は、［序奏（第１－６小節）－A（第７－22小節）－B（第23－30小節）－C（第31－42小節）－D（第43－64小節）－コーダ（第65－68小節）］となっている。

序奏はアルペジオの和音で始まる。それは穏やかで、平凡な日常生活の様子を感知させるものであり、画面上では10歳の主人公・千尋が父の運転する車（アウディの４WD）に母とともに乗り、ふてくされたような恰好で後部座席に寝そべっている。ストーリーは一家の引っ越しで、新居へ向かっているという設定である。この部分は、表1の左側のラインに見るように、車内における家族のごく平凡な会話の場面である。―「やっぱり田舎ねえ」、「買い物は隣町に行くしかなさそうね」といった母親の愚痴に対する父親の言葉、「住んで都にするしかないさ」というところからA部分のメロディーが始まる。映像では千尋の人物設定の明示に主眼が置かれる。宮崎監督の言葉を借りれば、「かこわれ、守られ、遠ざけられて、生きることがうすぼんやりにしか感じられない日常の中で、子供達はひよわな自我を肥大化させるしかない。千尋のヒョロヒョロの手足や、簡単にはおもしろがりませんよゥというぶちゃむくれの表情はその象徴なのだ[3]」といった現代っ子の姿が、まず印象づけられる。

こうした主役設定は、従来の宮崎アニメにはない珍しい発想と言うべきである。宮崎監督がよく接していた少女たちの存在が、そこには介在していた。宮崎の証言によれば、毎年の夏に３日間ほど、鈴木敏夫プロデューサーと共通の友人が、信州の「山小屋」と呼ばれた宮崎の仕事場に訪れていた。その際、その友人は娘たち４、５人を連れて来た。彼女たちは10歳の女の子であるが、４、５歳ごろから一緒に遊びに来ていたらしい。

> 「とにかく僕は、この映画を作ろうと思った非常に大きな動機や、千尋のような主人公を作ろうと思ったきっかけを、全部その幼い友人たちからもらったものですから、その子供たちが喜んでくれたらおじさんの勝ちという気持ちで、けっこう真面目に勝負をかけたつもりです。[4]」

宮崎監督の少女への温かい眼差しは、日本のアニメ界における80年代以降の少女ブームと軌を一にするかのように、作品の主役決定に際しては圧倒的に女の子を選び続けた。言い換えると、超能力的な才能を持ったナウシカや空を飛ぶ魔女のキキ、意志の強さを内に秘めたシータ、さらにはシシ神の森を守ろうと、敢然と立ち上がる野生児サンなど、男勝りのパワーと女の子らしい優しさとを同時に兼ね備えた魅力ある主人公にスポットを当ててきた。少女の訴えは、そうした理想的で完璧な主人公は現実とは随分隔たりがあって、作品を観ていると、自分とはまったく無縁な存在であるといった違和感と疎外感に襲われるところから生じていた。簡単に言ってしまえば、もっと等身大の主人公を登場させてほしいというものであった。そうした感想に触発された宮崎監督は、それでは少女の望みを

叶えようと思い、現代っ子気質の千尋を描き出したのだった。従って、当該作品のキーワードが「平凡な少女」となることは注目してよい。

「現実がくっきりし、抜きさしならない関係の中で危機に直面した時、本人も気づかなかった適応力や忍耐力が湧き出し、果断な判断力や行動力を発揮する生命を、自分がかかえていることに気づくはずだ。
　もっとも、ただパニックって、＜ウソーッ＞としゃがみこむ人間がほとんどかもしれないが、そういう人々は千尋の出会った状況下では、すぐ消されるか食べられるかしてしまうだろう。千尋が主人公である資格は、実は喰い尽くされない力にあるといえる。決して、美少女であったり、類まれな心の持ち主だから主人公になるのではない。その点が、この作品の特長であり、だからまた十歳の女の子達のための映画でもあり得るのである。[5)]」

ここに千尋の物語の根本性格が表明されている。それはつまり、ひ弱な主人公の成長物語という基調で貫かれているということなのだ。成長を可能とするためには、千尋にとって新たな生活環境、つまりは逆境が用意されなくてはならない。それが湯婆婆の支配する不思議な町であり、銭婆の住む「沼の底」の英国風な農家であった。ただし、前者の労働を強制する世界では、外部からの強迫によって絶体絶命の千尋は、内面に宿る潜在力が喚起されるのに比較して、後者の空間では銭婆が自力による解決しか方法がないことを論し、千尋に奮起を促すのである。そして銭婆はこれまでの勇気を讃えて、髪留めという勲章を与えて励ます。それ故、「逆境」の意味は、両者において若干の差異が認められよう。

《あの夏へ》において、A部分に後続するB部分では、周りの風景を見渡し、そこを千尋たちの乗った車が走っていく様子が映し出される。C部分に入ったところで、２小節にわたり、タイトル「千と千尋の神隠し」という文字が画面に浮き出て、その間も画面の背景絵では、引っ越し先に向かう途中の変哲もない住宅街の風景が写し出される。44ページにある［表１］の左側のラインで確認できるように、このB部分およびC部分前半では会話はなく、日常の風景に呼応するかのように、のどかに音楽が流れていくばかりである。

ところが、C部分の後半からは、道を間違えたかもしれないという父親の発話が発端となり、続くD部分に対応する場面では、にわかに千尋と母親が不安に思い始める。そのところから、父親はむきになったように車を暴走させるのである。D部分は、C部分までの♩＝82に対して♩＝108にテンポが変化し、３連符を使用する等、音楽は一転する。しかし、41ページの［譜例］第43小節以降に見るように、実は、D部分でもA部分のモチーフaが利用され、A部分と関連付けられている。

これら一連の流れのうちで注目すべきは、不気味な不協和音が現れる個所である。それは２ヶ所ある。１ヶ所目はC部分の終わり、第42小節の$\mathrm{F}_{M7}^{(11)}$の和音で、祠が千尋の目に入った場面である。第42小節は４/４拍子の曲中にあって、この小節だけ３/４拍子に変化しており、異質さが目立っている。今まで刻んでいた規則的な４拍子から外れることで、一段の緊張感が表出され、それは直接に千尋の驚きや恐怖へとつながっていくのである。

もう１ヶ所は、D部分で、$\mathrm{E}^{\flat}{}_{M9}^{(11)}$の和音が鳴らされる第57小節である。その当該個所を映像で観るならば、それは不気味な石像が千尋の目に入ってくる場面になっている。和音は３拍目の３連符の３番目から次小節へタイで延長される。この和音に続き、第58小節の３拍目に、$\mathrm{D7}_{sus4}/\mathrm{E}^{\flat}$の和音が現れる。この時点は、もう一度千尋が石像を見た場面の描写に対応している。第57－58小節では、拍や小節の頭ではないところに変化和音、すなわち、この曲の調に属さない和音が２回現れる。そのことにより、さらに緊張感（千尋の驚き・恐怖）が助長されるのである。このように曲調の推移は、千尋当人ないしは彼女を取り囲む状況の急変に巧みに対応させられている。

その他の特徴としては、D部分、第52小節の後半で和音が打ち鳴らされたり、第53－56小節にかけて、ストレッタが使用されたりしていることが挙げられる。ストレッタとは、フーガなどでテーマの入りが次々とたたみかけるように重なって入っていくことである。ここの場合は、［譜例］の第53－56小節に見るように、

４拍分のモチーフ（aの変形）が、３拍ずつで次々と入ってくる。こうすることで、車が暴走する際の緊迫感を盛り上げる効果が生み出されてくる。

狂ったような車の暴走運転にも、やがては終息が訪れる。苔むした不気味な石像とその後ろにある大きな赤い壁に、あやうくぶつかりそうになって、父親は急ブレーキを踏み、停車させるのである。その壁はどうやら門のようであり、そこにぽっかり空いたトンネルのような入り口が、その奥を隠すように、また奥へと誘うように暗闇につながっていた。ここでの久石の手法は停車させた後、間を置かずそびえたつ赤門の巨大な存在を感じさせるように、《あの夏の日》の最後の4小節を壮大な和音で表現している。この同じような和音は、千尋が初めて驚きをもって油屋を見上げた時や、最上階にある湯婆婆の御殿へ、リンに案内されてエレベーターで移動している間にも使用される。エレベーターの隙間からは、ヒヨコの神様たちやイカのような手をした牛鬼が湯船に浸かっている。およそ現実にはあり得ないような、異様な光景が垣間見える。この場合と同じような和音の使い方を、赤門の突如とした出現の場面で採用しているのである。すなわち、千尋たち三人と共に、観客たちにも目を見張る光景が画面いっぱいに広がり、またそれと同時に、画面の壮大な空間に対してたじろぎ、身を引きたくなるような感覚を覚える場面である。そういうことから、この感覚を一層効果あらしめるために、最後の４小節が配置されたと解釈できる。

ゆったりとした流れから、やがて何かしら不安を伴う緊張感が芽生え、増殖し、その頂点で異様でたじろぐような物に直面する――次いで一呼吸の間を置いた停滞。ファンタジーの一典型は、現実世界から架空領域に踏み入れるプロセスが組み込まれることにあるが、それはよほど慎重に描くのでなければ、作品は失敗に帰するであろう。何故なら、世にも不思議な世界で、あり得ないような出来事とか異色の登場人物の言動とかが繰り広げられるので、多少でも嘘っぽい話の印象が、観客や読者に芽生えると、物語全体がぶち壊しになるからである。C.S.ルイスの冒険ファンタジーとして名高い『ナルニア物語』にあっても、工夫の跡がうかがえる。主役である四人の兄弟姉妹がロンドン空襲を避けて疎開して来た場所は、ある学者のお屋敷だった。その一つの部屋に衣裳ダンスが置いてあり、中には外套が吊るしてあった。子どもたちは隠れん坊をしていて、衣裳ダンスの中に入り込み、吊るされた長外套をよりわけながら進むと、やがて雪の積もったファンタジーの世界に足を踏み入れて行く[6)]。また同じく英国作品の『不思議の国のアリス』は、ナンセンスファンタジーというジャンルを切り拓いた画期的な作品として評価が高い。主人公のアリスは蒸し暑い日に、姉と共に木陰で休んでいると、チョッキを着て時計をポケットから取り出したウサギを見かける。アリスは走り出したウサギに興味を抱き、その後を追いかけて、不用意に生垣の下のウサギの穴に跳び込む。そこを通っていく途中で縦穴に落ちて、ついには地球の底まで墜落する。着いた所が、不合理な論理で貫かれたトランプの世界だった[7)]。狭いタンスや細長い穴を潜り抜けて、やっとファンタジーの世界に躍り出るのである。

もちろん物語の冒頭部におけるこの重要さは、宮崎監督の百も承知の事柄である。というのは、彼はどのような作品でも最初の展開で観客の心を掴むことに専念するからである。例えば、『ハウルの動く城』のように、ガラクタを集めた奇妙な塊が煙突から煙を吐きながら、丘の地平線の彼方から姿を見せ始め、靄の中を徐々に浮上するように全身を露わにする。観客はその光景に心を奪われる。実に魅力的な演出法である。

『千と千尋の神隠し』の冒頭は、ファンタジーの世界に入り込むまでが、他の作品と比べて長く展開される。車で道を間違えて、一本下の道から赤い門にたどりつく。だがその先にトンネルがあり、そこを出た所でまだ先がある。眼前に広々とした晴れやかな原っぱや丘が控えており、大きな石ころだらけの岩場を乗り越えて、やっと対岸の船着き場に着く。そこが不思議の町のはずれである。ファンタジーの世界に踏み込むまでの道程が、長く描き込まれている。このように慎重な配慮は、スピーディーな展開を信条とする宮崎アニメの手法を勘案すると、きわめて異例である。どうかすると、観客を白けさせ、飽き飽きさせる恐れもある。そこを久石の音楽が、補って余りある効果を生み出すのである。

［ゆったりとした日常の流れ→不安の醸成→猛烈な勢いでの車の突進→赤い門前での急停車（《あの夏へ》の音楽はここで終わり、以後は《帰る日》のG部分に似た音が断片的に使用される）→暗がりの中の前進→原っぱや丘の歩行→岩場の乗り越え→異境世界の外れである船着き場]。

観客の視覚認識に頼るだけでは、間延びしそうな展開に対して緊張を維持することは困難である。だが他方で、巧みな音楽の伴奏がある。ここでは主として音楽が、観客の感性に躍動的な刺激を与え続けて、観客の目を画面に引き付けていく働きをする。飽きさせずに、先に何が見えてくるのか、知りたいといったことへの欲求、その期待感で観客の心は導かれていく。《あの夏へ》の音楽の魅力がここで存分に発揮されるのである。

３．《あの日の川》について

湯婆婆の許しを得て油屋で働くことになった千尋は、一応この不思議な異境世界において、姿を豚や煤に変えられることもなく、自分の居場所を確保した。ただ、それはもろ手を挙げて喜ぶべきものではなかった。一生涯、働き詰めに働くかもしれないのだ。ハクに連れられて、千尋は豚舎の両親に会いに行き、何とも仕様のない自分の状況に打ちひしがれて、ふさぎ込む。《あの日の川》の音楽が流されるのは、この状況の後である。

《あの日の川》は、[序奏（第１－８小節）－Ａ（第９－24小節）－Ｂ（第25－32節）－Ｃ（第33－44小節）－Ｅ（第45－54小節）－Ｆ（第55－63小節）］という構成をとる。序奏は、《あの夏へ》の曲の場合より２小節多い（43ページ［表１］の真中のラインを参照）。これは、先行場面からの続きを引き受ける場面転換として使用に供されたものが、最初に２小節配置されたためである。だが、その後の６小節間の序奏とA・B・Cの各部分は、《あの夏へ》の曲と同じ音楽が繰り広げられていく。

場面転換後の序奏とA部分は、橋の手前にある和風の庭でハクと千尋とが会話を交わす場面、つまり［表２］のｔ（４）とｔ（５）との間にある場面である。BとCの部分は、千尋がハクに勧められたおむすびを泣きながら食べる場面である。異常な体験の連続と両親の豚への変身、両親との別れなど、あまりにも過酷な体験のために、千尋はショックを受けて、空腹を満たす気も起らない。おむすびを食べ出しても、千尋の口からは言葉が出てこない。悲しい泣き声は嗚咽にならないで、ただ唸るだけである。だが、Ｃの部分になって、活力の糧である食べ物がおなかの中に入って来ると、大粒の涙を流し、「うわーん　わーん」と大きな声で思いっきり泣き叫び出す。心にたまったものを力の限り吐き出すというのは、生命力の回復と生きる意欲の出発点である。その意味では、生きるためには、何を差し置いても、まずは食べ物を摂取することなのである。

宮崎アニメの場合、飲食の行為を醜悪に描く例がないこともない。『千と千尋の神隠し』において両親は豚になっても、食べ漁ろうとする浅ましい場面、またカオナシが暴飲暴食に走って身体が肥大化するといった場面はその事例であろう。だが、このようなシーンは、宮崎アニメにあっては例外的な扱い方である。『ルパン三世　カリオストロの城』の主人公が負傷の身を寝床に横たえながら、猛烈に食べ物にパクつき、『天空の城ラピュタ』ではドーラが、大きなハムを口にくわえたまま引きちぎって、ムシャムシャ食べる。こうした豪快な食べぶりは、必ずしも行儀のよいお手本とは言えないけれども、ユーモラスな光景を誇張しながら、よい意味で人物の内面に秘めるバイタリティーを表現している。子ども向けの児童文学が食べ物や料理の醍醐味を強調するのと同様に、宮崎アニメも食べることへのこだわりを見せる。基本的に宮崎監督は食べ物を生命の源と捉えている。それで彼のアニメ作品では、食べ物を食べるシーンが再三にわたって描かれるのである。しかも、どれもこれもおいしそうに描くので、観客はそのシーンを眺めていると、大いに食欲を刺激されるというわけである。ハクが元気が出るように、おむすびにおまじないをかけてくれたこともあるかもしれないが、鬱屈した感情を吐き出した千尋は、ここで大泣きすることで、辛さや不安、心細さなどの消極的な気分が、吹っ切れてしまう。油屋で働いて、その後の活路を見出そう、前向きに生きていくのだといった覚悟が出来上がる。リンが「どこへ行っていた

んだよ。心配してたんだぞ」と言葉をかけるのに対して、千尋は晴れ晴れと「ごめんなさい」と謝りながら、さっさと布団の片づけに入る。このおむすびの場面はそうした意義を孕んでいる。

新たに出てくるE部分は、映像との対応関係で見れば、ハクと別れて、橋を渡り湯屋へ向かう時、橋の上から振り返りざま、白竜を眺めている場面である。竜が空を飛ぶ様子を4小節半にわたって表現している。その後に出てくる4小節間の和音は、湯屋に戻る場面の場面転換のような役割を果たしている。

続くF部分では、A部分とC部分で使われたモチーフが再び現れる。釜爺のところ（ボイラー室）で寝込んでしまった千尋に釜爺が気づき、優しく布団をかけたりする印象に残る場面である。昔話や童話の定番として主人公を支援する助け手が、必ずといってよいほどにストーリーの展開上で登場してくる[8)]。他の宮崎アニメでも、例えば、『天空の城ラピュタ』における空賊の女親分ドーラ（悪人として登場するが、実は主人公に肩入れする）や『魔女の宅急便』のパン屋のオソノさん、女絵描きウルスラなどが、その役柄の典型例である。同様に千尋の助け役は、「油断するなよ。何かあったら、おれに訊けよ」と言うリンであり、釜爺である。

ハクも千尋への助け役だという一面は否定できないが、彼の場合にはそれよりもむしろ、準主役的な立場を優先的に考えるべきである。千尋は湯屋の前で偶然にハクと出会う。確かにハクの助けが初手からなければ、不案内な町で右往左往ばかりで、千尋におけるその後の展開は起こり得ないと思われる。第一、この世界の物（例えば、赤い実）を食べるように、助言し導くハクが存在しなければ、千尋は不思議な町の食堂街をさ迷う黒い影になってしまう。そうなると、物語はまったくのところ成立しないだろう。何くれとなく助けてくれるハクではあるが、彼はリンや釜爺とは違って恋人のような準主役の位置を占める。千尋が成長を遂げたあかつきに、いや、むしろそのことを実証するために、今度は死の淵に立たされたハクを助けようとするからである。愛の報恩は、不思議の町に来るはるか以前に、現実世界のコハク川で溺れそうになった幼い千尋を岸辺まで運んで、命を救ってくれたことにまで及ぶ。その意味からもハクの立ち位置は、リンや釜爺のような単なる脇役の助け手とは一線を画すことを言い添えておきたい。

油屋全体は過酷な仕事にたえずせき立てられ、邪険な態度を取る従業員や抜け目のない使用人たちの集う場所であるが、例外的に心の緊張がほぐされ、癒しの空間になるのが、唯一釜爺のいるボイラー室である。元の世界で着ていた千尋のTシャツや運動靴、靴下を保管してくれるボイラー虫というお友達がいる。親切な釜爺もいる。穏やかで和むような音楽が再現されるのは、そこが暫しの間、安心して眠っていられる空間であることを意味する。

4.《帰る日》について

［表2］で示したように、最後の山場ともいうべきZ場面「クイズ解き」が、試練として千尋の眼前に横たわる。そこの音楽は次のように展開することになる。すなわち［冒頭部（第1－12小節）－序奏（第13－18小節）－A（第19－26小節）－B（第27－34小節）－C（第35－46小節）－G（第47－57小節）－A'（第58－64小節）－コーダ（第65－70小節）］という具合である（［表1］の右側のラインを参照されたい。ここでは前出の2曲との比較のため、序奏の前の部分を冒頭部と呼ぶ）。

冒頭部12小節は、《神さま達》のメロディーで構成されている。物語の展開といった観点から見れば、千尋のクイズの答えに「それがお前の答えかい？」と湯婆婆が問い詰めるといった状況が映し出される。千尋は「うん」と頷く。するとそれに即応して、湯婆婆の手に握られた千尋との契約書は、ボンと爆発音を立てて煙となり、消え失せる。と同時に、《神さま達》の音楽が鳴り始め、次の瞬間、目の前に連れ出されていた豚の群れも、呪いの魔法が解けて、パッと湯屋の従業員の姿に戻り、一斉に「大当たりー」と祝福するように叫ぶ。すると油屋の塀に居並ぶ従業員や油屋正面の階上の手すりで見守っていたオシラ様、その他の客人の神々からも、千尋はやんやの喝采を浴びる。クイズの当否しだいで、千尋と両親の運命が決まってしまう。緊張の瞬間が訪れ、急転直下、千尋が祝福を受けるこの場面の到来である。そこでは溜まりに溜まった何かしらの障害と停滞とが一気に振り払われるような

感じである。実に賑やかで屈託のない明るさでこのメロディーが奏でられ、文句なく千尋に対する祝福の構図となっている。「みんな、ありがとう」（千尋）―「行きな。お前の勝ちだ」（湯婆婆）。悔しそうな湯婆婆を除いて、だれもが千尋の味方である。これ以上はあり得ないぐらいに鳴り響く《神さま達》の音楽は、けたたましくも非常に個性的な琉球音楽や異国情緒にあふれたガムラン音楽に使われる5音音階で出来ている。

この音楽を聴いていると、映画の開始部の一場面が想起される。同じ曲が映像を通してここで鳴り響くのだから、想起されるのは当然と言えば、当然であろう。だが、その印象は大幅に異なるものである。不思議な町での最初の頃、ハクの忠告（「ここに来てはいけない。すぐに帰れ！」）に促された千尋は、急激に夕暮れが迫りくる中、元の道を取って返す。だが、いつの間にか岩だらけの場所が水の流れる河に早変わりしていた－m（２）。そのために千尋は、向こう岸に見える時計塔の建物にたどりつけなくなったのである。うろたえながら不安に陥り、なすすべもなく千尋はおっかなびっくり佇んでいた。その時、彼女の不安を増幅させるように、フェリーが川を渡って近づいて来る。船内からは、春日さまを筆頭にして奇っ怪な神々が続々と降り立つのだが、その際にも、この騒々しく賑やかな音楽が鳴り響いていたのだった。ところが、物語の終わり近く、「クイズ解き」の場面Ｚになると、もうすでに千尋は、そのような戸惑う少女からは脱皮して、応援する神々に感謝の意を伝えられるたくましい女の子へと変身している。そこから感じ取れるものは、千尋に対する神々や従業員たちからの信頼と好意である。狂ったように派手にがなりたてる音楽は、映像を観ている観客にとっては、以前のように千尋の不安を増幅する効果とは正反対に、千尋に対する賛美、好ましさの演出へと変貌を遂げている。

「祝福の音楽」に続く６小節の序奏部分は、ハクに連れられて河岸まで戻る場面に対応する。またA部分は、水の干上がった河の縁でハクと別れの言葉を交わしている場面に相当する。ここでは、A部分が、《あの夏へ》と《あの日の川》の２曲のそれと比べて、半分の長さに縮まっている。B部分に移ると、それは、千尋が一人で両親の待つ時計塔のある建物のところまで戻っていく場面に対応し、セリフはない。C部分は両親と会った場面で、若干の会話があるが、両親は千尋に相変わらず冷淡で、子どもの気持ちを忖度しない。その後半は千尋が周りの風景を見渡そうとする場面であり、やはり台詞はない。そしてG部分は三人でトンネルを通り抜ける場面であり、三人の足音が音楽の８分音符と一体となって響く。ハクに「トンネルを抜けるまでは振り向いてはいけない」といわれたことを思い出しているかのような緊張感に包まれ、実際、後ろを振り返ると、未練が残っているようで帰還できないのではないか、といった不安感が現れてくる。その一方で、意識を未来の方向に集中させながら、ひたすら前を向き歩いて行く。「千尋、そんなにくっつかないでよ」と母から言われる。同じ台詞が不思議な異境世界に入って行く時にも認められた。つまり駅舎のような待合室、さらには食堂街へと通じたトンネルで母親の口を通じて語られていたのである。トンネルの外に出てから、改めてトンネルの方を振り返って眺めている場面で、Aのメロディーが現れる。そして最後、和音によるコーダの部分は、車に乗って戻る場面に充てられている。

ファンタジー物語の規則を踏襲するかのように、不思議の町に入って行った冒頭の経過とまったく同じような流れをたどって、現実世界に戻って来る。円環的閉じ方は、この種の物語の常套手段でもある。だが、『千と千尋の神隠し』の場合は、成長物語という基準から考察すると、何か割り切れないものが残るのも事実である。もっとも、本稿から逸脱するので、この問題には立ち入らない。それは多種多様に考察を加えるべき観点があり、後日の課題としたい。

５．千尋のテーマ曲―３曲の総括

以上見てきたように、《あの夏へ》は、異境世界の門へ入る前の場面で使用され、《あの日の川》は、湯屋の橋を渡った所にある和風の庭での場面、つまりハクに慰められながらおむすびを頬張る場面（ｔ（４）とｔ（５）との間にある場面）で「状況外音楽」として流されるる[9]。また《帰る日》という曲は、こちら側の現実世界へ戻ろうとする最後の場面で画面から流れてくる。いずれの場合も、湯屋のある橋の向こう側

の異常な世界にありながらも、それを超えた現実を示唆するといったことに共通点が見出せる。言い換えると、そうした音楽はむしろ、この異境世界から一定の距離を置こうとしたり、置くべきであったり、また事実上置いている場面で採用されている。従ってこれらの曲は、現実世界との何らかのつながりを暗示する音楽であると理解できるであろう。

実のところ、この音楽に関しては、さらに仔細に分析すると、上述の場面以外でも、A部分のモチーフaが現れるところが2ヶ所、そして、[序奏－A－B－C]が現れる部分が1ヶ所あることが判明する。モチーフaが現れるのは、ストーリー展開で言えば、《誰もいない料理店》の最後近く、m（1）の直前においてである。すなわち両親が夢中で目の前の御馳走をむしゃぶりつく。千尋のほうはと言えば、食べることに気乗りがせず、その間あてもなく町の通りを一人でぶらつく。モチーフaは、2度ずつ2回、計4回現れる。《誰もいない料理店》の第47－48小節、第49－50小節、第55－56小節、第57－58小節である。この時は、両親ともども、まだ橋の向こうの湯屋の世界に足を踏み入れたわけでもない。だから目下のところ、湯婆婆の支配する世界に完全に呪縛されているというわけではない。だが、料理に手を出してしまった両親は、八百万の神に供する料理に無断で手を出したことに対する罰を受けなくてはならない。豚への一歩を踏み出した両親とは違って、千尋の心の中は、乱されながらも、元の現実への帰還の希望、少なくとも意識内のどこかで現実世界とつながっている。

もう1ヶ所は、カオナシが湯屋の内部に客人として入り込んできて、従業員一同にもてなしを受けている時である。羽振りの良い上客が現れたと、湯屋内のだれもが接客で騒がしく立ち働いている。一連のシークエンスの中で千尋だけはまだ寝ていて、夢見心地である。お父さん豚とお母さん豚に会いに行き、ふたりが人間に戻ることを期待して、高名な河の神さまから御褒美に貰ったニガ団子を食べさせようとする。作品世界内で観る限りは、ニガ団子は催吐剤の効能があるらしい。豚から人間へ戻す力があるかどうかまでは分からないが、無断で食べて豚に変えられてしまったのだから、体内の胃袋から食べた物が嘔吐によって吐き出されれば、あるいは元の人間の姿に戻るかもしれない。このように千尋は考えたのであろう。その時、モチーフaが現れる。しかし、豚が沢山寄ってきて、どれが父と母かわからなくて困惑した時、モチーフaの2回目は1回目とは違う調性で不協和な響きへと変化を遂げる。この一連の推移は千尋の夢の産物に他ならなかった。しかしながら、こうしたモチーフの用い方からも、両親を人間に戻らせるのだ、自分も元の世界に戻りたいという千尋の率直な気持ちが、このモチーフaに託されていると考えるべきである。その実現性が、たとえ淡い期待を意味するにすぎないとしても、それは少なくとも千尋のどこか心の片隅で浮きつつ沈みつつ存在することを暗示しているからである。

『千と千尋の神隠し』では「無意識の記憶」がひとつの大きなキーワードであるのだが、千尋の元の世界へ帰るのだという思いが、意識的な言葉や身体表現で顕現する以前に、物語のいくつかの個所で立ち現れる。しかも、その立ち現れ方はもっぱら「状況外音楽」が担うのである。久石は一場面における映像に対して、音楽が与える効果を強調する。具体的にそれが何かと言えば、場面の雰囲気であり、「場の空気に含まれる陰影のようなもの[10]」であるという。

> 「映像には映像で見せるべき世界がある。が、音楽がつくことで、そこで行われている演技、登場人物の奥深い心情、さらにはその映画に対する監督の意図といったものをさらに引き出すこともできる。（略）音楽の持つ役割をきちんと考えずに安易につけると、映画全体を安っぽくしてしまう。逆に音楽を上手に使えば、映像では表現しきれないものまでも浮かび上がらせることができる。[11]」

上で分析してきた3曲のテーマ音楽は、映像では語り尽くせないもの、あるいは安易に語ってはならないものを示唆していた。千尋の身に次々と降りかかる苦難や難題は、それが深刻な様相を呈している限りは、映像のレベルで現実世界への帰還の予感を安直に見せるわけにはいかない。ただ音楽のみが、画面の背後で微かに元の現実世界とのつながりを響かせるのである。そうした意味からは、これら3曲が所々で手配さ

れることの意義は、決して小さくないと考えざるを得ない。

［序奏－A－B－C］の部分が流れる個所は、釜爺のボイラー室で、電車に乗って「沼の底」にある銭婆の家へ行く決心をし、釜爺が切符を探したりしている場面（t（7）とWとの間にある場面）である。瀕死のまま横たわったハクを助けようというのである。この時点で、千尋は自分のことで汲々とした状態から、愛する恩人のハクを逆に助ける立場に回ろうとしている。ハクを助けたいという気持ちが、明確な意志で表明されている。この点に看過できない意味が込められているということである。さらに言えば、千尋のこの決然とした行動が、結果的にハクが本名を思い出して、自らの素性が明らかとなり、現実世界に戻れない障害を取り除く要因ともなるのである。こうした間接的な論拠からも、３曲に共通する音楽部分が、こちら側の現実世界とのつながりを暗に表すものであることが裏づけられよう。

６．登場人物と音楽との関係

各登場人物や状況の説明に関係して特徴的な音楽を拾い上げてみると、作品全体を通じて第一に挙げるべきものとしては、カオナシが登場するたびに鳴らされる音がある。この人物像について、後に宮崎はこう語った。

「けっこう手間のかかるキャラクターでして、表情がないんですよね。それなりに表情をできるだけ描こうとするんですけれど、なにせ半透明になったりするものですから、手間がかかったわりには存在感がなくてほんとうに困った。[12]」

と。久石はどうか。

「カオナシは影の主人公ですよね。短く頻繁に登場する彼の動きをずっと見ていくと、ある意味そのキャラクターは主人公より明解なんですよ。だから逆にカオナシのテーマ曲はかなり真剣に作りました。でもそれがどういうものかというのは、言葉で説明してもしようがないので、映画を見て下さいとしか言えません。[13]」

久石のこの示唆を受け止めて、映画のカオナシが登場する場面を確認すると、それは鉄琴のような音で、たった６個の音で成りたっている。影のようなカオナシが橋の上で、あたかも端役の一通行人といった風情で姿を現わす最初の場面において、不思議に鳴り響く音である。このようにごく簡単な音の連なりは、カオナシという存在の脆弱さと実在性の希薄さを如実に表現するのにふさわしい、と言うべきであろう。従って、宮崎はその映像表現を案じていたようだが、映像と音楽との合体においてカオナシの表現を理解すれば、その存在の希薄さは、却って、独特の味わいを醸し出してくる。その後、登場するたびに同じ音が鳴らされる。特に本格的に中心となって活躍する場面（カオナシが大食漢になって大暴れする場面）では、強く早鐘のように繰り返し何回も鳴らされる。このような特定の登場人物を表すモチーフは、クラシック音楽では、リヒャルト・ヴァーグナーの楽劇におけるライトモチーフ(Leitmotiv示導動機)[14]が有名である。ただし、カオナシのモチーフの場合、ヴァーグナーのライトモチーフのように変奏や展開法が駆使されているわけではない。また鉄琴の微かな音であるが故に、それはカオナシの感情や心の動き、身体的な行動などが目立つように、つまり特定の意味づけを与えるように表現ができているわけでもない。元来、仮面男のカオナシは無表情で、まともに言葉が発出できないように人物設定されている。身体的にも影のような姿態で、裾あたりの足は幽霊のように半ば透き通り、消え失せている。油屋の庭先から屋内に入り込む際に、足を覗かせているが、それはか細く、実に弱々しい。そして会話を成立させようとするなら、カエルなどを呑み込み、その発声器官を利用した上で、自らの思いを言葉にして、伝達しなければならない。平素はただ「アッ、アッ、アッ、ウ…」とか「エエ」とかと漠とした声を発するのみである。それ故、音楽効果においても、重量感は要らない。強いて言えば、存在感の希薄さを漂わせれば、それで成功なのだが、それはそれでまた困難をきわめる。久石が採った手段は、鉄琴のような楽器を用いることであった。他のアニメ作品は言うに及ばず、『千

と千尋の神隠し』の中でも、これほどまでに独特のモチーフをもつ登場人物は、カオナシ以外には存在しない。

カオナシほどではないが、ボイラー虫の存在も個性的な魅力ある音楽で表現される。《ボイラー虫》と《湯屋の朝》という曲で、ボイラー虫にまつわる音楽が映像に付き添うように、その傍らで流されていく。宮崎監督自身が言っているように、ボイラー虫とは、『となりのトトロ』で住人のいなくなった人家に住みつくススワタリのことであり、これに細長い手足をつけて、再登場させたのである。いずれも、煤に命が吹き込まれて、生き物に変身している。銭婆の魔術によって変身させられた坊ネズミやハエ鳥、そして『風の谷のナウシカ』におけるキツネリスや『魔女の宅急便』の黒猫ジジ、『もののけ姫』の森の精コダマ、あるいはこれに類するユーモラスで可愛い小動物ないしは架空の生き物は、主人公にとって掛け替えのない存在である。あるいはまた幼い観客にしてみれば、こうした生き物は、緊張を解きほぐし、息詰まる切迫感を緩めてくれる効果がある。実際、映画館の上映中に彼らの出番となると、観客席の子どもたちの間からは、喚声と笑いが巻き起こる。このように、総じて、小動物は心を和ませてくれる役割を演じる。児童文学のジャンルでも、とりわけ絵本の世界では、主人公を飾るものとしてのペットは貴重な小道具であるが、それを描き込むのと同じ意義が、こうした可愛い脇役に認められる。

湯婆婆は千尋に向かって「子豚にしてやろう、ええっ、それともススという手もあるで」と嬉々とした声で鋭く脅し、また釜爺が、仕事に嫌気がさして、怠けようとするボイラー虫に対して、こぶしを振り上げながら、野郎ども、ただの煤に戻りたいのか、と脅しをかける。こうした場面から読み取れるように、石炭運びの重労働に従事するボイラー虫も、過酷な運命を背負って、健気に生きているのだ。それでも、千尋の味方となって、彼女の服と運動靴、靴下を保管してくれるし、また後日のこと、ハク竜の腹から吐き出されたタタリ虫が、逃げようとした時も、ボイラー虫たちは千尋のために一役買って出る。つまり彼らは、タタリ虫が逃げ惑って、事もあろうに自分たちの穴倉に潜り込もうとするので、千尋の味方をして、タタリ虫の行く手を阻止するのである。この積極的なタタリ虫退治というエピソードは、［表２］の「ストーリー展開図」で指摘すれば、ｔ（７）とＷとの間にあって、千尋がしっかりとチャレンジ精神を発揮する段階の話として後で生起する。目下のところは、千尋はまだこの世界に慣れ切れない不安定な状態にあり、ハクの導きで両親豚に会いに行こうとする段階、［表２］に基づくと、ｔ（４）とｔ（５）との間にある段階なのである。靴を履いた千尋が、外階段に通じるドアを開けて出て行く段になると、ボイラー虫たちはボイラー室から思いっきりジャンプして、見送ってくれる。この場面の展開中は《湯屋の朝》の曲が流れているわけだが、そこに《ボイラー虫》の曲と同じ旋律が含まれるのは、このような状況から判断して当然の処置であろう。音楽面に限定する限りにおいて、一連のシークエンスは、ボイラー虫たちの動きに焦点化されているからである。ボイラー虫たちと千尋との間には、温かい心の交歓が見られる。千尋にとっても、またその画面に没頭して主人公と一体化して眺めている幼い観客にとっても勇気づけられる場面である。空間認識として、その場所がボイラー室であるという点は、やはり注目に値する。

次いで、登場人物に関連して大いに興味をそそられるのは、双子の姉妹である魔女の湯婆婆と銭婆との性格づけである。一方の魔女は従業員をせっせと働かせて、ひたすら金儲けに走り、貴金属の蓄財に取り憑かれた守銭奴にほかならない。仕事は湯屋経営である。湯婆婆は明け方になると、どこかへ飛び去って、日暮れの開店時間になると、湯屋に戻って来る。だが、その居住環境の主体は、あくまでも華美に走りアジア的な混沌さと猥雑さに満ちた、和風の奇妙な建築物である。他方、銭婆はそれとはまったく逆に、物質欲はあまり感じられず、質素倹約を旨とし、静寂な生活を好む。沼や森の広がる田園が彼女の居住環境であり、英国風な茅葺き屋根の農家でひとり暮らしているようである。このように双子は生活スタイル、趣味、物質欲に対する考え方、広く人生観など、あらゆる面で正反対である。それで銭婆が告げるように、二人で一人前なのに、互いに反目し合っている。

どういうふうにこの双子の魔女を音楽で表現するのかが、見所ならぬ聴き所である。久石は、湯婆婆の難

しさについて次のように答えている。千尋の周辺に登場する人物たちはいずれも、強烈な個性を有するので、それを体現した音楽の創作をせざるを得なかったと。映画館で販売された案内パンフレットによれば、久石は次のように告白する。

「でもその中で、湯婆婆だけは最後までキャラクターがつかみきれなかったですね。宮崎さんの作品っていうのは複雑で、善人が悪をいだいたり、クールなキャラクターなのにその裏には優しさがあったり、必ず二律背反している。しかもその両方を宮崎さんは求めていますから。そういう意味で湯婆婆のテーマ曲は最後まで手こずりましたね。オーケストラのスコアを書いてる途中で、もう一回ベーシックから全部作り直しましたから。[15]」

別のインタビューでも同じ趣旨で発言している。

「―今回、他のキャラクターのテーマ曲も作っていますね。
久石　湯婆婆のテーマ曲は苦労したなぁ。何度も書き直してるんです。宮崎さんのキャラクターって複雑で、善人が後ろに悪を抱えていたり、きびしい顔の裏に優しさがあったりするじゃないですか。必ず相反する両面を要求するから、単に怖いおばあさんとして書くことができないんです。でも、その分、自分でも一、二の出来になったんじゃないかな。通常の楽器を使っているけど、その音がしないように作ったんですよ。ピアノの一番高い音と低い音が同時に鳴るような。あの曲は、気に入っている曲の１つです。[16]」

音楽でこの好対照な人物を表すに先立って、まずは片割れの湯婆婆という人物を処理する厄介さにぶち当たる。湯屋を切り盛する湯婆婆は、強力な魔力を持つ金の亡者である。湯屋の従業員をこき使い、掟に違反したとなると、即座に罰を与え、この世から抹殺する。では、彼女は悪人かと問われれば、必ずしもそうとは言い切れない。彼女は、坊に愛情を注いでいる点で、良い母親の部類に入れて差支えないだろう。もっとも坊を目に入れても痛くないほどに溺愛しているので、その行為は異常とも思えるものであるが、とに角、こと坊に対する限りは、湯婆婆は利己心のない愛の体現者に違いない。また映像で初お目見えした時点では、千尋の面前にいたのは物凄く恐ろしい魔女であったが、たくましさが千尋の身についてくるにつれて、段々と恐怖の印象が薄れて、最後は多少愚かさが加味されたお婆さんといったものに変化している。湯婆婆の人間性が複雑で幅があり、奥深くなっているので、久石は音楽での表現が難しく感じたのである。その課題をどのように処理したのだろうか。湯婆婆が初めて登場する時に流れてくる音楽《湯婆婆》は、人々を突拍子もない感覚に引きずり込む。すなわち、それはピアノの音による６オクターヴ離れた音域（ピアノの最高音域と最低音域）でのユニゾンで、最初はト音（G）を打ち鳴らすだけである。次はトニ（G-D）と４度下降、次はトトトニ（G-G-G-D）と、ト音を３回打って4度下降、というように、非常に印象的に展開する。その後も変化和音の連続で微妙な響きを醸し出す。このトニ（G-D）の動きは《湯婆婆狂乱》の中でも効果的に使われている。

これに対して、久石が銭婆に対して与えた音楽は、言うまでもなく対照的である。千尋たち一行は「沼の底」駅から銭婆の家を目指して、月明かりの細道を歩く。その間、音楽はなく、むしろ青の色彩を際立たせた、月明かりの魅惑的な夜景を観客の心に訴えようとする。やがて一本足のカンテラが飛び跳ねる度に、キックキックと音を立てながら千尋たちに近づいてくる。両者はお互いに挨拶を交わすと、カンテラが先導する。案内役に立つというのだ。その足音だけが静けさの中に響きわたる。やがてカンテラは道端にある一本の樹の根元に立ち止り、一行が追いつくのを待って、再びキック、キック、キックと跳躍歩行を始める。撮影カメラが、千尋一行とその先を照らし出すカンテラを遠景で捉え始めると、《沼の底の家》の曲がどこからともなく流れてくる。千尋の怖い気持ちを代弁するかのように、《神さま達》の旋律に似たような五音音階で、それは表現される。仔細に調べると、玄関にたどりつくまでの４小節において、２個１組の和音が２回鳴らされる。何が起きるのかわからないといった千

尋の不安が、そこに反映されているかのように、赤門の前で佇む場面や石像に目をやる場面で鳴り響く時と同じような和音による表現が使用されている。

釜爺から銭婆の怖さを知らされていたためか[17)]、千尋は銭婆の家の前で一瞬ためらっていると、自動的にドアが開いて銭婆の促す声が響く――「お入り」。それと同時に非常に穏やかなフルート音によるメロディーが流れ始める。この個所を、仕事の許可をもらいに湯婆婆の部屋を初めて訪れた場面と比較すれば、その対照性が一層浮き彫りになろう。千尋は一息、深呼吸しながら入って行く。ところが、外見がそっくりな魔女でも、性格の違いは歴然としている。釜爺が恐るべき存在だと断言していた銭婆が、一転、実際は優しい老婆の姿で登場してくる。千尋も拍子抜けしそうなほどの変化である。観客の側から見て、この場面での雰囲気の急激な変化も、もっぱら音楽効果に頼り切った印象がある。言い換えると、映像やストーリーでは、この落差ある変化は、無理なく観客に受け容れるようにはなかなか対処できないのである。そこで音楽の巧みな操作と雰囲気の醸成という運びとなる。ここでも、場面の雰囲気作りに対する音楽の効果が、大いに発揮されていよう。続く《ふたたび》の曲は、この雰囲気に乗って盛り上がっていき、さらに銭婆の家で、皆で一緒に糸を紡ぐ場面に移り、実に美しい３拍子の曲となる。

以上のように『千と千尋の神隠し』では、非日常の現実らしからぬ事物や人物が描かれる。また予期できない事態が次から次へと起きてくる。こうした架空の突拍子もない世界が、観客に向かって明晰でリアルな実在感を漂わせるためには、音楽の利用が有効な手段の一つなのである。久石音楽の分析から、改めてその点を実感することができた。

７．まとめ―久石譲の創作姿勢と『千と千尋の神隠し』の音楽的特徴

本稿において『千と千尋の神隠し』を分析する中で、必然的な流れとして、テーマ曲と人物付きの曲とに分けるに至った。メインテーマ曲について、その存在は認められない。だが、それに代わるものとして、あるいはまたそれに近いものとして、《あの夏へ》、《あの日の川》、《帰る日》の３曲の共通部分が確認でき、この機能は既に指摘したように、何かしら過去の平凡な日常性、喪失して初めて得難いものだったことを痛感する現実世界との払拭しがたい絆を感じさせる点にあった。

> 「僕がこの作品の音楽をつける時に一番考えたことは、最後まで等身大の10歳の女の子を表現するにはどうしたらいいかということだけでしたから。例えばピアノと弦楽器だけの曲であるとか、単音のピアノでメロディーを弾いている曲の持つ静けさを大事にしたつもりです。そしてその千尋のテーマ曲ともいえる曲が静かな分だけ、他の楽曲をやかましくして、千尋の心情が引き立つように全体を構成していったんです。[18)]」

３曲の共通部分は千尋のテーマ曲に他ならないこと、それに付随してカオナシ、その他の人物付きの曲が必要であったことも、上述の久石の見解から明らかだと思われる。久石の創作の秘訣は、一般的にはメインテーマ曲の確立にある。そのために彼は、作品世界の全体像を把握することに努める。その後で、具体的に２時間以上に及ぶ長編アニメに対して、音楽でどのような構成を築くのか、映像の世界を広げ深めるために、音楽でどのような世界観を構築するのかを考える[19)]。「メインテーマをオーケストラベースにする場合には、アレンジで同じメロディーをいろんな表情に変えることが可能だ。盛り上げたいところはもちろん、静けさの中でヴァイオリンのソロで朗々と歌い上げることもできる。[20)]」一例を挙げれば、『ハウルの動く城』の場合が好例である。全33曲のうち18曲にメインテーマ曲を登場させた。それ自体がソフィーの気持ちを代弁するような形を取ったので、その心境の変化と共に、様々にアレンジが加えられて、変奏されていったのである。主人公のソフィーは、荒地の魔女の呪いによって、いきなり18歳の娘から90歳の老婆に変えられてしまうわけだが、その後も、時として微妙に若返ったり、また老いたりと、たびたび顔が変わる。身体的特徴以外にも、生来の地味で控え目なソフィーは、年寄り特有の厚かましさを遠慮なく前面に打ち出して、活発に

行動するに至る。宮崎からは「それを、観る人にも一貫して同じソフィーの気持ちが持続するように、音楽に一貫性を持たせたい[21]」のだという要望が出された。それに応えたメインテーマ曲が、当時ヒットした「人生のメリーゴーランド」である。

『千と千尋の神隠し』の作品では、このような明確な方針は立てられるはずもない。何と言っても、湯屋の異境世界は尋常でないファンタジックな世界である。異常な雰囲気の中にたくさんの奇妙な神々が集い、それをカエルなどの、これまた異様な従業員たちが接待するのである。言い換えれば、非日常性や非現実という意味で、強烈な個性を発散する登場人物たちが目白押しなので、各登場人物にふさわしい曲というものを不可避的に考慮しなくてはならなかった。久石は、10歳の千尋のテーマ曲には物静かなイメージをあてがい、「その千尋のテーマ曲ともいえる曲が静かな分だけ、他の楽曲をやかましくして、千尋の心情が引き立つように全体を構成していったんです[22]」。そういうわけなので、３曲の共通部分は千尋のテーマ曲であるとしても、だからと言ってメインテーマ曲にはなり得ないのである。

この作品の特異性は、さらに別の特徴にうかがえる。

「映画の後半に千尋が海の上を走る電車に乗って銭婆のところへ向かうシーンがあるんですけど、僕はあのシーンが宮崎さんが今一番やりたいところだったと思っているんです。それでイメージアルバムの中にある＜海＞という曲が、そのシーンにすごく合うんですよ。宮崎さんもイメージアルバムを作った時にその曲を真っ先に気に入ってくれたんですけどね。だからそれが千尋のテーマ曲の根底なんです。非常に素朴で懐かしい感じ。ひとりぼっちなのに前向きに生きるひたむきさ。そしてその中にある優しさ。つまりこの映画は誰の中にもあるそういうものを表現した作品なんですよ。それでこれは宮崎さん特有のものだけど、最後に主人公を救っていない。突き放しているんです。つまり宮崎さんは子ども向けの映画の体裁をとっているんだけど、大人も含めたいろんな人に向けて自分（宮崎監督）のメッセージを発しているんですよ。その根底にあるのが、イメージアルバムの中にある＜海＞という曲であり、その曲が使われているシーンだと思います。[23]」［(　)は論者の補足］

この文章は、久石がスタジオ・ワンダーステーションで、インタビューに答えているものの中から引いたものである。上記引用中に散見される「イメージアルバム」という言葉は若干、補足説明が必要かもしれない。宮崎アニメでは、多くの場合「イメージアルバム」というＣＤが発売される。これは、新作の構想がまとまり出した段階で、宮崎監督の意向を受けた久石が、その物語世界のイメージを音楽に具現化したものである[24]。それは必ずしもそのまま実際の映画（サウンドトラック版）に採用されるとは限らず、あるいはまた大幅な修正が加えられることもある。イメージアルバム『千と千尋の神隠し』の中に収録されている《海》という曲にあっては、宮崎駿も真っ先に気に入った曲とのことであり、キャラクターの音楽という側面からみると、これが「千尋のテーマ曲の根底」であるという。《海》という題名の曲は、サウンドトラック版には存在しない。しかし、千尋が海原電車に乗って銭婆のところへ行く場面で、《６番目の駅》という題名の曲として使われている。そこではト長調で「ミレミラミーーレミーレドシー～」というメロディーが２回現れるが、この最初の部分「ミレミラミー」の部分は、《あの夏へ》、《あの日の川》、《帰る日》におけるA部分のモチーフa（ミミミミレミラミー）（ハ長調）と、同じ動きをしている。このことから、先行する数節で検討した《あの夏へ》、《あの日の川》、《帰る日》の三曲、そして他の個所にも出てくるモチーフaは、本来の千尋を中心とする生存環境を表しているとも考えられる。実際の映画における《６番目の駅》という曲は、［表２］の「ストーリー展開図」で確かめると、Xの場面になる。宮崎監督自身は映画公開後のインタビューで、このX「静かな山場」について次のように語っている。すなわち

「今回、山場と感じてくれるかどうかわかりませんけども、僕は電車に乗っていくところが山場だと思っていて、むしろその前の追いかけたりっていうの

は、ただの前段なんですよ。だけど、その、最後の山場のところで電車に乗れた、電車に乗っていくとこが山場になったっていうのかね、今までやった映画とちょっと違ってて、実に気持ちよかったです。だって、スタッフは、この映画本当に終わることができたのかってみんな思っていましたから。まあ、僕はずーっと言ってたんですけどね、なんの根拠もなしに＜とにかく電車に乗っていくんだ＞って。だけど、本当に電車に乗っていくところに辿り着けたときっていうのは、自分なりの達成感というか、非常に運がよかったんだなって思いました（笑）。[25]」

この説明から判断すれば、久石は宮崎監督と同じ思いを共有していたことは明らかである。それだからこそ、《海》という名曲が誕生し、作品の展開においてＸの場面が、映像面、音楽面ともにきわめて適切な山場に仕上がったのかもしれない。児童文学の一般的な物語構造の基準に照らすと、普通このような場面は山場となる資格はない。その前の追いかけたり、怪物の追撃の中を潜り抜けたりといった場面、具体的には場面Wの「カオナシとの対決」が、冒険小説の山場を選定する際の常套手段となるのである。あるいは場面Ｚの「クイズ解き」がその役割を担う場合もある。千尋の物語は特異な着想に満ちているが故に、逆説的に優れた世界観を創出できたと言えよう。Ｙの場面は、宮崎アニメが得意とする飛行場面である。千尋の意識は昂揚の頂点に達しているであろう。観客も同様の気持ちで魅了される。とは言うものの、それはストーリー展開の流れとしては決定的な転機を意味しない。Ｚの場面に関連して付言すれば、もともと宮崎監督の意図は、千尋を活躍させるための新たな環境の必要性から、両親を豚にして、千尋から引き離すことにあった。いまや「クイズ解き」は、千尋の精神的な成長の成就を踏まえた上では、ただ両親を元の姿に戻すという、一種の機械的な手続きがあるだけにすぎない。それ故、Ｚは山場と言えるようなものではなくて、山場のＹ→Ｚの移行は、物語の終局に向かっての速やかな展開を実現するだけのものに見えてくる。

Ｘの山場は静謐に偏り過ぎて、物語のいわゆる山場には不適切であると見る向きもある。宮崎自身も「山場と感じてくれるかどうかわかりませんけど」と断っている。しかしながら、ベートーヴェンの第九交響曲第３楽章にも似て、筆舌に尽くしがたい魅力と良さ、何よりも内実の奥深さと平穏な心境が、ここにおいて現出しているといってよい。有名な第九交響曲は、それまでの交響曲の第２楽章（緩徐楽章）と第３楽章（メヌエットあるいはスケルツォ）とは逆順で、第３楽章に緩徐楽章が置かれている。さらに、最終の第４楽章に至ると、人間の声の導入がある。バリトン歌手が「おお、友よ、このような調べではなく…」とレチタティーヴォで移行を促した後、文豪シラーの頌歌「歓喜に寄せて（An die Freude）」が、合唱団も加わって歌い上げられる。合唱と楽器を合体させた崇高な調べが鳴り響き、一同を感動に包みこむのだが、この旋律は、先行する第３楽章の深い洞察、換言すれば、それは本質的な認識の淵に佇む静けさから流れ込んでいく必然的な帰結としての歓喜の渦に他ならないという見方が成り立つ。

「（笑）いや、本当に素晴らしい映画だなあと思いましたけどね。要するに電車に乗るシーンをクライマックスにできて成功だということは、つまり千尋ちゃんがちゃんとしっかり自分の意志で電車に乗って、あそこである意味で、幻想の世界と現実の世界を全部自分の世界観の中で引き受けたっていうことをきっちりストーリーとして定着させたっていう意味と理解していいんでしょうか。[26]」

この解釈の確認に対して、宮崎は「ああ、そういう言い方があるんですね」と今更ながら、Ｘの場面の奥深い意義を再認識した様子である。宮崎監督はそこまではおそらく考え及んでいなかったのだろう。一般的には作品への基本的な考え方と意向が先行的にあって、創作に励む。しかし出来上がった芸術作品は、ひとつの自己完結的な世界を形作り、その結果、監督の手の届かない自律的な、新たな形態に生まれ変わる。従って監督の及びもつかない意味が、そこに生じてきても何ら不思議ではない。ファンタジーと現実、幻想と真実が止揚、合体して、電車が人生の乗り物を意味し、そのレールが人生行路を比喩する。とりわけ影絵

のような乗客たちや簡潔に描かれたネオンなどの描写が、この場面の象徴性を高度に伝えてくれる。それまでの千尋は辛苦に耐えて、内面に宿る生命の潜在力を覚醒させ、その能動的な原理に基づいて自らの行動を決断して、実行に移した。この作品が千尋の成長物語を意味する限り、宮崎監督の思惑どおりストーリーは、ここ場面Xで頂点を極めたのだと言えよう。

しかしながら、この場面がより深い意義を顕在化していることにも目を向けたい。千尋のみならず、広く人間というものの歩むべき人生、現に歩みつつある人生が、象徴的に描き込まれている。「大人も含めたいろんな人に向けて自分（宮崎監督）のメッセージを発している」という久石の述懐は、この電車の山場に対する並々ならぬ意義を感じ取ったために導き出されたのだと思う。宮崎はそこまでは考えていなかった。千尋という少女が、ハクに恩義を感じて、その人のために乗り物に乗り、敢然と銭婆に許しを乞うために、行動に移す。ただそれだけのことに集約させるものであった。

「とにかくなんか、その十歳の女の子が刀の中を潜り抜けたりなんかするよりも、やっぱりこう、初めての世界で自分の意志でしっかりきちんと電車に乗っていくっていう、そっちのほうをやりたいと思いました。ずいぶんビクビクおどおどしてるはずなんだけど、毛ほどもそれを見せないで―そういうもんですよね？[27]」

10歳の千尋の顔は、宮崎の意に反して、電車の窓外を凛として見詰めた安定感を示している。それは内面での精神力の強さが露呈している、と言い換えられるであろう。それに基づく行動面での実際表現が、電車に乗るという行為ならびに乗車している千尋の態度であった。ここでは宮崎は、千尋の最終的な成長を具体的表現で示そうとした。そういうことであれば、確かに作品はその表現に成功している。けれどもそれ以上に、出色な出来栄えとして私たちの胸に迫ってくるのは、久石の認める意義深さ、別言すれば「大人も含めたいろんな人に向けて自分（宮崎監督）のメッセージを発している」点である。インタビュー記者の指摘する「幻想の世界と現実の世界を全部自分の世界観の中で引き受けた」という姿勢は、人生におけるひとつの到達点でもあろう。

イメージアルバムの中の《海》に対して、宮崎監督と音楽担当・久石譲との間では奇しくも、意見の一致を見たようだが、そもそも根本に立ち戻って考えてみると、両者の職分は一体、どういう位置関係を占めているのだろうか。久石はまず作品のラッシュを観て、監督と打ち合わせる。するとイメージの枠組みができて、音楽も一定の方向性が定まってくる。イメージアルバムが、この時点で完成することもある。だが、それで一旦仕上げた曲が、監督の意向に沿ったものでない場合、手直しを要求される。そうなると、折角の努力が無駄にされたようで、久石は意欲が萎える思いに駆られる。何にもまして、久石の念頭に固まってあるイメージが狂ってしまうのである。次いで、その映像と音楽との合体に乗りかかる形で、台詞や効果音が加算されていく。それにつれて、久石は音楽の部分が縮小したような気分に囚われて、ますます意欲の減退が顕著になっていく。

では、映画音楽は、作曲家にとって監督の主導権に左右された妥協の産物かと問われれば、そうとも言い切れない。

「監督がこんな感じの音楽が欲しいと、ある思いを抱いている。監督の漠然とした思いを、各々のプロの立場で形にしていくのが僕らの仕事。僕は音楽の専門家として、監督が全力を尽くして撮った映像に向かい、かつ新鮮に感じられる音楽をつける。監督も自分のイメージを超えたものと出会いたがり、新たな感動を味わいたがっている。だから、監督が考えている世界を表現するのだけれども、さらに監督が考えているよりも、もっと広げたものを提供しようと努力する。僕はそうありたいと考えている。[28]」

映画という総合芸術内での音楽の従属性―それを超えて自主的な貢献をすること、これが久石の実体験に根差した偽らざる信条である。

この種の共同作業を続けるうちに、「自分では決して考えなかった方向に目を向けることができ、世界が

新たに広がっていく[29]」。監督にとっても、思いがけないほど素晴らしい曲、創造性豊かな曲の誕生は望むところであり、それを期待して、あれやこれや注文をつけるといった思惑もありそうだ。「『ナウシカ』」の映画音楽は、映画の完成前に、まず、イメージ・アルバムとして完成した。久石譲さんの作った曲を繰り返し繰り返し聴きながら、絵を描くことに集中する宮さん（宮崎駿）の姿は、いまも、目に焼き付いている[30]」と鈴木敏夫プロデューサーは証言する。デジタル作画監督・片塰満則は、Xの山場に宮崎駿版『銀河鉄道の夜』を看取する[31]が、確かに夢と現実の境界線上にある普遍的な世界が、ここには巧みに、それも鮮やかに織り込まれている。不可思議な気分に誘い込む電車の見事な映像と、思わず魅了される音楽との共同作業が相乗効果となって、人生の真相が具現化され鮮明化されて、観客の想像力は最大限に広がると言ってよい。『千と千尋の神隠し』は、常識的な物語構造の判断基準に従った場合、逸脱した場面が多々見られるので、異論や疑念、また不可解さが湧き出て、欠陥の存在が提起されていくのは、無理からぬことである。それにもかかわらず、久石の追求するような理想がXの場面で成就している。そこを見極める必要がある。その意味において『千と千尋の神隠し』は、安易には他の追随を許さない稀有の作品である。

注）

1）久石譲『感動をつくれますか？』（角川書店　2006年）94頁。

2）この引用個所は、『千と千尋の神隠し　イメージアルバム』（二馬力　2001年）の付録に掲載されている。

3）宮崎駿『折り返し点1997 ～ 2008』（岩波書店　2008年）230頁。

4）同上書255頁。

5）同上書230 ～ 231頁。

6）C.S. ルイス『ライオンと魔女』瀬田貞二訳（岩波書店　1992年）13 ～ 16頁。

7）The Complete Illustrated Lewis Carroll with an Introduction by Alexander woollcott : Illustrated by John Tenniel. Hertfordshire:Wordsworth Editions Ltd, 1998,pp15 ～ 18.

8）久美薫は当作品の総評として次のように指摘する。「お分かりだろうか、この映画、詳細に検討していくと実はほとんどの場面で千尋は他力本願で難関を乗り越えていっているのである」と。久美薫『宮崎駿の仕事1979 ～ 2004』（鳥影社　2004年）318頁。久美は千尋が直面する難題に、いつもだれかの手を借りて解決することに着目して「今時のブータレ少女が経験を通して内なる力に目覚めていく話と銘打ちながら、実際にできあがったフィルムはというと、全てにおいて誰かに助けられるしかない主人公という、企画とは異なるものであった」（同上書　319頁。）と、その矛盾を論難する。だが、児童文学における自立は、本人の遭遇するいろいろな人の助けを得て、成就することが多い。それ故に、他者依存のない自立を描かないからと言って、別にそれが作品の欠陥だということにはならない。

9）映画音楽とは、煎じ詰めると、「状況外音楽」と「状況内音楽」との総称であるという言い方ができる。久石はこの両者の役割を峻別する。参照、久石譲『感動をつくれますか？』79 ～ 81頁。

例えば、ハリウッド大作『スター・ウォーズ』を援用するのだが、ジェダイの活躍する個所では、必ずジェダイのテーマを背景に流すといったやり方であり、要するに画面を盛り上げていくために、明確に「状況外音楽」を利用する。その狙いは、第二次世界大戦下の英国で工場の生産性向上を企図して、BGMを流したのと同じ強引さでもって、観客に印象づけることである。だが、それでは往々にして、観客の内発的な想像力を減殺してしまう。

これに対して、後者は、物語世界の場面内で自然に、あたかも効果音のように音楽が流れてくるといった、自然な手法のことを指す。『魔女の宅急便』の冒頭部で、箒に跨って修業の旅に出たキキが、お伴の黒猫ジジに携帯ラジオのスイッチをひねらせる。すると、たまたま荒井由美の「ルージュの伝言」の歌声が流れてくる。このように明るくてモダンで前向きな感覚に満ちた「ルージュの伝言」は、何らの作為も感じさせずにキキの旅立ちの気分を照らし出す。これなどは、「状況内音楽」の優れた活用例

となっている。

内容面から吟味すれば、「ルージュの伝言」は、妻が主人の浮気に我慢ができず、腹立ちまぎれに主人の実家に訴えに戻る、といった内容の歌詞が付いている。口紅で化粧台かどこかの鏡面に相手の不誠実をなじり、反省のない限り、もうここには戻らないと書き残して家出する。キキの旅立ちの場合とは、内容があまりにも違い過ぎるので、ここの音楽と映像との異様な乖離は好意的に評価できない、とする意見も出ている。だが、これは見当違いもはなはだしい。どのような曲を採ろうとも、「状況内音楽」の手法である限り許されることであり、また歌詞の内容を別にすれば、この曲の選定自体は場面にすこぶる適合している。あるいは日本語はもちろん、外国語の歌詞にさえ気を配ることなく、曲自体のリズム感を楽しむ傾向は、以前から日本で定着していている。奈良の古刹を紹介するTV番組ですら、英語の歌をバックに流しながら、古代に創建された、芸術的な寺院が映し出される。この組み合わせに奇異な感情を抱いていいはずだが、そうはならない。歌詞に一々こだわって聴く人はほとんどいないからである。

10）久石譲『感動をつくれますか？』82頁。

11）同上書82～83頁。

12）宮崎駿『折り返し点1997～2008』245頁。

13）久石譲「千尋の心情が引き立つように全体を構成」、所収スタジオジャンプ編集『千と千尋の神隠し』（発行所：東宝株式会社、2001年）29頁。

14）Leitmotivという用語は、F.W.イェーンスにより案出された言葉。これはオペラや交響詩において、特定の人物や状況等、さらには、登場人物の行為や感情、状況の変化等を示唆するとともに、楽曲に音楽的統一をもたらす。リヒャルト・ヴァーグナーが後期の楽劇で用いた手法として、よく知られている。

15）久石譲「千尋の心情が引き立つように全体を構成」29頁。

16）久石譲「映像を豊かに彩る『千尋』のサウンド」、所収『ロマンスアルバム　千と千尋の神隠し』（徳間書店　2001年）98頁。

17）脚本を作らずに、絵コンテを切ってストーリーを進展させる宮崎監督が、『千と千尋の神隠し』の場合も、制作の途中で主要スタッフを集めて、今後のストーリー展開を説明したことがあった。宮崎の話に耳を傾けていた鈴木敏夫プロデューサーが、それだと上映時間は３時間か３時間半はかかる、公開を１年延ばすことになると言い出した。それで千尋が湯婆婆と対決し、さらにその背後にいる恐ろしい銭婆と対決して物語に決着をつける、という当初のストーリー構想は放棄した。その代わり、ただの通行人で登場したカオナシを、ストーカーに仕立てて、千尋が対決する重要人物に変更してしまった。宮崎駿『折り返し点1997～2008』244～245頁、あるいは宮崎駿「自由になれる空間『千と千尋の神隠し』を語る」、所収『ユリイカ８月臨時増刊号　総特集宮崎駿『千と千尋の神隠し』の世界　ファンタジーの力』（青土社　2001年）26頁を参照のこと。銭婆の居所を訊かれて、釜爺が恐ろしい魔女だと言うのは、当初の構想の名残である。

18）久石譲「千尋の心情が引き立つように全体を構成」29頁。

19）久石譲『感動をつくれますか？』87頁。

20）同上書88頁。

21）同上書90頁。

22）久石譲「千尋の心情が引き立つように全体を構成」29頁。

23）同上書同頁。

24）そもそも事の始まりは、高畑勲が人気漫画を元に音楽を作るというレコード企画に啓発を受けたことにあった。それは「イメージアルバム」と名づけられ、ファン層の間で評判を呼んでいた。「まず、作曲家に自由に曲を作ってもらう。それを聴いて、曲の善し悪し、方向性、あるいは、足りない曲を決めることができる。また、それをレコードにすれば、お客さんには、映画の完成前に、音楽で作品を楽しんでもらえることになるし、そして、そのあと、本番用の映画音楽を作ればいいと言うのだ」。鈴木敏夫『ジブリ哲学－変わるものと変わらないもの』（岩波書店　2011年）74頁。宮崎アニメの最初のイメージアルバムは、『風の谷のナウシカ』であった。

25）宮崎駿『風の帰る場所　ナウシカから千尋まで

の軌跡』（株式会社ロッキング・オン　2002年）205 ～ 206頁。大人にとって乗り物に乗り込むといった行為は、日常茶飯事の取るに足らない意志選択であるけれども、小さな子どもにはそれが大冒険であることを、私たちは忘れがちである。

26）宮崎駿『風の帰る場所　ナウシカから千尋までの軌跡』208頁。

27）同上書208 ～ 209頁。

28）久石譲『感動をつくれますか？』101頁。

29）同上書98頁。

30）鈴木敏夫『ジブリ哲学－変わるものと変わらないもの』75頁。

31）片壟満則「作画＆映像技術考　車窓から」、所収『<千と千尋の神隠し>を読む40の目』（キネマ旬報社　2001年）77頁。宇宙の無限の彼方を目指して走る「銀河鉄道」の列車は、死出の旅路の道行きでもある。ジョバンニは夢見心地の眠りの中で、カンパネルラとの永遠の別れを告げる。友情、生死の時間、極大の空間、一切合財を包み込んで、列車は走って行く。

参考文献（順不同）

・片壟満則　2001 「作画＆映像技術考　車窓から」、『<千と千尋の神隠し>を読む40の目』（東京：キネマ旬報社）

・久美薫　2004 『宮崎駿の仕事1979 ～ 2004』（長野：鳥影社）

・久石譲　2001a「千尋の心情が引き立つように全体を構成」、スタジオジャンプ編集『千と千尋の神隠し』（東京：東宝株式会社）

2001b「映像を豊かに彩る『千尋』のサウンド」、所収『ロマンスアルバム　千と千尋の神隠し』（東京:徳間書店）

2006『感動をつくれますか？』（東京：角川書店）

・宮崎駿　2001「自由になれる空間『千と千尋の神隠し』を語る」、『ユリイカ８月臨時増刊号 総特集 宮崎駿「千と千尋の神隠し」の世界 ファンタジーの力』（東京：青土社）

2002『風の帰る場所　ナウシカから千尋までの軌跡』（東京：株式会社ロッキング・オン）

2008『折り返し点1997 ～ 2008』（東京：岩波書店）

・ルイス, C.S. 1992『ライオンと魔女』瀬田貞二訳（東京：岩波書店）

・The Complete Illustrated Lewis Carroll with an Introduction by Alexander Woollcott. Illustrations by John Tenniel. Hertfordshire:Wordsworth Editions Ltd, 1998.

・岸正尚『宮崎駿　異界への好奇心』（東京：菁柿堂 2006年）

・鈴木敏夫『仕事道楽　スタジオジブリの現場』（東京:岩波書店』2008年）

・『≪千と千尋の神隠し≫を読む40の目』（東京：キネマ旬報社　2001年）

・宮崎駿アニメ研究会篇『≪千と千尋≫の謎』（東京：アミューズブックス株式会社　2002年）

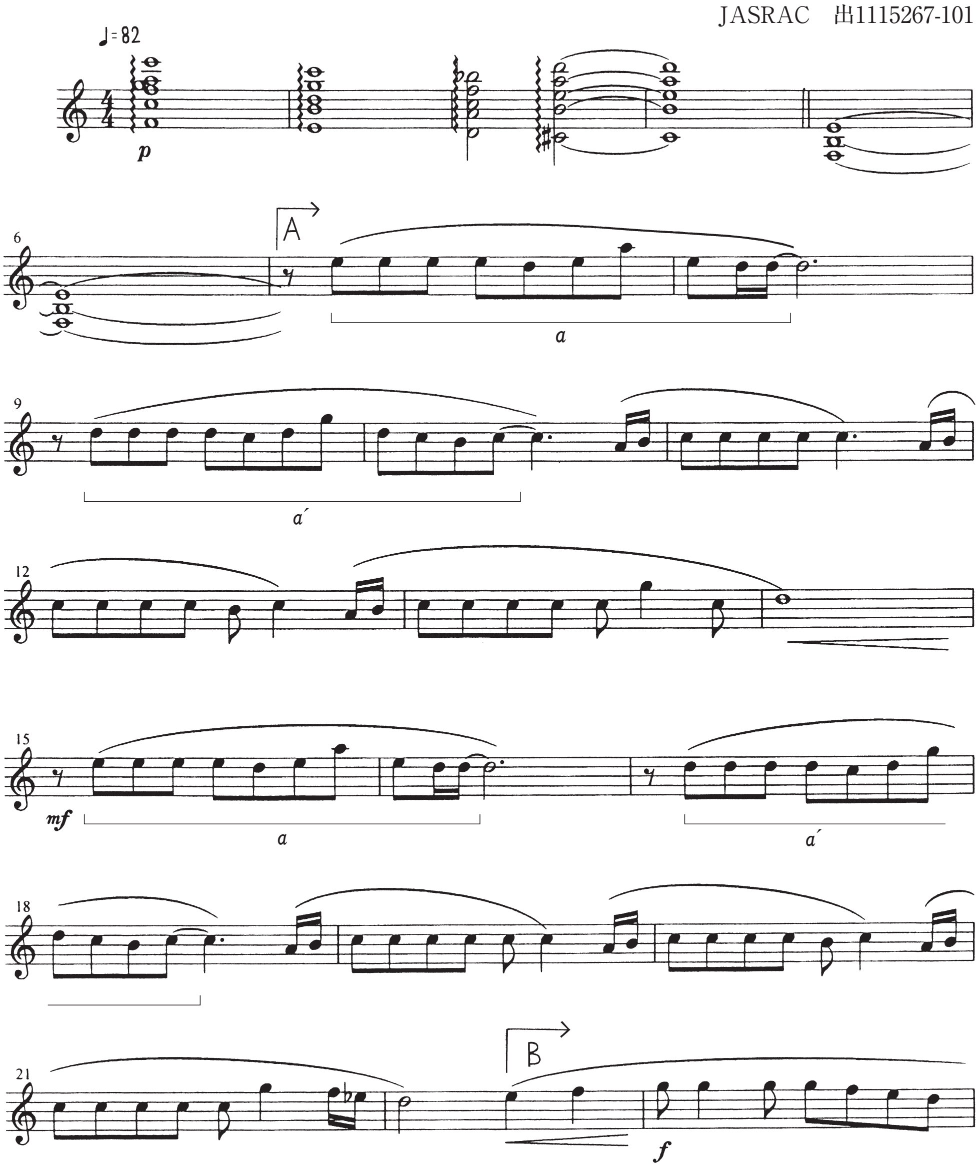
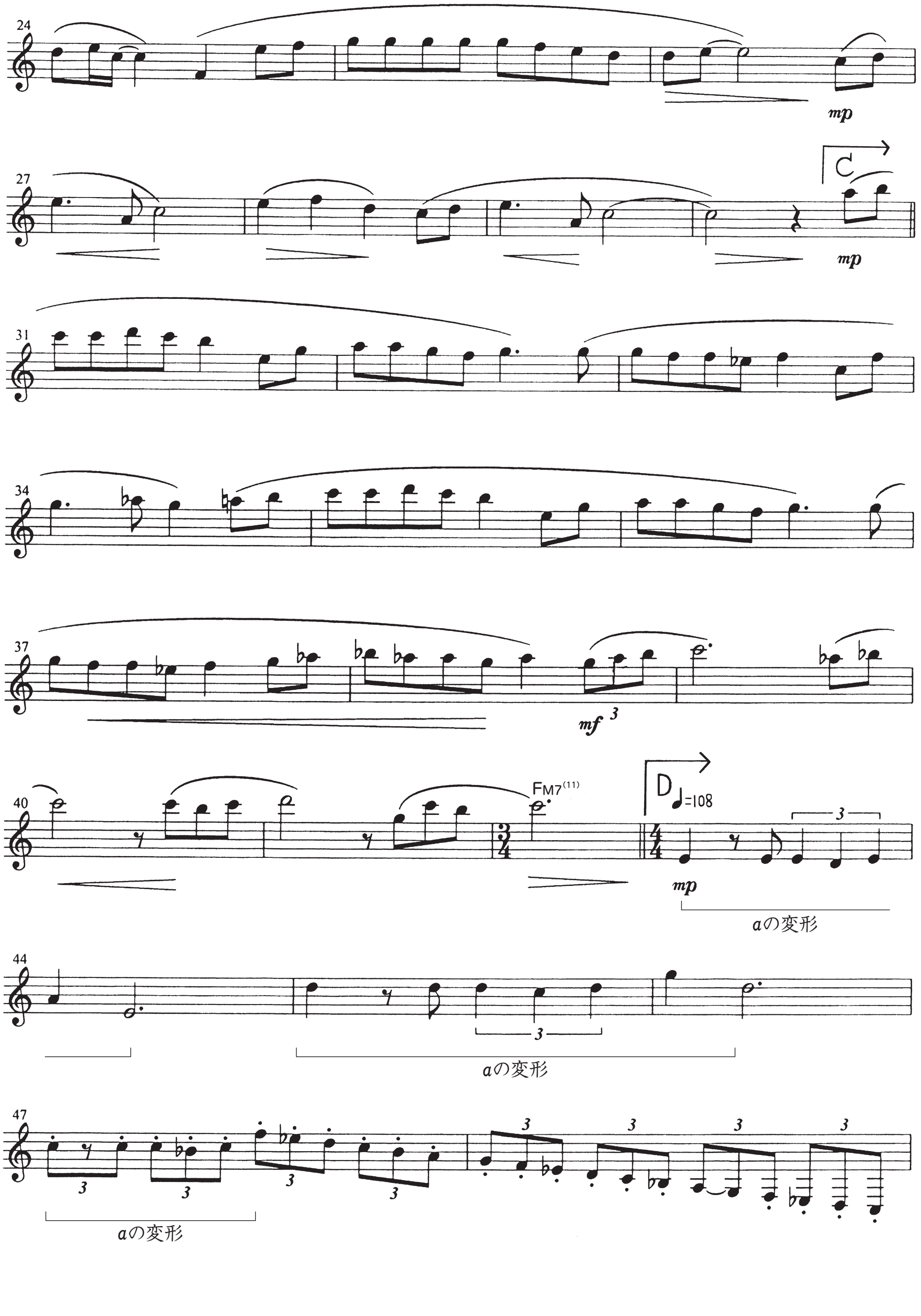
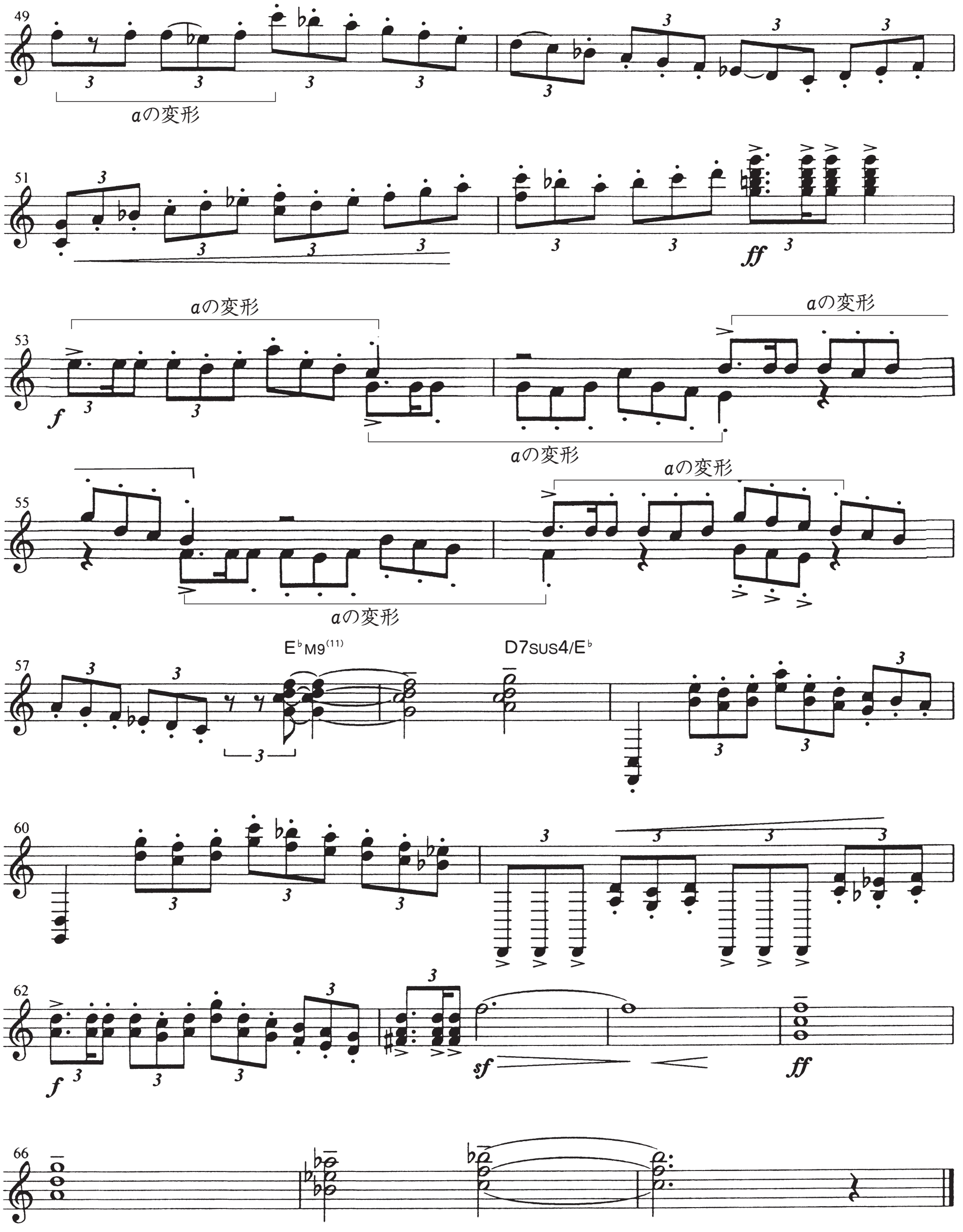
・ CD『千と千尋の神隠し　イメージアルバム』（東京:二馬力　2001年）

・DVD『千と千尋の神隠し』（東京：二馬力　2002年）

・使用楽譜：『ピアノ曲集「千と千尋の神隠し」』（東京：ケイ・エム・ピー　2009年）

［譜例］ あの夏へ

作曲：久石譲

JASRAC　出1115267-101

あの夏へ

あの夏へ

〔岡部作成〕

［表 1 ］《あの夏へ》、《あの日の川》、《帰る日》の比較

【凡例】

・曲ごとに縦方向に小節数を追って表記、三曲を比較しやすいように、同じメロディーが出てくる小節（A部分が開始する小節）を横に揃えた。
・表中の項目の説明
　1．構成：序奏、A、B、C等、大きな部分の括りを示す。共通のものは同一のアルファベットで示す。
　2．小節数：曲の小節番号
　3．音符密度：
　　黒＝メロディーの音が 1 拍に 1 個以上鳴っている拍
　　グレー＝メロディーの音は鳴っていないが伴奏の音が 1 拍に 1 個以上鳴っている拍
　　淡いグレー＝メロディーも伴奏も鳴らされずに延長されている拍
　　白＝音が鳴っていない拍
　4．モチーフ：動機（独立した楽想を持った最小単位のもので、通常は 2 小節）各モチーフを小文字のアルファベットで示す。三曲に共通で出現するモチーフのみ記入。
　5．台詞はしゃべり始める拍の位置に記入

《あの夏へ》　4/4拍子

構成	小節数	音符密度	モチーフ	台詞・場面等
序奏	1			♩＝82（車の中）
	2			ちひろ
	3			ちひろ もうすぐだよ
	4			
	5			やっぱり田舎ねぇ
	6			買い物は隣町に行くしかなさそうね
A	7		a	住んで都にするしかないさ
	8			ほら、あれが小学校だよ
	9		á	千尋、新しい学校だよ
	10			けっこう綺麗な学校じゃない
	11		b	
	12			
	13		b´	前の方がいいもん
	14			あ、

《あの日の川》　4/4拍子

構成	小節数	音符密度	モチーフ	台詞・場面等
序奏	1		aの一部	
	2			（3/4拍子）
	3			（4/4拍子） これは隠しておきな
	4			あ、 捨てられたかと思ってた
	5			帰る時に要るだろ
	6			（3/4拍子）
	7			（4/4拍子）
	8			これお別れにもらったカード
A	9		a	ちひろ
	10			千尋って 私の名だわ
	11		á	湯婆婆は相手の名を奪って 支配するんだ
	12			いつもは千でいて本当の名前は しかっり隠しておくんだよ
	13		b	
	14			わたし、もう取られかけてた、 千になりかけてたもん
	15		b´	名を奪われると帰り道が わからなくなるんだよ
	16			私はどうしても思い出せないんだ

《帰る日》　4/4拍子

構成	小節数	音符密度	モチーフ	台詞・場面等
冒頭部	1			♩＝120（湯屋の前）
	2			大当たり～
	3			
	4			よ～し やった～
	5			
	6			
	7			みんなありがとう 行きな
	8			お前の勝ちだ 早く行っちまいな
	9			お世話になりました
	10			ふん
	11			さよなら （橋を走って戻る）
	12			ありがとう またね～
序奏	13			♩＝82（ハクと手をつないで走って戻る） はく 行こう
	14			お父さんとお母さんは 先に行ってる
	15			
	16			
	17			水がない
	18			私はこの先には行けない 千尋はもと来た道をたどればいいんだ
A	19		a	でも決して振り向いちゃいけないよ
	20			トンネルを出るまではね はくは
	21		á	はくはどうするの 私は湯婆婆と話をつけて弟子をやめる
	22			平気さ 本当の名を取り戻したから
	23		b	元の世界に私も戻るよ
	24			またどこかで会える？ うん、
	25		b´	きっと きっとよ きっと さあ行きな、振り向かないで
B	26			（千尋が一人で戻る）

	15	a	ああ、 お母さん
	16		お花、萎れてっちゃった あなたずうっと握りしめてるんだもの
	17	á	おうちに着いたら水切り すれば大丈夫よ
	18		
	19	b	初めてもらった花束が お別れの花束なんて悲しい
	20		あら この間のお誕生日にバラの 花をもらったじゃない
	21	b´	１本ね、１本じゃ花束っていえないわ
	22		カードが落ちたわ
B	23	c	まど開けるわよ もうしゃんとしてちょうだい
	24		今日は忙しいんだから
	25	c´	
	26		
	27	d	
	28		
	29	d´	
	30		
C	31	e	
	32		
	33	f	
	34		
	35	e	
	36		あれ
	37	f´	道を間違えたかなぁ
	38		おかしいなぁ あそこじゃない、ほら
	39	g	あ？ あの隅の青い家でしょ？
	40		あれだ
	41	g´	１本下の道をきちゃったんだなぁ

	17	a	はくの本当の名前？
	18		でも不思議だね、 千尋の事は覚えていた
	19	á	
	20		おたべ ご飯をたべてなかったろ
	21	b	たべたくない 千尋の元気が出るように
	22		まじないをかけて作ったんだ
	23	b´	おたべ
B	24	c	
	25		
	26		う
	27	c´	う う
	28		う う
	29	d	う う
	30		う
	31	d´	う
	32		う
C	33	e	うわ～んわ～ん
	34		
	35	f	辛かったね さ、おたべ
	36		
	37	e	
	38		
	39	f´	
	40		
	41	g	一人で戻れるね うん、はくありがとう
	42		私、がんばるね。 うん
	43	g´	

	27	c	
	28		
	29	c´	
	30		
	31	d	
	32		
	33	d´	
	34		ちひろ～　（両親と再会） あ
C	35	e	なにしてるの、早く来なさい
	36		ああ
	37	f	おかあさん、 おとうさん
	38		だめじゃない、急にいなくなっちゃ いくよ
	39	e	お母さん、 何ともないの？
	40		え？ 引越しのトラック、もう着いちゃってるわよ
	41	f´	
	42		
	43	g	あ
	44		ちひろ
	45	g´	早くおいで
	46		
G	47		（足音）　（トンネル内）
	48		足元、気をつけな
	49		ちひろ、そんなにくっつかないでよ
	50		歩きにくいわ
	51		
	52		
	53		

	42	↓	（3／4拍子）このまま行っていけないかなぁ ♩＝108
D	43		（4／4拍子）やめてよ、そうやっていつも迷っちゃうのだから
	44		ちょっとだけ、ね
	45		あのうちみたいの何？
	46		石のほこら、神様のおうちよ
	47		
	48		
	49		
	50		お父さん大丈夫？ 任せとけ、
	51		この車は四駆だぞ
	52		千尋、座ってなさい
	53		
	54		
	55		あ、 う、
	56		お、 う、
	57		
	58		
	59		
	60		あ～あ～
	61		あなた いい加減にして
	62		
	63		トンネルだ！
	64		（門を眺める）
コーダ	65		
	66		
	67		
	68		

	44	a	
E	45	a	
	46	（左手：白龍が舞う様子を表す16分音符）	あ（橋の上から白龍が空を舞うのを眺める）
	47		
	48		あ～
	49		
	50		
	51		（千が橋から去り湯屋に戻る。場面は橋のまま）
	52		
	53		（カオナシの音）
	54		（3／4拍子）
F	55	a	（4／4拍子）（カマ爺のところで寝てしまう）
	56	a	
	57		
	58		
	59	e	
	60		
	61	f	
	62		
	63	e	

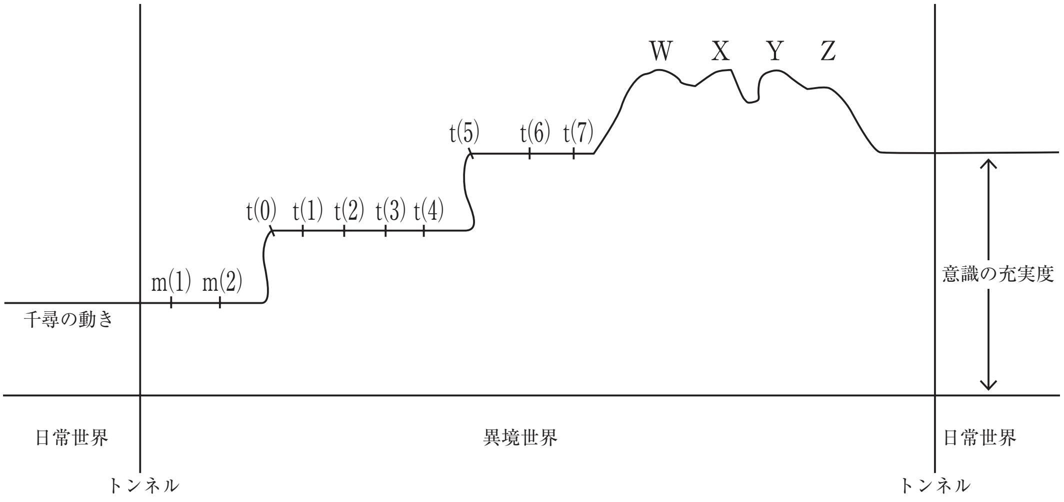
突然音楽が無くなる
（夜、雨、湯婆婆空から戻る）

	54		出口だよ　（トンネルの外に出る）
	55		あれ？ なあに？
	56		ひでぇ～
	57		わぁ～ 中もほこりだらけだ
Á	58	a	いたずら？ かなぁ？
	59		だから嫌だって言ったのよぉ
	60		
	61	á	
	62		オ～ライ、オ～ライ 平気よ
	63	b	ちひろ、行くよ
	64		ちひろ 早くしなさい！
	65		
	66		
コーダ	67		
	68		
	69		
	70		

終

〔岡部作成〕

［表２］『千と千尋の神隠し』のストーリー展開図



［４つの山場］
W：カオナシとの対決
X：海原電車に乗り込む
Y：千尋とハクの飛行
Z：クイズ解き

［逃避の行動］
m(1)：両親の豚への変身
m(2)：船着き場が川になっている

［積極的、能動的な冒険］
t(0)：橋を渡って、湯屋に紛れ込む
t(1)：外階段を下りて、釜爺のいる地下のボイラー室にたどりつく
t(2)：釜爺への仕事の依頼
t(3)：湯婆婆の御殿（最上階の部屋）へ途中から一人で会いに行く
t(4)：湯婆婆から仕事の許可をもらう
t(5)：湯屋での仕事、雑巾がけや湯釜の掃除
t(6)：オクサレ様の接待
t(7)：ハク竜を助けに、湯婆婆の御殿へ忍び込む

主人公・千尋の心の動き＝意識の充実度

当論文で論及した場面は一部、X、ｔ（５）、ｔ（４）などの記号で表記した。それらが全体的な展望のなかでどのような位置関係を占めているかについて明示しようとしたところに、この展開図の意図がある。また同時に、千尋の意識の充実度を曲線の輪郭線で描いたことは、本論文の主張や考察に基づくとは言え、数値的裏づけを伴わないイメージ、一種の粗描に他ならないことに留意されたい。

〔三宅作成〕

論　文

大学生の就職活動に関する調査研究
ー常磐大学人間科学部コミュニケーション学科卒業生の事例Ⅱ[1]ー

石川　勝博
ISHIKAWA, Masahiro

A study on the job seeking activities among university students in the Department of Communication, Faculty of Human Science, at Tokiwa University Part Ⅱ

The purpose of this study was to illustrate the basic data of job seeking activities among students of Department of Communication Faculty of Human Sciences, at Tokiwa University. In March 2011, a questionnaire survey was conducted on the graduating class of 2010 to investigate six items of inquiry among the following three groups of university students: Group 1 (early acceptance to employment), Group 2 (late acceptance to employment), and Group 3 (still job hunting). The seven items were: 1) the way they spent their college life, 2) hometown or prefectural orientation, 3) time of starting job seeking activities, 4) the quantity of job seeking activities, 5) information sources of job seeking activities, 6) self-evaluation for their job seeking activities, and 7) results of their job seeking activities. Group 1 started job hunting early on and spent much energy, however no distinct difference was found between Group 2 or 3. In other words, the factors that correspond to acceptance to employment were not determined by this study alone. Further data analysis and individual interviews are necessary to explore the factors.

はじめに

近年、大学において「キャリア教育」のあり方は関心事の１つとなっている。こうした状況を鑑み、筆者は本学コミュニケーション学科2010年度卒業生を対象とした質問紙調査を実施し、その就職活動の全般的な傾向を報告した（石川, 2011；太幡, 2011）。今後さらなる就職指導を行うためには、どのような学生が内定[2]を獲得しているのかを明らかにすることが求められる。そこで、本研究では、石川（2011）のデータを再分析し、就職活動に関わる要因と内定獲得状況との関連を検討し、就職指導の基礎データを示すことにしたい。

１．研究の背景と目的

大学生の就職に関する研究は、学歴社会論との関連から、新規大卒者を対象に初職への就職に焦点を当てたものがほとんどであった（苅谷, 2010）。例えば、「新規大卒者の出身大学の『入試難易度』に応じた就職先企業規模の相違や、大学在学中の学業やサークル活動

の積極性などの個人単位の変数と、内定獲得状況や内定先の規模、内定先への満足などとの関連性を分析するタイプの研究（本田, 2010, p.27)」が挙げられる。本研究では、後者の視点から個人単位の変数を分析することにしたい。

筆者は、人間科学部コミュニケーション学科の現状に即した指導のあり方の検討するため、2010年度同学科卒業生を対象として学生生活と就職活動に関する質問紙調査を実施した（石川, 2011)。その結果は、次のようにまとめられる。１）大学生活においては、アルバイト経験率、部活・サークルの所属率が高い。趣味・娯楽、学業（ゼミ・卒論)、アルバイトには熱心であったが、課外活動や資格取得はそれほどではない。２）試験勉強開始には遅れがあるようだが、情報収集開始や初入社試験の受験は企業側のスケジュールに対応している。３）勤務地の希望は、本人と保護者共に比較的地元志向が強い。４）就職活動量の平均像は、学内説明会の参加数が５～６回、学外説明会が15～16回、エントリーシート提出社数41～50社、会社見学５～６社、入社試験の受験数11～15社、人事面接数10～11社である。５）就職活動の情報源としては、インターネットやパンフレットなど「特定の」の情報を得られるメディアを活用し、マス・メディアによる「一般的な」就職情報取得には熱心ではない。学生支援センターキャリア支援担当（名称は2010年度卒業生在学当時）の利用は、情報収集、相談共に積極的であった。６）就職活動に対する自己評価は、早期、晩期にかかわらず内定を獲得した者は、未獲得の者よりも高く評価している傾向が見られた。７）就職活動の「長期化」が顕著であった。

苅谷・平沢・本田・中村・小山（2006）や堀・濱中・大島・苅谷（2006）は、入試難易度の比較的低い、しかも設立されて歴史の浅い大学グループ（以下、彼らの研究にしたがいＣグループと表記する）に焦点を当てて、学生の就職活動を分析している。堀ら（2006）の研究では、Ｃグループの特徴として、内定率は５月末までに20％強に過ぎないが、その後少しずつ上昇すること、内定時期はバラツキが大きく、４年生の４月頃から卒業式直前の時期まで長い期間に渡っていることを示している。これは、石川（2011）の調査でも同様であり、彼らの研究結果は、本学コミュニケーション学科の学生の指導にも示唆を与える可能性があると考えられる。その一方で、相違が見られた結果もある。それは就職活動量である。

苅谷ら（2006）の調査では、資料を請求した企業数、エントリーシートを送付した企業数、説明会に参加した企業数、面接・試験を受けた企業数は、全てにおいて１～５社とする者が最も多かった。石川（2011）の調査では、先述の「就職活動量の平均像」から分かるように苅谷ら（2006）のサンプルよりも活発である。こうした理由に就職活動におけるインターネット利用の増大が考えられる。したがって、先行研究の知見がそのまま適用できない場合があり、ここでもコミュニケーション学科の現状に即した研究の必要性が指摘できる。

その端緒として、本研究では、同学科のどのような学生が内定を獲得したのか示すことにしたい。太幡（2011）は、同学科学生を初めての内定獲得時期によって早期群、晩期群、未獲得群にグループ化し、後輩に「真似してほしいこと」と「真似してほしくないこと」として自由記述させたデータを分析した。その結果、グループによって多く言及される内容に差異が見られた。すなわち、早期群は真似してほしいこととして「事前準備」、真似してほしくないこととして「準備不足」を、晩期群は真似してほしくないこととして「行動の限定」、未獲得群は真似してほしいこととして「あきらめない」を多く言及していた。

以上を鑑み、本研究では、内定獲得状況（初めての内定獲得が早期、晩期、未獲得）と石川（2011）で挙げた要因（学生生活、就職活動）との関連性を検討する。

２．調査

２．１．調査の方法と調査対象者

人間科学部コミュニケーション学科2010年度卒業生63名のうち、2011年３月29日の学位記等授与に参加した49名を対象に、集合法による質問紙調査を実施した。自営業を継ぐため実質的な就職活動をしていない１名と、回答に不備の見られた４名を除く44名（男14名、女30名）が分析の対象となった。

さらに、太幡（2011）や堀ら（2006）を参考に、内定獲得者のうち４年生７月までに初めての内定を獲得

した者を内定獲得早期群、４年生８月以降に内定を獲得した者を内定獲得晩期群、獲得できなった者を未獲得群とした。男女別の内定獲得状況は表１に示す通りである。本研究では、この３群の比較によって、内定獲得状況（初めての内定獲得が早期、晩期、未獲得）に関わる要因を検討する。

表１　分析対象者の内訳

	早期群	晩期群	未獲得群	計
男	3	6	5	14
女	11	11	8	30
計	14	17	13	44

２．２．調査票の構成

次の（ａ）～（ｈ）の順に回答を求めた。

（ａ）属性情報

性別、所属コース、所属ゼミのコース・学科、入試種別

（ｂ）大学生活

アルバイト経験、部活・サークルの所属、大学生活での取り組み（学業、アルバイト、課外活動、趣味・娯楽、資格取得）、在学中に取得した資格（自由記述）

（ｃ）就職活動の開始時期、勤務地の希望

（ｄ）就職活動の量

企業説明会（学内・学外）の参加数、会社見学の回数、エントリーシートを提出した社数、入社試験を受けた社数とそのうち人事面接を受けた社数

（ｅ）就職活動の情報源

マス・メディア（テレビ、新聞、雑誌）、就職情報に関するメディア（インターネット、活字）、対人コミュニケーション、学生支援センターキャリア支援担当の利用度

（ｆ）就職活動への自己評価,

就職活動の仕方、努力、結果、その満足度

（ｇ）就職活動の結果

内定獲得の状況とそれぞれの時期

（ｈ）就職活動を迎える後輩に伝えたいこと

真似してほしいこと、真似してほしくないこと（自由記述）。

３．分析

３．１．大学生活

筒井（2010）は、中堅女子大学生には一般受験を経て入学する学生がいる一方で、指定校推薦によって入学する学生も一定数存在するとし、そこに基礎学力の学内格差があり、就職活動に少なからず影響があるだろうと述べている。そこで、本学科おける入学の形態と内定獲得状況との関連を調べることとした。センター、試験入試ＡあるいはＢ、指定校推薦、指定校推薦（常磐大学高校）、一般推薦、スポーツ推薦、ＡＯ入試、その他の選択肢を設け回答させた。入学形態によって試験系と推薦系に分け、内定獲得状況とクロスした（表２）。なお、その他として編入学の学生が１名いたが、この２群に分類できないため対象から除いた。x^2検定の結果、入学形態と内定獲得状況とに有意な関連は認められなかった（x^2(2) =0.10 n.s.）。

表２　入学形態と内定獲得の結果

	早期群	晩期群	未獲得群	合計
試験系	6	6	5	17
推薦系	8	10	8	26
合計	14	16	13	43

x^2(2) =0.10 n.s.

アルバイト経験率（95.45％）やサークル所属率（79.55％）は、いずれも高かった（石川, 2011）。それぞれと内定獲得状況の関連を調べたところ、アルバイト経験、サークル所属のいずれも有意ではなく（x^2(2) =1.03 n.s.; x^2(4) =2.83 n.s.）、内定獲得状況を規定する要因とは考えづらいと考えられる。

次いで、大学生活における取り組みとの関連を調べた。「大学時代に熱心に取り組んだこと」は、履歴書、エントリーシート提出や面接の際には必ずといってよいほどなされる重要な質問である。そこで、内定獲得状況を独立変数、大学生活への取り組みを従属変数として一元配置分散分析を行った。その結果、「学業（ゼミ、卒論に関すること）（F(2,41) =0.86 n.s.）」、「学業（ゼミ、卒論に関すること以外の授業）（F(2,41) =0.52 n.s.）」、「アルバイト（F(2,41) =0.58 n.s.）」、「課外活動（部活・サークルなど）（F(2,41) =0.84 n.s.）」、「趣味・娯楽（F(2,41) =0.52 n.s.）」、「資格取得（F(2,41) =1.32 n.s.）」と、いずれにおいても条件の効果は有意ではなかった。平沢（2010）のように、クラブ活動への参加度（熱心さ）と就職活動の結果（内定先の企業規模、専門職、希望の仕事）との関連を示す研究例もあるが、今回の調査

では、内定獲得状況と関連する大学生活の取り組みを見いだすことができなかった。

さらに、在学中に取得した資格の数（普通自動車免許を除く）を従属変数、内定獲得状況を独立変数として一元配置分散分析を行った。その結果、条件の効果は有意ではなかった（$F(2,41)=0.37$ n.s.）。すなわち、内定獲得状況によって取得した資格の数に差は見いだされなかった。ただし、ここで問題としているのは取得した資格の数に過ぎない。資格の種類や内容を考慮する必要があり、資格取得が必ずしも求められない就職先を希望している場合があることも留意しなければならない（石川, 2011）。以上のように、内定獲得状況と大学生活での取り組みとの関連は認められなかった。

補足的な分析として、「課外活動」への熱心さが就職活動満足度を高める要因であることを示す研究（苅谷ら, 2006）を参考に、コミュニケーション学科においても同様な傾向が見られるのか確かめることにした。その結果就職活動への自己評価（仕方、努力、結果への満足の３項目）と課外活動（部活・サークルなど）との間に有意な相関が見られた（$r=.33$ $p<.05$; $r=.39$ $p<.05$; $r=.31$ $p<.05$）。その他の項目では相関は認められなかった。課外活動と就職活動への満足との関連について、苅谷ら（2006）は、「自己PRを考えたり、面接において企業の担当者と対話したりする中で、学生が当該活動の有益性を実感するかであると思われる（p.54）」と解釈している。本学科でも同様の理由であるのか今回の調査デザインでは明らかではないが、先行研究を裏づける結果となったことは興味深い。

３．２．就職活動

３．２．１．就職活動の開始時期

本研究は、就職開始時期を、１）入社試験のための勉強（問題集に取り組むなど）を始めた時期（入社試験の勉強開始時期）、２）企業、業界の情報を調べ始めた時期（情報収集開始時期）、３）入社試験を初めて受けた時期（初入社試験時期、ペーパーテストを受験する、人事面接を受けるなどを意味する）の３側面から捉える。調査票では、それぞれを開始した時期について、「～年生～月頃」というかたちで自由記述させた。その回答結果を３ヶ月単位でまとめたものが表３～表５である。

表３　就職活動の開始時期（試験勉強）

	早期群		晩期群		未獲得群	
３年生４月 ～ ６月	1	7.14%	2	11.76%	0	0.00%
３年生７月 ～ ９月	1	7.14%	0	0.00%	3	23.08%
３年生10月 ～ 12月	11	78.57%	10	58.82%	7	53.85%
３年生１月 ～ ３月	1	7.14%	2	11.76%	3	23.08%
４年生４月 ～ ６月	0	0.00%	3	17.65%	0	0.00%
計	14	100%	17	100%	13	100%

表４　就職活動の開始時期（情報収集）

	早期群		晩期群		未獲得群	
３年生４月 ～ ６月	0	0.00%	3	17.6%	1	7.69%
３年生７月 ～ ９月	6	42.86%	2	11.8%	4	30.77%
３年生10月 ～ 12月	8	57.14%	8	47.1%	6	46.15%
３年生１月 ～ ３月	0	0.00%	2	11.8%	2	15.38%
４年生４月 ～ ６月	0	0.00%	2	11.8%	0	0.00%
計	14	100%	17	100%	13	100%

表５　就職活動の開始時期（入社試験）

	早期群		晩期群		未獲得群	
３年生４月 ～ ６月	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%
３年生７月 ～ ９月	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%
３年生10月 ～ 12月	4	28.57%	9	52.94%	6	46.15%
３年生１月 ～ ３月	9	64.29%	3	17.65%	5	38.46%
４年生４月 ～ ６月	1	7.14%	5	29.41%	2	15.38%
計	14	100%	17	100%	13	100%

試験勉強開始時期（表３）では、晩期群にバラツキが見られるが、いずれにおいても３年生の10月～12月に多い。各群の中央値を算出したところ、早期群が３年生10月、晩期群が３年生12月、未獲得群が３年生11月であった。内定を獲得できなかった未獲得群は、とりたて試験勉強開始が遅いわけではなく、晩期群よりやや早い傾向が伺える。

情報収集開始（表４）は、早期群では３年生の７月～９月と10月～12月に集中している。他の群はバラツキがあるが同時期に回答が多い。個別のデータを見ると、晩期群や未獲得群に早期群よりも早めに情報収集を開始していた者もいることが分かる。各群の中央値を算出したところ、いずれも３年生10月であった。

初めて入社試験を受けた時期（表５）について最も多い回答は、早期群では３年生の１～３月、他の群では３年生10月～12月であった。各群の中央値を算出したところ、早期群と未獲得群が３年生１月、晩期群は３年生12月であった。晩期群は、早期群よりも早い時

期に初入社試験を受験する傾向が見られた。ただし、２番目に多い回答は４年生４月～６月とバラツキが見られる。未獲得群が特に出遅れている様子は見えない。

表３～表５の結果をまとめたものが表６である。早期群は、試験勉強開始の時期が早い傾向がある。すなわち、早めの行動が初めての内定獲得「時期」に関わっている可能性が指摘できる。これは太幡（2011）の研究結果とも対応すると解釈できる。早期群は、真似してほしいこととして「事前準備（自己分析、業界研究をしっかりすること）」、真似してほしくないこととして「準備不足（対策をギリギリになって始めること）」を多く言及していた。早期に初の内定を獲得した者は「準備」の重要性を強く認識していたと考えられる。

時期は遅れたとはいえ内定を獲得した晩期群と未獲得群とを比較すると、試験勉強開始は未獲得群が、初めての入社試験受験は晩期群が早い。このように内定獲得の「有無」と開始時期に明瞭な関係を見いだすことはできない。以上から考えると、就職活動の開始時期は、内定獲得との「時期」に関わるが、「有無」については決定的な規定要因とは言えない。

表６　内定獲得状況における就職活動開始時期の中央値

	早期群	晩期群	未獲得群
試験勉強	３年生10月	３年生12月	３年生11月
情報収集	３年生10月	３年生10月	３年生10月
初入社試験	３年生１月	３年生12月	３年生１月

３．２．２．勤務地の希望

廣瀬・高良・金城（2004）が指摘するように、「地元志向」は職業選択の重要な要因の１つであるが、場合によっては就職活動をする地域を狭め、内定獲得の時期を遅らせる要因にもなりかねない。また、平尾・重松（2006）は、地元志向が強い学生は、「就職活動にネガティブ」としている。すなわち、「将来やりたい仕事があるわけでなく、仕事する自分をイメージできず、就職活動に意欲的でもない。親が地元就職を勧めるがそれに意見が合わないことはない（平尾・重松、p.167, 2006）」のである。

勤務地希望としての地元志向には、保護者の意向も関連すると考えられるので、本人と保護者の希望を質問した。本研究での保護者の希望とは、「保護者が重視していると学生が認識している度合い」を意味している。地元志向は、「実家から通勤できる」、「地元にある（茨城県など、出身県内）」、「地元以外（茨城県外など、出身県外）」の３項目について、「重視しなかった」から「重視した」までのリッカート法による５点尺度で測定した。

３群を比較するため、内定獲得状況を独立変数、地元志向を従属変数として一元配置分散分析を行った。その結果、本人においては、「実家から通勤できる（$F(2,41)=0.63$ n.s.）」、「地元にある（$F(2,41)=0.18$ n.s.）」、「地元以外（$F(2,41)=0.26$ n.s.）」のいずれも条件の効果は有意ではなかった。

保護者についても同様に一元配置分散分析を行った。その結果、「実家から通勤できる（$F(2,41)=3.64$ $p<.05$）」、「地元にある（$F(2,41)=2.25$ n.s.）」、「地元以外（$F(2,41)=1.18$ n.s.）」となった。「実家から通勤できる」において条件が有意であった。多重比較（TukeyのHSD法）の結果、早期群は未獲得群よりも「実家から通勤できる」の度合いが有意に高いことが示された（$p<.05$）。早期群は、保護者の意向としての「実家から通勤できる」を、未獲得群よりも強く認識していると言える。

３．２．３．就職活動の量

就職活動の量として、学内説明会、学外説明会、会社見学の回数、エントリーシートを提出した社数、入社試験を受けた社数とそのうち人事面接を受けた社数を設定した。早期群、晩期群、未獲得群の活動量を次の表７～表12に示す。

表７　就職活動の量（学内説明会）

	早期群		晩期群		未獲得群		計	
０回	2	14.29%	0	0.00%	0	0.00%	2	4.55%
１～５回	10	71.43%	9	52.94%	8	61.54%	27	61.36%
６～10回	2	14.29%	6	35.29%	5	38.46%	13	29.55%
11～15回	0	0.00%	2	11.76%	0	0.00%	2	4.55%
計	14	100%	17	121%	13	100%	44	100%

表８　就職活動の量（学外説明会）

	早期群		晩期群		未獲得群		計	
０回	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%
１～５回	3	21.43%	4	23.53%	3	23.08%	10	22.73%
６～10回	2	14.29%	5	29.41%	4	30.77%	11	25.00%
11～15回	3	21.43%	3	17.65%	2	15.38%	8	18.18%
16～20回	2	14.29%	1	5.88%	2	15.38%	5	11.36%
21～30回	3	21.43%	2	11.76%	0	0.00%	5	11.36%
30回以上	1	7.14%	2	11.76%	2	15.38%	5	11.36%
計	14	100%	17	100%	13	100%	44	100%

表９　就職活動の量（会社見学）

	早期群		晩期群		未獲得群		計	
０社	0	0.00%	4	23.53%	2	15.38%	6	13.64%
１～５社	7	50.00%	9	52.94%	8	61.54%	24	54.55%
６～10社	4	28.57%	1	5.88%	2	15.38%	7	15.91%
11～15社	0	0.00%	1	5.88%	1	7.69%	2	4.55%
16～20社	2	14.29%	1	5.88%	0	0.00%	3	6.82%
21～30社	1	7.14%	1	5.88%	0	0.00%	2	4.55%
30社以上	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%
計	14	100%	17	100%	13	100%	44	100%

表10　就職活動の量（エントリーシートを提出した社数）

	早期群		晩期群		未獲得群		計	
０社	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%
１～５社	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%
６～10社	0	0.00%	3	17.65%	1	7.69%	4	9.09%
11～15社	0	0.00%	1	5.88%	0	0.00%	1	2.27%
16～20社	0	0.00%	3	17.65%	2	15.38%	5	11.36%
21～30社	2	14.29%	2	11.76%	3	23.08%	7	15.91%
31～40社	1	7.14%	2	11.76%	2	15.38%	5	11.36%
41～50社	3	21.43%	3	17.65%	0	0.00%	6	13.64%
51～60社	1	7.14%	2	11.76%	1	7.69%	4	9.09%
61～70社	1	7.14%	0	0.00%	2	15.38%	3	6.82%
71～80社	2	14.29%	0	0.00%	1	7.69%	3	6.82%
81～90社	0	0.00%	0	0.00%	1	7.69%	1	2.27%
91～100社	1	7.14%	0	0.00%	0	0.00%	1	2.27%
100社以上	3	21.43%	1	5.88%	0	0.00%	4	9.09%
計	14	100%	17	100%	13	100%	44	100%

表11　就職活動の量（入社試験）

	早期群		晩期群		未獲得群		計	
０社	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%
１～５社	4	28.57%	5	29.41%	4	30.77%	13	29.55%
６～10社	2	14.29%	4	23.53%	3	23.08%	9	20.45%
11～15社	4	28.57%	2	11.76%	2	15.38%	8	18.18%
16～20社	0	0.00%	0	0.00%	3	23.08%	3	6.82%
21～30社	3	21.43%	4	23.53%	1	7.69%	8	18.18%
30社以上	1	7.14%	2	11.76%	0	0.00%	3	6.82%
計	14	100%	17	100%	13	100%	44	100%

表12　就職活動の量（人事面接）

	早期群		晩期群		未獲得群		計	
０社	0	0.00%	0	0.00%	1	7.69%	2	4.55%
１～５社	0	0.00%	0	0.00%	1	7.69%	1	2.27%
６～10社	5	35.71%	8	50.00%	3	23.08%	16	36.36%
11～15社	7	50.00%	4	25.00%	5	38.46%	16	36.36%
16～20社	1	7.14%	0	0.00%	2	15.38%	3	6.82%
21～30社	1	7.14%	1	6.25%	1	7.69%	3	6.82%
30社以上	0	0.00%	3	18.75%	0	0.00%	3	6.82%
計	14	100%	16	100%	13	100%	44	100%

学内説明会の参加数（表７）の３群の中央値は、いずれも「１～５回」であった。 早期群において０回とする不活発な者が２名（14.29%）、晩期群に「11～15回」と活発な者が２名(11.76%)いる。学内説明会の参加数は、必ずしも内定獲得状況には反映されないようである。

学外説明会参加数（表８）の中央値は、早期群では「11～15回」であり、晩期群と未獲得群では「６～10回」であった。すなわち、早期群は、晩期群や未獲得群よりも学外説明会に相対的に多く参加していると考えられる。積極的に外部の説明会に参加することが、早期の内定獲得に繋がる可能性を示唆するものであろう。「21回以上」参加していた者が、早期群に４名(28.57%)、晩期群に４名（23.53%）、未獲得群に２名（15.38%）見られた。早期に内定を獲得できなかった群にもねばり強く説明会に参加した学生がいることも見逃せない。

会社見学の参加数（表９）は、いずれの群も「１～５社」とする者が最も多い。０社という回答は早期群には見られないが、晩期群に４名（23.53%）、未獲得群に２名（15.38%）見られた。早期群の中央値は「１～５回」と「６～10回」の間、すなわち「５～６回」である。晩期群と未獲得群は「１～５回」であった。ここでも早期群は相対的に参加数が多かった。晩期群のバラツキが大きいことには注意は必要であろう。

エントリーシートを提出した社数（表10）の中央値を示すと、早期群では「50～60社」と「61～70社」の間、「60～61社」であった。晩期群が「21～30社」、未獲得群は「31～40社」であった。早期群は多くの企業にエントリーしたようである。未獲得群は、晩期群よりも多くエントリーしている。これは内定は獲得できな

かったもののねばり強く活動を続けた者がいたためと考えられる。

入社試験の受験社数（表11）の中央値は、早期群で「11～15社」、晩期群と未獲得群は「６～10社」であった。早期群は相対的に多く入社試験を受験しており、「21社以上」受験した者が４名（28.57％）見られた。一方で、晩期群に６名（35.29％）いることも注目される。

人事面接の受験社数（表12）の中央値は、早期群と未獲得群が「６～10社」、晩期群は「１～５社」と「６～10社」の間、「５～６社」である。なお、晩期群においてこの質問に無回答の者が１名いたので、同群の合計は16名になる。早期群は、比較的多く入社試験を受験していることが分かる。晩期群では30社以上受験した者が３名（18.75％）おり、他の群には見られない数字である。粘り強く就職活動を続けた者もいることが見て取れる。早期群と晩期群では受験社数が５社以下の者は０名だが、未獲得群で２名（15.38％）いることも注目される。

以上の結果について、中央値から見た平均像としてまとめると、表13の通りになる。

表13　内定獲得状況における就職活動の量の中央値

	早期群	晩期群	未獲得群
学内説明会	１～５回	１～５回	１～５回
学外説明会	11～15回	６～10回	６～10回
会社見学	５～６社	１～５社	１～５社
エントリー	60～61社	21～30社	31～40社
入社試験	11～15社	６～10社	６～10社
人事面接	６～10社	５～６社	６～10社

中央値を見る限り、早期群は就職活動量が相対的に多い。早期に初めての内定を獲得した者は、概して活発に就職活動を行っていたと言えよう。就職活動量は初の内定の「時期」に関わる要因であると解釈できる。時期が遅れたとはいえ内定を獲得をしている晩期群には、未獲得群よりも不活発な点（エントリー数や人事面接数）があった。すなわち、就職活動の量は内定の「有無」との関連が明確ではなかった。ただし、晩期群において、個人差が大きい点は留意すべきであろう。以上から考えると、開始時期と同様に就職活動の量も、内定獲得との「時期」に関わるが、「有無」についてはは決定的な規定要因とは言えないのではなかろうか。

以下、補足的なデータとして、就職活動開始から内定を獲得して就職活動を終了するまでの平均期間を示す。早期群において、試験勉強開始から8.14ヶ月（*SD*=3.80）、情報収集開始から8.93ヶ月（*SD*=3.60）、初入社試験から5.57ヶ月（*SD*=3.80）となった。晩期群では、試験勉強開始から13.24ヶ月（*SD*=2.77）、情報収集開始から14.71ヶ月（*SD*=2.74）、初入社試験から11.41ヶ月（*SD*=2.32）であった。

３．２．４．就職活動の情報源

円滑な就職活動を進める情報源として各種メディアや対人コミュニケーションがある。さらに、本学学生にとって重要な情報源として学生支援センターキャリア支援担当がある。調査では、54ページの表14に示す情報源をどの程度利用したかを尋ねた。「全く利用しなかった」から「何回も利用した」の５つの選択肢から１つを選ばせた。情報源は、マス・メディア（テレビ、新聞・雑誌）、就職情報に関するメディア（就職メディア）としてのインターネットと活字メディア、そして対人コミュニケーションに分けられる。以下、表14に基づき、内定獲得状況と利用の関連を検討する。

就職情報サイトや志望先ホームページは、内定獲得状況に関わらず活発に利用している。「何回も利用した」と「数回利用した」の合計は、就職情報サイトでは全ての群で100％であった。志望先ホームページでは、早期群が12名（85.71％）、晩期群が13名（76.47％）、未獲得群９名（69.23％）となった。

テレビ、新聞・雑誌といったマス・メディアの利用は総じて少ない。テレビでは、「何回も」と「数回」の合計は早期群で５名（35.71％）、晩期群で３名（17.65％）、未獲得群では１名（7.69％）の順となった。新聞・雑誌は、早期群で４名（28.57％）、晩期群で２名（11.76％）に対して、未獲得群では５名（38.46％）とよく利用していた。

就職対策マニュアル書籍の「何回も」と「数回」の合計は、早期群８名（57.14％）、未獲得群８名（61.54％）であった。それに対して、晩期群は７名（41.18％）とやや少なく、「全く利用しなかった」という回答が５名（29.41％）も見られた。しかし、マニュアル書籍を利用せずとも、インターネットを利用して問題を解い

たり、本学支援センターの資料（『JOB NAVI』などのハンドブック）を活用したりした可能性も考えられる。また、SPI試験などが課せられない企業、一般的な就職活動マニュアルと異なるかたちで採用をする企業などを受験した可能性もあるだろう。したがって、この学生達が一概に不熱心であったとは言えないとも考えられる。

企業のパンフレットは総じて利用度が高く。早期群12名（85.71％）、晩期群15名（88.24％）、未獲得群11名（84.62％）である。利用しなかったという回答はほとんど見られない。

以上のメディア利用状況を小括すると、早期群は、相対的にメディア利用が活発であった。特に志望先ホームページやテレビをより利用していた。一方で、晩期群はメディア利用が不活発であり、未獲得群よりも利用が少ないメディア（新聞･雑誌、就職対策マニュアル書籍）も見られた。このようにメディア利用は晩期群と未獲得群とを分ける要因とは考えがたい。したがって、メディア利用は内定獲得の「時期」に関わるが、「有無」を規定する決定的な要因とは言えない。

対人コミュニケーションはやや不活発であり、「全く行わなかった」とする回答が一定数見られた点が特徴的であった。先ず、企業の見学・訪問おいて、「何回も」と「数回」の合計が早期群の10名（71.43％）に対して、晩期群６名（35.29％）、未獲得群５名（38.46％）である。早期に初めての内定を獲得した者は、相対的に多くの会社を見学・訪問をしていた。「全く行わなかった」者は、早期群は０名だが、晩期群で６名（35.29％）、未獲得群で４名（30.77％）も見られた。

学内の先輩との会話では、「何回も」と「数回」の合計が早期群は６名（42.86％）に対して、晩期群４名（23.53％）、未獲得群で１名（7.69％）である。ここでも、早期群はその度合いが相対的に高く、次いで晩期群、未獲得群となる。「全く行わなかった」者は、早期群４名（28.57％）に対して、晩期群11名（64.71％）、未獲得群７名（53.85％）にのぼる。

学内の友人との会話は、「何回も」と「数回」の合計が早期群８名（57.14％）、晩期群10人（58.82％）、未獲得群８名(61.54％)となっている。他の対人コミュニケーションの項目と比較するとその割合は高い。た

表14　就職活動に利用した情報源

		全く利用しなかった	一回だけ利用した	二･三回利用した	数回利用した	何回も利用した	計
就職情報サイト	早期群	0	0	0	1	13	14
	晩期群	0	0	0	2	15	17
	未獲得群	0	0	0	2	11	13
	計	0	0	0	5	39	44
志望先のホームページ	早期群	0	0	2	4	8	14
	晩期群	1	0	3	6	7	17
	未獲得群	1	1	2	5	4	13
	計	2	1	7	15	19	44
テレビ	早期群	7	1	1	4	1	14
	晩期群	12	2	0	2	1	17
	未獲得群	9	2	1	0	1	13
	計	28	5	2	6	3	44
新聞・雑誌	早期群	6	1	3	4	0	14
	晩期群	11	1	3	2	0	17
	未獲得群	5	1	2	4	1	13
	計	22	3	8	10	1	44
就職対策マニュアル書籍	早期群	0	1	5	5	3	14
	晩期群	5	0	5	6	1	17
	未獲得群	0	2	3	6	2	13
	計	5	3	13	17	6	44
企業のパンフレット	早期群	0	0	2	3	9	14
	晩期群	1	1	0	5	10	17
	未獲得群	0	1	1	4	7	13
	計	1	2	3	12	26	44
企業の見学・訪問	早期群	0	1	3	4	6	14
	晩期群	6	0	5	4	2	17
	未獲得群	4	1	3	4	1	13
	計	10	2	11	12	9	44
学内の先輩	早期群	4	2	2	4	2	14
	晩期群	11	1	1	2	2	17
	未獲得群	7	1	4	0	1	13
	計	22	4	7	6	5	44
学内の友人	早期群	1	1	4	4	4	14
	晩期群	3	1	3	5	5	17
	未獲得群	3	0	2	6	2	13
	計	7	2	9	15	11	44
他大学の学生	早期群	5	2	3	2	2	14
	晩期群	9	1	3	3	1	17
	未獲得群	9	0	3	0	1	13
	計	23	3	9	5	4	44

だし、昨今の就職事情を考慮すると、学内の友人と就職活動に関わる会話をするのは当然であり、むしろ少ないとも考えられる。「全く行わなかった」者は、早期群 1 名（7.14%）に対して、晩期群 3 名（17.65%）、未獲得群 3 名（23.08%）であった。

他大学の学生との会話は全般的に不活発であった。そもそも他大学の友人が少ないという可能性も考えられるが、「何回も」と「数回」の合計は、早期群 4 名(28.57%)、晩期群 4 名(23.53%)、未獲得群 1 名(7.69%)に留まっている。「全く行わなかった」者は早期群で 5 名（35.71%）である。晩期群では 9 名（52.94%）、未獲得群では 9 名（69.23%）と半数を超えていた。

以上のように、就職に関わる対人コミュニケーションは、メディア利用と比較して不活発であったが、早期群は他の群よりも相対的に活発であった。就職に関わる対人コミュニケーションが活発である方が、より早期に内定を獲得していた。早期群の特徴として、企業見学や学内の先輩、他大学の学生など「同質性が低い相手」とのコミュニケーションが相対的に活発であることが挙げられる。こうした他者とのコミュニケーションが、面接に役立ったり、学内の友人だけでは得られない情報を得る機会になったと考えられる。すなわち、内定獲得の「時期」と会話する相手の同質性との関連が示唆されたと解釈できる。

ただし、その理由については、早期に内定獲得した安心感から、就職活動について様々な人たちと気軽に話せたといったものも考えられるので、慎重な解釈が必要である。また、他大学の学生と言っても、企業説明会などで出逢った他大学の学生、アルバイト先などで出逢った学生、他大学に進学した旧友など様々な意味がある。よって、「同質性が低い相手」とのコミュニケーションが内定獲得にどのように役立ったのかについては、さらなる精査が必要である。

学生支援センターの利用は、表15の通りである。「企業に関する情報収集」の「何回も」と「数回」を合計すると、早期群10名（71.43%）、晩期群12名（70.59%）であった。未獲得群は12名（92.31%）とその利用度が特に高い。就職活動が長期に渡ったため、同センターに足繁く通った結果と考えられる。「受験報告書」については、早期群10名（71.43%）、未獲得群 8 名（61.54%）であった。それに対して、晩期群は 8 名（47.06%）と不活発であり、「全く利用しなかった」者が 6 名（35.29%）も見られた。「スタッフへの相談」は、早期群 8 名（57.14%）、晩期群 8 名（47.06%）、未獲得群11名（84.62%）であり、未獲得群が最も活発で晩期群が不活発であった。「学外の人への相談」は、全般的に利用度は低いが、早期群 1 名（7.14%）、晩期群 5 名（29.41%）、未獲得群 1 名（7.69%）であり、他の項目とは異なり晩期群が最も活発であった。

表15　学生支援センターキャリア支援担当の利用度

		全く利用しなかった	一回だけ利用した	二・三回利用した	数回利用した	何回も利用した	計
企業に関する情報収集	早期群	1	1	2	6	4	14
	晩期群	3	0	2	4	8	17
	未獲得群	0	0	1	5	7	13
	計	4	1	5	15	19	44
受験報告書（合格体験記）による情報収集	早期群	0	3	1	6	4	14
	晩期群	6	2	1	5	3	17
	未獲得群	1	2	2	4	4	13
	計	7	7	4	15	11	44
スタッフへの相談	早期群	0	2	4	2	6	14
	晩期群	1	3	5	3	5	17
	未獲得群	0	2	0	8	3	13
	計	1	7	9	13	14	44
学外（ジョブカフェなど）の人への相談	早期群	4	4	5	0	1	14
	晩期群	8	2	2	4	1	17
	未獲得群	7	3	2	1	0	13
	計	19	9	9	5	2	44

学生支援センター利用状況の結果をまとめると、就職活動開始時期、活動量、情報源の活用とは異なり、早期群は他の群と比較してそれほど活発とは言えなかった。晩期群は「学外の人への相談」を除いては最も利用が不活発であった。一方で、未獲得群の利用度が高かったことが注目される。支援センターの利用は、内定獲得の「時期」や「有無」の決定的な規定要因とは言えないようである。大島（2010）は、就職課は活動が上手く進んでいない学生にとって重要な役割を果たしていると指摘する。今回の調査結果では、未獲得

群には同様の傾向があることが推測されるが、晩期群には必ずしも当てはまらないようである。

おわりに

本研究の目的は、常磐大学人間科学部コミュニケーション学科学生の就職指導に役立てる基礎的データを示すことであった。そこで、2010年度同学科卒業生を対象に質問紙調査を実施し、内定獲得状況（早期、晩期、未獲得）と大学生活と就職活動の要因との関連を検討した。その結果について以下にまとめ考察することとしたい。

今回は、入学形態、大学生活（アルバイト経験、サークル所属の有無、大学生活での取り組み）と内定獲得との明瞭な関係を見いだすことができなかった。苅谷ら（2006）は、Ｃグループ大学の学生に希望先に就職できる者、就職活動するものの内定が獲得できない者、就職活動をしない者などの分化が起こっており、それに関わる要因は大学の成績、要領の良さ、学業以外の学生生活など多岐にわたっていることを示している。しかも、どれが就職に関わる決定的要因というわけではなく、それぞれが少しずつ影響を与えながら、これといった決め手にはならないとする。今回も同様の傾向を意味している可能性があると考えられる。

次に、学生の内定獲得状況と就職活動との関連を分析するなかで、浮かび上がった３群の特徴をまとめる。

早期群は、総じて就職活動は活発であった。これが初めての内定獲得が早期であったことに繋がったと考えられる。就職活動開始（とりわけ試験勉強）が相対的に早かった。後輩へのアドバイスとして「事前準備」の重要性や「準備不足」の問題（太幡, 2011）を多く言及していたことを裏づける結果である。学外説明会の参加数、入社試験の受験社数、人事面接の受験者数、エントリーシートを提出した社数が多かった。メディア利用が相対的に活発で、企業の見学・訪問を積極的に行い、就職活動について学内外の友人、学内の先輩といった「同質性の低い」相手とも話していた。この群の特徴として興味深いのは、「実家から通勤できる」という保護者の意向を未獲得群よりも強く認識していたことである。今回の結果は、地元志向は一概にネガティブとは言えず、「地元に就職したいから努力する」といった「ポジティブな地元志向」が見られたと解釈できよう。以上に挙げた要因は、内定獲得の「時期」に関わると考えられる。

その一方で、この群の支援センター利用は、それほど積極的とは言えなかった。これは、早期に内定を獲得したため利用機会が少なかったとも、自力で就職活動を行い内定を獲得した結果であるとも解釈できる。

晩期群は、就職活動が相対的に不活発であった。初入社試験の受験は早めであるが、試験勉強開始は遅めである。活動量についても、エントリーシートを提出した社数、人事面接を受けた社数は少なめである。メディア利用も、就職情報サイトや志望先のホームページ以外は不活発であった。会社見学・訪問数も相対的に少なく学内の先輩や他大学の学生といった「同質性の低い」他者と就職について話すことも少なかった。学生支援センター利用については、「受験報告書」「スタッフへの相談」が不活発であった。

時期が遅れたとはいえ内定を獲得できた晩期群の方が、内定を獲得できなかった未獲得群よりも就職活動に不活発な点があることは意外とも言える。晩期群は、後輩にまねしてほしくないこととして「興味のあることだけにしぼってしまう」という「行動の限定」を多く言及していた（太幡, 2011）。すなわち、志望先にこだわりすぎたり、幅広く情報を集めることを怠ったりしたため、結果的に就職活動が不活発になったとも解釈できよう。

ただし、晩期群の個別のデータを見ると活発に活動した者もおり個人差が大きい。よって、この学生達を就職活動が不活発にもかかわらず、首尾良く内定を獲得したとひとくくりにして解釈するべきではないだろう。晩期群には、早めに就職活動を開始し長期にわたって続けた者、早めに開始したが途中で怠けた後に活動を再開した者、開始は遅れたがその後は集中して努力した者などが、混在しているのではなかろうか。その結果、就職活動に個人差が見られたと推測される。

最後に、未獲得群のデータを見る限り、この群の学生が内定を獲得できなかった理由を、努力不足に帰すことには無理があると思われる。試験勉強の開始は晩期群より早めであり、初入社試験の受験時期も遅いとは言えない。就職活動の量についても、早期群ほどで

はないがエントリーシートを多く提出しており、人事面接も早期群と変わらない数を受験している。情報源の活用においてメディア利用も少ないとは言えない。ただし、晩期群と同様に「同質性の低い」他者と就職についての会話が少なかった。特徴的なのは、学生支援センター利用が活発なことである。「企業に関する情報収集」は 3 群で最も積極的であり、「受験報告書」「スタッフへの相談」なども晩期群より積極的であった。総じて言えば、晩期群よりも就職活動開始が遅いわけではなく、しかもより活発に動いていた。このように晩期群と未獲得群の就職活動開始や活動量に明確な違いは見られず、内定獲得の「有無」を規定する決定的な要因は明確にできなかった。

繰り返しを厭わずに、以上の本研究の結果を示すと、「早期群＝早めの行動と活発に活動した学生達」と言えそうである。この学生達は、就職活動開始が早く、就職活動量やメディア利用が多く、同質性の低い他者とも就職の話をしていた。これらが内定獲得の「時期」に関わる要因である可能性が示唆される。

その一方で、時期は遅れたとはいえ内定を獲得した者と獲得できなかった者、すなわち内定獲得の「有無」を分ける要因は明確にすることができなかった。未獲得の学生の方がむしろ熱心に活動している姿さえ見て取れる。したがって、「晩期群＝粘り強く努力した学生達」、「未獲得群＝努力をしなかった学生達」という単純な図式では捉えられないことを強調しておきたい。

この結果は、苅谷ら（2006）が指摘する「就職活動のタイミング、活動方法など質的に異なる層が混在している。就職活動の量と活動期間と就職活動の結果は必ずしも線形的な関係になっているわけではない（p.81）という指摘と一致するものとも考えられる。したがって、学生に対して「標準的な就職指導」を施すことは困難である。早期群の分析から見いだされた「早めの行動」や「活発な活動」を促すことは当然として、それだけでは、昨今の就職事情からすると不十分ではないかと思われる。

苅谷ら（2006）は、多様性の組み合わせのなかでは、「個別の指導を徹底するしかないだろう」と指摘する。今後の指導の基礎データを得るためには質問紙調査だけでなくインタビューを実施するなど、個別のデータの詳細な分析が求められよう。それとは別に継続的に調査を実施することで、コミュニケーション学科学生の就職活動の傾向を探っていく必要もあると考えられる。

引用文献

平尾元彦・重松政徳（2006）．大学生の地元志向と就職意識．大学教育，3，pp.161-168.

平沢和司（2010）．大卒就職機会に関する諸仮説の検討．苅谷剛彦・本田由紀（編）大卒就職の社会学　データからみる変化．東京大学出版会，pp.61-85.

廣瀬等・高良美樹・金城亮（2004）．大学新入生の学部・学科選択と就業意識に関する研究　一学部・学科種別による比較検討一．琉球大学法文学部紀要人間科学，13，pp.241-266.

本田由紀（2010）．日本の大卒就職の特殊性を問い直す-QOL問題に着目して．苅谷剛彦・本田由紀（編）大卒就職の社会学　データからみる変化．東京大学出版会，pp.27-59.

堀健志・濱中義隆・大島真夫・苅谷剛彦（2006）．大学から職業へⅢ その２―就職活動と内定獲得の過程―．東京大学大学院教育学研究科紀要，46，pp.75-98.

石川勝博（2011）．大学生の就職活動に関する調査研究　―常磐大学人間科学部コミュニケーション学科卒業生の事例―．人間科学29（1），pp.11-24.

苅谷剛彦（2010）．大卒就職の何が問題なのか　歴史的・理論的検討．苅谷剛彦・本田由紀（編）大卒就職の社会学　データからみる変化．東京大学出版会，pp.27-59.

苅谷剛彦・平沢和司・本田由紀・中村高康・小山治（2006）．大学から職業へIII その 1：就職機会決定のメカニズム．東京大学大学院教育学研究科紀要 46，pp.43-74.

大島真夫（2010）．大学就職部の斡旋機能とその効果．苅谷剛彦・本田由紀（編）大卒就職の社会学　データからみる変化．東京大学出版会，pp.129-150.

社団法人日本経済団体連合会　（2009）．大学卒業予定者・大学院修士課程修了予定者等の採用選考に関

する企業の倫理憲章　社団法人日本経済団体連合会　2009年10月20日　< http://www.keidanren.or.jp/japanese/policy/2009/087.html >（2011年５月24日）

太幡直也（2011）．就職活動について後輩たちに伝えたいこと―常磐大学人間科学部コミュニケーション学科卒業生の事例―．人間科学29（1）, pp.27-41.

筒井美紀（2010）．中堅女子大生の就職活動プロセス　活動期間と内定獲得時期の規定要因．苅谷剛彦・本田由紀（編）大卒就職の社会学　データからみる変化．東京大学出版会, pp.107-128.

１）　常磐大学人間科学部コミュニケーション学科の岩田温先生、石原亘先生、西澤弘行先生、中村泰之先生、寺島哲平先生、太幡直也先生には、調査の実施、本論文の作成にあたり、ご協力ならびに有益なコメントをいただいた。ここに記して御礼申し上げたい。もちろん本研究の内容についての責任は、筆者に帰するものである。

２）　本研究が対象とする2010年度卒業生向けの企業の倫理憲章（社団法人日本経済団体連合会, 2009）によれば、正式な内定日は10月１日以降とされている。したがって、それ以前に獲得したものは「内定」ではなく、「内々定」である。しかし、先行研究では、内定と内々定を区別せずに記述している例が多くみられることから（堀・濱中・大島・苅谷, 2006など）、本研究もそれにしたがうこととする。

論　文

大学生のチームワークに関するスキルを向上させるトレーニングの有効性[1,2]

太幡　直也
Naoya TABATA

Effects of social skill training to develop teamwork in university students

Social skills training to develop teamwork was conducted to develop teamwork in university students and the effectiveness of the training was evaluated. University students（n= 52）took part in social skill training intended to improve listening, persuasion, and leadership skills. Results indicated that students participating in the training had improved self-reported general social skills, knowledge summarization skills, and leadership skills after the training, compared to those that did not participate in the training. It is concluded that the training was effective in improving social skills related to teamwork.

大学生にとって、大学卒業後、社会を担う人材としての能力が求められている。経済産業省は、社会を担う人材として必要な能力を明確化するため、2006年に“社会人基礎力”を提唱した。“社会人基礎力”は“職場や地域社会で多様な人々と仕事をしていくために必要な基礎的な力”と定義され、“前に踏み出す力（アクション）”、“考え抜く力（シンキング）”、“チームで働く力(チームワーク)”の三つの能力で構成される(経済産業省, 2007)。そして、それぞれの能力に、合計12の下位要素が提唱されている（表１）。大学には、社会を担う人材としての学生の能力を育成するために、学生の基礎学力、専門知識の養成に加え、“社会人基礎力”の養成が期待されている。

一方、大学生が“社会人基礎力”を十分に身につけているとは言い難い現状がある。経済産業省（2010）による調査では、企業が学生に不足している能力として、“コミュニケーション能力”といった“社会人基礎力”全般に関わる能力を多く挙げていることが報告されている。したがって、企業は、多面的なコミュニケーション能力をもった人材を求めていると考えられる。

上記の社会情勢や企業側の要請を鑑みると、大学側としては学生の就職活動支援の一環として、大学生のコミュニケーションに関する能力を向上させる取り組みが必要となると考えられる。そこで、本研究では、コミュニケーションに関する能力に関するスキルを向上させる実践的取り組みを行う。

社会的スキル　コミュニケーションに関する能力の

表１．“社会人基礎力”の三つの能力、12 の要素

分類	能力要素	内容
前に踏み出す力（アクション）	主体性	物事に進んで取り組む力
	働きかけ力	他人に働きかけ巻き込む力
	実行力	目的を設定し確実に行動する力
考え抜く力（シンキング）	課題発見力	現状を分析し目的や課題を明らかにする力
	計画力	課題の解決に向けたプロセスを明らかにし準備する力
	創造力	新しい価値を生み出す力
チームで働く力（チームワーク）	発信力	自分の意見をわかりやすく伝える力
	傾聴力	相手の意見を丁寧に聴く力
	柔軟性	意見の違いや立場の違いを理解する力
	情況把握力	自分と周囲の人々と物事との関係性を理解する力
	規律性	社会のルールや人との約束を守る力
	ストレスコントロール力	ストレスの発生源に対応する力

注）経済産業省（2007）に基づき、著者が作成した。

うち、特に他者とのやりとりや関係構築に関する能力は、社会的スキルと呼ばれる。社会的スキルは、“対人関係を円滑にはこぶために役立つスキル（技能）”（菊池, 1988）と定義される[3]。

社会的スキルは対人関係や対人コミュニケーションの巧拙に関する“技能”であり、練習次第で習得可能であると考えられている。この考えに基づき、これまでに社会的スキルを向上させる数多くのトレーニングが実施されてきた（相川, 2009）。その中には、大学生を対象にした社会的スキルを向上させるトレーニングも含まれる（e.g., 相川, 1999; 栗林・中野, 2007）。例えば、栗林・中野（2007）は、13回の授業内で社会的スキルを向上させるさまざまなトレーニングを実施した。その結果、トレーニング後に、自分の態度や感情を表出する記号化スキル、他者の表出行動からその他者の態度や感情を判断する解読スキルなどの自己報告による得点が向上したことを示した。したがって、大学生を対象にコミュニケーションに関する能力に関するスキルを向上させるトレーニングを実施することは可能であると考えられる。

チームワークに関するスキル　本研究では、コミュニケーションに関する能力として、チームワークに関するスキルに特に着目する。チームワークは多様な人々と共に目標に向けて協力する能力であり、“社会人基礎力”を構成する能力の一つである。

チームワークを発揮するためには、チーム内の個々のメンバーが、目標達成のために他のメンバーに促進的な影響を与えることが必要である。この促進的な影響は、リーダーシップと呼ばれる（e.g., 山口, 2008）。リーダーシップには、目標達成機能（例：情報、意見、アイデアを提供する）、集団維持機能（例：他のメンバーのコミュニケーションを促進させる働きをする）があると位置づけられる（三隅, 1978）。

大学生は、社会を担う人材として、さまざまな者との間にチームワークを発揮できる能力が必要となると考えられる。特に、就業後は、職務上の目標を遂行するために、自分とは普段あまり関わりのない者や利害関係を伴う者（同じ組織で働く者、取引先など）、目上の者（先輩、上司など）と関わる機会が学生のときと比べて多くなると想定される。したがって、彼らと

の間でチームワークを発揮できる能力が特に必要となると考えられる。

一方、大学生の特徴として、普段接する機会の少ない者との関わりを苦手としている者が多いことが指摘されている。例えば、岡田（1991）は、現代青年が仲間内に自閉し、集団外に関心を持たない傾向があることを指摘している。また、榎本（1999, 2000）は、友人との活動を分類し、自分たちの世界を持ち、他者を入れない絆で関係を作る“閉鎖的活動”という側面があることを示した。そして、大学生がある程度“閉鎖的活動”をしていることを明らかにした。以上のことから、普段あまり関わり合いのない者や利害関係を伴う者、目上の者とチームワークを発揮することが苦手である大学生も多いと推察される。

以上の議論を踏まえると、大学生の“社会人基礎力”の向上にあたり、チームワークに関するスキルに着目する必要があると考えられる。そこで、本研究では、大学生にチームワークに関するスキルを向上させるトレーニングを実施し、その有効性を検証することを目的とする。

研究の概要　本研究では、大学生にチームワークに関するスキルを向上させるトレーニングを実施する。トレーニングは、チームワークを構成する能力である、聴くスキル、説得するスキル、リーダーシップのスキルの向上を図る内容とする（表３参照）。そして、トレーニング実施前後に社会的スキルを測定する。加えて、トレーニングを実施していない者にも同時期に社会的スキルを測定し、トレーニングの有無による社会的スキルの変化を比較してトレーニングの有効性を検証する。

本研究では、トレーニングの有効性を、社会的スキルに関する尺度に自己評定する方法で検証する。具体的には、以下の二つの尺度を用いる。一つは、社会的スキル全般を測定する、菊池（1988）の社会的スキル尺度（KiSS-18: Kikuchi's Social Skill Scale18項目版）である。トレーニングの効果があるならば、トレーニング実施条件のみでトレーニング後に得点が上昇すると予測される。もう一つは、島本・石井（2006）の日常生活スキル尺度である。日常生活スキルは、“効果的に日常生活を過ごすために必要な学習された行動や内面的な働き”（島本・石井, 2006）と定義され、社会的スキルよりも広義な概念と位置づけられている。島本・石井（2006）の日常生活スキル尺度には八つの下位尺度がある（表４参照）。日常生活スキル尺度に着目すると、個別のスキルを測定できるため、トレーニングの有効性を詳細に検討することが可能になると考えられる。日常生活スキル尺度のうち、情報要約力（大量の散乱する情報の中から重要なものを選び出し、秩序立てて再構成するスキル）は、“社会人基礎力”のチームワークのうちの情報把握力と関連が強いと考えられる。また、リーダーシップ（自分が所属する集団内での活動に積極的に関わっていこうとするスキル）は、チームワークを発揮する上で重要であるとされている（e.g., 山口, 2008）。したがって、トレーニングの効果があるならば、情報要約力、リーダーシップは、トレーニング実施条件のみでトレーニング後に得点が上昇すると予測される。

方法

調査対象者　2011年度に常磐大学人間科学部で開講された、“集合行動論”と、“コミュニケーション基礎演習１”の受講生に対し、2011年５月と８月の授業時に一斉配布により質問紙に調査を実施した[4]。２回の調査すべてに回答した136名（男性34名、女性102名、１回目の調査時の平均年齢19.57 ± 0.75歳）を分析対象とした。調査対象者はすべて常磐大学人間科学部の学生であり、トレーニング実施条件に心理学科の学生が４名含まれていた以外はすべてコミュニケーション学科の学生であった。

調査対象者のうち、“集合行動論”の受講生をトレーニング実施条件とした。また、“コミュニケーション基礎演習１”の受講生で、“集合行動論”の受講生ではない者をトレーニング非実施条件とした。条件ごとの学年と性別の内訳を表２に示す。“集合行動論”はコミュニケーション学科の選択科目で、配当年次は２年から４年であった。受講生の内訳では、３年生が37名で最も多かった。“コミュニケーション基礎演習１”はコミュニケーション学科の必修科目で、配当年次は２年であった。３年生以上の受講者は主に再履修

表２．条件ごとの学年と性別の内訳

		2年生	3年生	4年生
トレーニング実施	合計	6	37	9
	男性	2	9	3
	女性	4	28	6
トレーニング非実施	合計	76	8	0
	男性	12	8	0
	女性	64	0	0

者で、４年生の履修者はいなかった。なお、トレーニング実施条件には、両方の授業を重複して受講していた、２年生６名（男性２名、女性４名）、３年生４名（男性２名、女性２名）が含まれていた。

実験計画　トレーニング（実施、非実施）×調査時期（前、後）の２要因混合計画であった。トレーニング実施が実験参加者間要因、調査時期が実験参加者内要因である。

トレーニング実施条件では、“集合行動論”の授業内で、聴くスキル、説得するスキル、チームワークのスキル、リーダーシップのスキルを向上させるトレーニングを実施した。“集合行動論”の授業内容を表３に示す。トレーニングを実施するにあたり、受講生には以下の二点の達成目標を説明した。第一に、自分とは普段あまり関わりのない学生と円滑にコミュニケーションができるようになることであった。第二に、利害関係を伴う者や目上の者と円滑にコミュニケーションができるようになることであった。そして、普段あまり関わりのない学生とやりとりさせるために、座席は毎回、授業前に指定した。また、第二の達成目標を踏まえ、自分とは普段あまり関わりのない者に加えて目上の人ともやりとりさせるために、３人のチームでテーマを決めて社会人へのインタビューを行い、全体に発表する最終課題を課した。

一方、トレーニング非実施条件では、“コミュニケーション基礎演習１”の授業内で、コミュニケーション学科の教員がオムニバス形式で講義、演習を展開した。内容は、内容分析、デジタルビデオ編集、質問紙調査法に関するものであり、社会的スキルのトレーニングに関する内容は含まれていなかった。また、2011年度のコミュニケーション学科の授業には、社会的スキルを向上させることを主な目的とした授業は開講されていなかった。

手続き　本研究は、“日常生活に関するアンケート”の教示の下、２回の調査を実施した。回答者の匿名性を確保しつつトレーニング前後の回答を対応させるため、トレーニング実施条件、非実施条件ともに以下の手続きを用いた。いずれの調査とも、一連の手続きの所要時間は20分程度であった。

１回目調査では、まず、それぞれの授業時に一斉配布により質問紙に回答するように求めた。回答後、調査対象者に封筒を配布し、調査対象者本人が質問紙を封筒に入れ密封するように指示した。続いて、付箋を配布し、付箋に学籍番号を記入して封筒の上部に貼って提出するように求めた。

２回目の調査では、まず、それぞれの授業時に一斉配布により質問紙に回答するように求めた。回答後、封筒に貼られた付箋の学籍番号に基づいて、調査対象者に封筒を返却した。付箋は返却後、調査対象者本人が剥がすように指示した。続いて、封筒を開封し、２枚の質問紙をセットにして封筒に入れて提出するように求めた。全員の封筒を回収後、調査内容に関するデブリーフィングを行った。

質問紙の構成　２回の調査とも（ａ）～（ｃ）の順に回答を求めた。（ａ）属性情報として、性別や学年などに回答を求めた。（ｂ）社会的スキル全般に回答を求めるため、菊池（1988）の社会的スキル尺度（以下､KiSS-18）に､“１．いつもそうではない”から“５．いつもそうだ”の５件法で回答を求めた。（ｃ）個別のスキルに回答を求めるため、島本・石井（2006）の日常生活スキル尺度（24項目）に、“１．ぜんぜんあてはまらない”から“４．いつもあてはまる”の４件法で回答を求めた。日常生活スキルには､情報要約力､リーダーシップ、対人マナー、前向きな思考、自尊心、親和性、計画性、感受性の八つの下位尺度があり、それぞれ３項目から構成される。日常生活スキルの下位尺度の概要を表４に示す。

表３．“集合行動論”の授業内容

回	テーマ	授 業 内 容	トレーニング教材
1	ガイダンス	授業担当教員から、授業内容と受講生の目標を説明を受ける。 **※１回目の調査実施**	（なし）
2	話を聴く①	ペア同士で“開いた質問”“閉じた質問”を使って、相手の自己紹介を深く聴く。	独自作成
3	話を聴く②	ペア同士で“開いた質問”“閉じた質問”を使って、決められたテーマ（「最近の若者について」）について話し合う。	独自作成
4	観察する	３人のチームで、２人が“開いた質問”“閉じた質問”を使って、決められたテーマ（「日本の将来について」など）について話し合う。残りの１人はその様子を観察し、終了後、２人の話し方、身振りなどについてフィードバックする。役割を交代し、同様の話し合いを繰り返す。	独自作成
5	説得する①	各自で“愛情”“仕事”などの価値観に、大切にしている順で順位を付ける。続いて、５～６人のチームで、大切にしている価値観の順位を全員が納得できるまで話し合い、チーム内の順位を決定する。	星野（2007）の“私が大切にしていること”を著者が改変した資料
6	説得する②	前回のチームで、話し合いの仕方を振り返る。続いて、前回の課題の続きに取り組み、チーム内の順位を決定する。	（５回目と同様）
7	課題準備	３人のチームで、最終課題（チームで社会人にインタビューする）のテーマや質問内容について話し合う。	（なし）
8	説得する③	杉浦（2003）の“説得納得ゲーム”を、“節電のために、あなたが今日からできるオリジナルな工夫”のテーマで行う。ゲームは６人で行い、説得者（３人）は納得者（３人）に自分のアイデアを実行するように説得する。役割を交代し、全員が説得者、納得者を経験する。	杉浦（2003）の“説得納得ゲーム”（著者の承諾を得て使用）
9	説得する④	杉浦（2003）の“説得納得ゲーム”を、“高校生からの常磐大学の人気を上げるために、あなたが今日からできること”のテーマで行う。手順は前回と同じである。	（８回目と同様）
10	リーダーシップを学ぶ①	５～６人のチームで、各自に配られた情報カードを基に与えられた課題を解決する。	星野（2007）の“平和中学校”を著者が改変した資料
11	リーダーシップを学ぶ②	前回の自身のリーダーシップ行動を振り返る。そして、前回のチームで、リーダーシップを発揮する方法を話し合う。	（なし）
12	リーダーシップを発揮する①	10回目と同様、５～６人のチームで、各自に配られた情報カードを基に与えられた課題を解決する。	西村（2008）の“模擬店配置図”を著者が改変した資料
13	リーダーシップを発揮する②	10回目、12回目と同様、５～６人のチームで、各自に配られた情報カードを基に与えられた課題を解決する。	星野（2007）の“おもしろレジャーランド”を著者が改変した資料
14	発表する①	７回目に示された最終課題について、各グループがインタビュー内容や学んだことを５分間発表する。	（なし）
15	発表する②	７回目に示された最終課題について、各グループがインタビュー内容や学んだことを５分間発表する。 **※２回目の調査実施**	（なし）

表４．日常生活スキル尺度（島本・石井, 2006）の下位尺度

尺度名	説　明
情報要約力	大量の散乱する情報の中から重要なものを選び出し、秩序立てて再構成するスキル
リーダーシップ	自分が所属する集団内での活動に積極的に関わっていこうとするスキル
対人マナー	相手に対して好ましくない印象を与えないよう意識するスキル
前向きな思考	落ち込んだときや失敗したとき、また困難に遭遇したときでも前向きに考えるスキル
自尊心	現在のありのままの自分を肯定的に捉えることができるスキル
親和性	友人たちと親密な関係を形成・維持するスキル
計画性	時間的展望と物事の優先順位を考慮した先見的なスキル
感受性	相手の気持ちへ感情移入するスキル

結果

社会的スキルに関する得点　社会的スキルに関する尺度は、それぞれの側面別に、調査時期ごとに信頼性係数（クロンバックの α 係数）を算出した。併せて、それぞれの側面の１回目と２回目の相関係数を算出した。値を表５に示す。信頼性係数は、前向きな思考以外は.66 ～ .87となり、概ね満足できる値を示したと考えられる。また、それぞれの尺度の１回目と２回目の得点には高い正の相関が見られた。以上の結果を受け、信頼性係数の低かった前向きな思考も含め、それぞれの尺度ごとに項目数で除算した得点を算出し、以降の分析に用いた。

表５．社会的スキルに関する尺度の信頼性係数（α）と１回目と２回目の相関係数

	信頼性係数		１回目と２回目の相関係数
	１回目	２回目	
KiSS-18	.87	.86	.84***
情報要約力	.66	.67	.62***
リーダーシップ	.77	.77	.74***
対人マナー	.74	.77	.70***
前向きな思考	.48	.49	.74***
自尊心	.72	.69	.74***
親和性	.74	.81	.66***
計画性	.68	.66	.63***
感受性	.67	.69	.74***

***p<.001.

続いて、社会的スキルに関するそれぞれの尺度の関係を確認するために、調査時期ごとに社会的スキルに関するそれぞれの尺度の相関係数を求めた。値を表６に示す。KiSS-18と、日常生活スキルの各側面は、１回目、２回目ともに有意な正の相関が見られた。また、日常生活スキルの各側面には概ね有意な正の相関が見られた。

また、トレーニング前の時点で社会的スキルに関する得点に学年差が見られる可能性を考慮し、それぞれの社会的スキルのトレーニング前の得点を従属変数とし、学年（２年、３年、４年）を要因とする分散分析を行った。その結果、どの得点にも有意差は見られなかった（F（2, 133）=0.02 ～ 1.67, *ns*）。トレーニング前の時点で社会的スキルに関する得点に有意な学年差が見られなかったため、以降の分析では学年を込みにして分析を行うこととした。

社会的スキルに関する得点の条件間の比較　条件ごとの社会的スキルに関する得点の平均値を表７に示す。それぞれの得点について、トレーニング実施、調査時期を要因とする混合計画の分散分析を行った。その結果、KiSS-18、情報要約力、リーダーシップは、交互作用が有意であった。KiSS-18、情報要約力、リーダーシップの結果を図１～３に示す。交互作用が有意であった得点については、単純主効果検定を行った。単純主効果検定の結果は、以下の４点に整理される。（ａ）どの得点にも、トレーニング実施前ではトレーニング実施の条件間で有意差は見られなかった。（ｂ）KiSS-18（図１）は、トレーニング実施条件において

表6．社会的スキルに関する尺度の相関係数（N =136）

	KiSS-18	情報要約力	リーダーシップ	対人マナー	前向きな思考	自尊心	親和性	計画性	感受性
KiSS-18	—	.57***	.75***	.43***	.42***	.48***	.43***	.40***	.29***
情報要約力	.42***	—	.56***	.41***	.13	.37***	.21*	.47***	.18*
リーダーシップ	.72***	.50***	—	.35***	.35***	.52***	.37***	.34***	.18*
対人マナー	.36***	.20*	.25**	—	.00	.19*	.34***	.36***	.28***
前向きな思考	.39***	.11	.28**	.06	—	.39***	.27**	.02	.02
自尊心	.45***	.35***	.49***	.13	.51***	—	.38***	.25**	.05
親和性	.52***	.25**	.49***	.22*	.26**	.48***	—	.06	.31***
計画性	.38***	.35***	.26**	.24**	.07	.19*	.16+	—	.22*
感受性	.30***	.22*	.29***	.19*	.03	.13	.38***	.12	—

注）上段が 1 回目、下段が 2 回目の結果を示す。
+p<.10, *p<.05, **p<.01, ***p<.001.

表7．条件ごとの社会的スキルに関する得点の平均値（標準偏差）とF 値

	トレーニング実施				F 値		
	実施		非実施		トレーニング実施	調査時期	交互作用
調査時期	前	後	前	後			
KiSS-18	3.05 (0.55)	3.25 (0.48)	3.08 (0.58)	3.17 (0.56)	0.04	28.41***	4.03*
情報要約力	2.43 (0.57)	2.71 (0.49)	2.47 (0.47)	2.54 (0.44)	0.69	22.29***	8.40**
リーダーシップ	2.08 (0.56)	2.44 (0.57)	2.22 (0.68)	2.36 (0.67)	0.09	38.78***	7.33**
対人マナー	3.28 (0.59)	3.34 (0.53)	3.38 (0.50)	3.39 (0.49)	0.87	0.90	0.70
前向きな思考	2.39 (0.57)	2.50 (0.58)	2.50 (0.63)	2.49 (0.57)	0.25	1.97	2.28
自尊心	2.17 (0.66)	2.25 (0.66)	2.13 (0.68)	2.26 (0.64)	0.03	5.99*	0.40
親和性	2.72 (0.69)	2.74 (0.69)	2.81 (0.64)	2.70 (0.74)	0.04	0.77	1.58
計画性	2.10 (0.70)	2.15 (0.61)	2.28 (0.52)	2.32 (0.57)	3.28	1.02	0.02
感受性	2.88 (0.65)	2.94 (0.57)	2.95 (0.57)	2.88 (0.62)	0.01	0.01	2.58

*p<.05, **p<.01, ***p<.001.

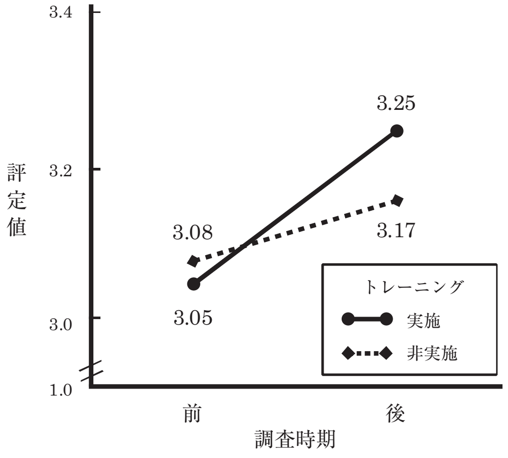


図１．条件ごとの KiSS-18 得点の平均値

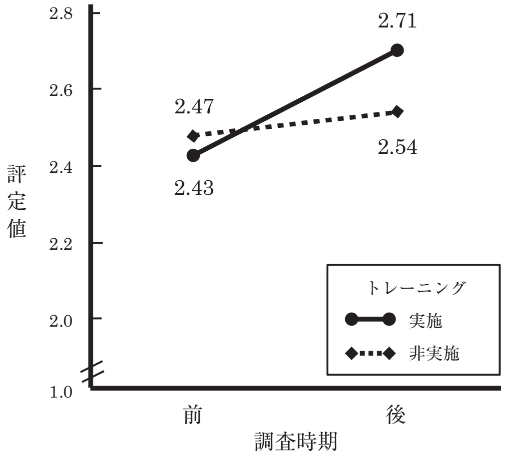


図２．条件ごとの情報要約力得点の平均値

トレーニング実施後は実施前よりも得点が高かった（F（1, 134）=21.79, p<.001）。トレーニング非実施条件においてもトレーニング実施後は実施前よりも得点が高かった（F（1, 134）=7.21, p<.01）ものの、トレーニング実施条件よりも得点の上昇の程度が小さかった[5]。（ｃ）情報要約力（図２）は、トレーニング実施条件のみにおいてトレーニング実施後は実施前よりも得点が高かった（F（1, 134）=23.50, p<.001）。トレーニング非実施条件では、トレーニング実施前と実施後の得

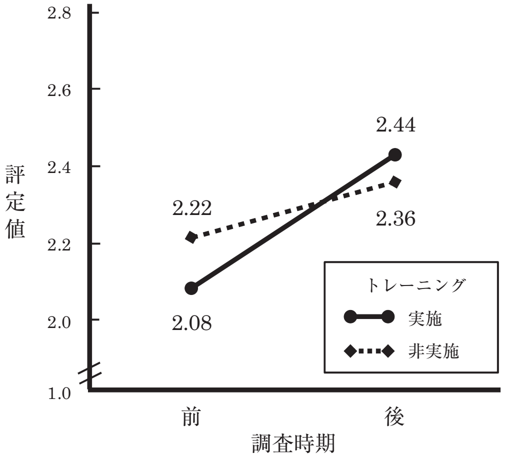


図３．条件ごとのリーダーシップ得点の平均値

点に有意差は見られなかった（F（1, 134）=2.17, *ns*）[6]。また、トレーニング実施後では、トレーニング実施条件の方がトレーニング非実施条件に比べ、得点が有意に高かった（F（1, 134）=4.47, p<.05）。（ｄ）リーダーシップ（図３）は、トレーニング実施条件においてトレーニング実施後は実施前よりも得点が高かった（F（1, 134）=32.31, p<.001）。トレーニング非実施条件においてもトレーニング実施後は実施前よりも得点が高かった（F（1, 134）=8.10, p<.01）ものの、トレーニング実施条件よりも得点の上昇の程度が小さかった[7]。なお、交互作用が有意ではなかった得点のうち、自尊心は調査時期の主効果が有意であり、トレーニング実施後の方が実施前よりも得点が高かった。

考察

本研究の目的は、大学生にチームワークに関するスキルを向上させるトレーニングを実施し、その有効性を検証することであった。具体的には、聴くスキル、説得するスキル、リーダーシップのスキルの向上を図るトレーニングを実施した。そして、社会的スキル、日常生活スキルのトレーニング前後の変化について、トレーニングの有無による変化を比較した。

トレーニングの有効性　分析の結果、トレーニング

実施条件では非実施条件に比べ、トレーニング後の時期に社会的スキル全般、日常生活スキルのうちの情報要約力とリーダーシップが向上していることが示された。日常生活スキルの一部である情報要約力、リーダーシップは、“社会人基礎力” のチームワークに関するスキルであると考えられる。上記の結果は、本研究で実施したトレーニングがチームワークに関するスキルを向上させる点で有効であったことを示していると解釈される[8]。

一方、トレーニングの効果が小さかった者が存在した点は留意する必要があるだろう。上記の三つの得点について、トレーニング実施条件の上昇の程度は0.19 ～ 0.35であり、ある程度の分散も見られていた。このことから、トレーニングによってチームワークに関するスキルの向上の程度が低かった者がいたと推察される。この理由として、トレーニングを受けた授業の受講生数やトレーニングの内容といった、トレーニングの実施環境が影響した可能性が考えられる。また、トレーニングを受けた者がトレーニングで学んだ内容を日常での他者のやりとりに応用していなかったという、受講生の意識の問題も影響した可能性も考えられる。トレーニングの効果をさらに高めるためには、トレーニングの実施環境や受講生の意識の問題に留意し、改善する必要があるだろう。

一方、日常生活スキルのうちの、情報要約力、リーダーシップ以外のスキルにはトレーニングの効果は見られなかった。情報要約力、リーダーシップ以外の日常生活スキルは、“社会人基礎力” のチームワークに関するスキルとの関連性が低いと想定されるため、トレーニングの効果は見られなかったと推察される。

本研究の貢献と今後の課題　本研究の貢献として、本研究で用いた一連のトレーニングによって、“社会人基礎力” の一側面である、大学生のチームワークに関するスキルを向上させることが可能であることを示した点が挙げられる。したがって、大学生の “社会人基礎力” の養成に寄与する知見が得られたと考えられる。

一方、今後の課題として、上述したトレーニングの実施環境や受講生の意識の問題に留意する以外にも、以下の三点が挙げられる。第一に、本研究で実施したトレーニングの有効性について、社会的スキルの下位概念に着目して検討することである。これまでの研究では、社会的スキルの下位概念に着目した尺度も開発されている（e.g., 藤本・大坊, 2007; Takai & Ota, 1994）。例えば、藤本・大坊（2007）は社会的スキルの下位概念としてコミュニケーションスキルを提唱し、自己統制、表現力、解読力、自己主張、他者受容、関係調整という下位スキルを示している。藤本・大坊（2007）のような社会的スキルの下位概念に着目した尺度を用いることで、本研究で実施したトレーニングが社会的スキルのどの側面の向上に寄与しているのかを特定できると考えられる。

第二に、個々のトレーニングの有効性を査定することである。本研究では、一連のトレーニングによってチームワークに関するスキルが向上することを示したものの、個々のトレーニングがもたらした効果を詳細には検討していない。本研究と同様に授業時にトレーニングを行った栗林・中野（2007）は、毎回のトレーニングの実施後に、トレーニング内での “自分への気づき・発言”、“非言語的行動（身振りや表情）の使用” などについて参加者自身で振り返るように求め、個々のトレーニングの有効性を検証している。栗林・中野（2007）のように、個々のトレーニングの特徴を検討することで、個々のトレーニング内容の改善や、トレーニング全体でのトレーニングの効果の向上につなげることができると考えられる。

第三に、本研究で実施したトレーニングの効果の持続性を検証することである。例えば、獲得されたチームワークが維持されるならば、“社会人基礎力” が評価されて社会にとって必要な人材であると見なされやすくなるため、就職活動で早期に内定が獲得できるようになる可能性が考えられる。したがって、就職内定獲得時期といった就職活動での成果に着目し、本研究で実施したトレーニングの効果の持続性を検証する必要もあると考えられる。

引用文献

相川充　(1999).　孤独感の低減に及ぼす社会的スキル訓練の効果に関する実験的検討　社会心理学研究,

14, 95-105.
相川充　(2009).　新版人づきあいの技術――ソーシャルスキルの心理学――　サイエンス社
榎本淳子　(1999).　青年期における友人との活動と友人に対する感情の発達的変化　教育心理学研究, 47, 180-190.
榎本淳子　(2000).　青年期の友人関係における欲求と感情・活動との関連　教育心理学研究, 48, 444-453.
藤本学・大坊郁夫　(2007).　コミュニケーション・スキルに関する諸因子の階層構造への統合の試み　パーソナリティ研究, 15, 347-361.
星野欣生　(2007).　職場の人間関係づくりトレーニング　金子書房
経済産業省　(2007).　"社会人基礎力"育成のススメ――社会人基礎力育成プログラムの普及を目指して――　経済産業省　2007年５月17日　<http://www.meti.go.jp/press/20070517001/kisoryoku-reference.pdf>（2011年10月14日）
経済産業省　(2010).　大学生の"社会人観"の把握と"社会人基礎力"の認知度向上実証に関する調査　経済産業省　2010年６月26日　<http://www.meti.go.jp/policy/kisoryoku/shakaijinkan.pdf>（2011年10月14日）
菊池章夫　(1988).　思いやりを科学する　川島書店
栗林克匡・中野星　(2007).　大学生における社会的スキル・トレーニングの成果と評価　北星学園大学社会福祉学部北星論集, 44, 15-26.
三隅二不二　(1978).　リーダーシップ行動の科学　有斐閣
水本篤・竹内理　(2008).　研究論文における効果量の報告のために――基礎的概念と注意点――　英語教育研究, 31, 57-66.
西村宣幸　(2008).　コピーしてすぐに使えるソーシャルスキルが身につくレクチャー＆ワークシート　学事出版
岡田努　(1991).　現代青年の人格発達と対人関係に関する探索的研究　東京都立大学心理学研究, 1, 11-18.
島本好平・石井源信　(2006).　大学生における日常生活スキル尺度の開発　教育心理学研究, 54, 211-221.
杉浦淳吉　(2003).　環境教育ツールとしての「説得納得ゲーム」－開発・実践・改良プロセスの検討－　シミュレーション＆ゲーミング, 13, 3-13.
Takai, J. & Ota, H. (1994). Assessing Japanese interpersonal communication competence. *Japanese Journal of Experimental Social Psychology,* 33, 224-236.
山口裕幸　(2008).　チームワークの心理学――よりよい集団づくりを目指して――　サイエンス社

注

1．本研究は、常磐大学課題研究助成（2011年度）を受けた。
2．研究の実施および論文の作成にあたり、常磐大学人間科学部コミュニケーション学科の岩田温先生、石原亘先生、西澤弘行先生、石川勝博先生、中村泰之先生、寺島哲平先生にご協力いただきました。記して感謝いたします。
3．社会的スキルと類似した概念として、コミュニケーションを円滑に扱うために必要な能力であるコミュニケーションスキルがある。コミュニケーションスキルと社会的スキルの定義は概念的に重複することが指摘されている（藤本・大坊, 2007)。藤本・大坊（2007）は、対人関係に主眼がおかれた社会性に関わる能力を社会的スキル、言語、非言語による直接的コミュニケーションを適切に行う能力をコミュニケーションスキルとしている。そして、コミュニケーションスキルの上位概念として、社会的スキルを位置づけている。本研究では、対人スキル全般を扱うことを主眼としていること、また、社会的スキルという用語がより広く使われてきたことを踏まえ、社会的スキルという用語を用いることとする。
4．2011年３月11日に発生した東北地方太平洋沖地震とその後の福島第一原子力発電所の事故をうけ、常磐大学では2011年５月２日から８月19日が春セ

メスター（前期）の授業期間となった。したがって、トレーニング前の調査時期が５月、トレーニング後の調査時期が８月となった。

5．トレーニング実施によるKiSS-18の上昇の程度の違いを補足的に調べるため、トレーニング実施後の得点から実施前の得点を引いた値を、トレーニング実施の有無で比較した。その結果、トレーニング実施条件（*M*=0.19, *SD*=0.31）の方がトレーニング非実施条件（*M*=0.09, *SD*=0.31）に比べ、得点が有意に上昇していた（*t*（134）=2.01, *p*<.05）。

6．トレーニング実施による情報要約力の上昇の程度の違いを補足的に調べるため、トレーニング実施後の得点から実施前の得点を引いた値を、トレーニング実施の有無で比較した。その結果、トレーニング実施条件（*M*=0.28, *SD*=0.43）の方がトレーニング非実施条件（*M*=0.07, *SD*=0.41）に比べ、得点が有意に上昇していた（*t*（134）=2.90, *p*<.01）。

7．トレーニング実施によるリーダーシップの上昇の程度の違いを補足的に調べるため、トレーニング実施後の得点から実施前の得点を引いた値を、トレーニング実施の有無で比較した。その結果、トレーニング実施条件（*M*=0.35, *SD*=0.50）の方がトレーニング非実施条件（*M*=0.14, *SD*=0.41）に比べ、得点が有意に上昇していた（*t*（134）=2.71, *p*<.01）。

8．トレーニング実施条件のトレーニング効果を示すために、効果量の指標を補足的に示す。トレーニングと調査時期の交互作用の効果量（η^2）は、KiSS-18が.03、情報要約力が.06、リーダーシップが.05であった。また、トレーニング実施後の得点から実施前の得点を引いた値に対するトレーニング実施の有無の比較での効果量（*d*）は、KiSS-18が0.35、情報要約力が0.51、リーダーシップが0.47であった。効果量（*d*）は、0.50が中程度の効果とされている（e.g., 水本・竹内, 2008）。したがって、本研究で実施したトレーニングは、社会的スキル全般、情報要約力、リーダーシップの向上にある程度の効果をもたらしたと考えられる。

研究ノート

緑茶成分の経時変化（１）－細胞毒性を検討するための緑茶の色調変化とタンニン量変化の追跡－

佐塚　正樹
Masaki SAZUKA

Progress of the oxidation of the green tea ingredient; the first report －The observation of the color change of green tea and the quantitation of tannin for the green tea to examine cytotoxicity－

１．はじめに

近年，緑茶の機能性についてその効果についての議論が活発に行われている。筆者の研究も含め，緑茶のカテキン類，特に（－）－エピガロカテキンガレート（EGCG）の研究に関しては現在も盛んに行われている[1]。実際，医学系文献データベースのPubMedで「Cancer」および「EGCG」というキーワードで検索をすると，1989年から2011年で925件の研究報告がヒットする。しかし，東北大学の坪野はその著書の中で疫学的な立場で明確に緑茶の抗がん作用に疑問を表している[2]。坪野らの主張は非常に専門的かつ明確な疫学的調査に基づいており，坪野の主張を軽視・無視するのは，科学的に誤っている。

一方，近年，食品産業界では保健機能食品制度に基づいた特定保健用食品や栄養機能食品がひとつの食品分野を形成しつつあり，特定保健用食品の素材として緑茶カテキン類，特にEGCGの保健機能が注目され，EGCGを利用した商品が市場に出回っている。しかし，EGCGを利用した特定保健用食品は抗がんに対する保健機能をクレームにしてはいない[3]。このことは，上記したPubMed検索でヒットする抗がんに関する論文など学術的報告が多数あるにもかかわらず，現状ではEGCGが抗がんの保健効果に利用できない物質であることを明確に示している。

著者はEGCGが抗がんの保健効果に利用できない物質であるという理由の一つとしてカテキンの酸化重合が関係していると仮定している。

そもそも，緑茶のカテキン類は経験的に「茶渋」と言われるように，酸化重合と他成分への結合が激しく起こる物質である。しかし，多くの論文は，「茶渋」，特に酸化重合に関して，詳細な検討がなされているとは言い難く，これまでの「茶渋」を意識していない細

胞を使ったin vitroでの研究は，in vivoでの緑茶の機能性と，ほとんど一致しないと考える。

すなわち，普段，飲用する緑茶の種類，そのお茶の煎れ方，煎れてからの飲むまでの経過時間，煎れたお茶の保存方法，飲み方などでin vivoでの作用は，限られた条件下で行われるin vitroの作用と全く異なってしまうと考えるべきである。

実際,緑茶の飲用(機能性を期待する場合も含む)は,非常に難しく，それは例えば，美味しいお茶を飲むための茶道という作法が日本の文化として根付いていることからも明らかである(4)。本来，EGCGを多量に含む緑茶は嗜好品であり，そもそも，日本でのお茶飲用（喫茶）の広まりは，抹茶は茶道として戦国時代末期に千利休によって確立され，現在の一般的な急須を使って茶葉を煎れる方法は江戸時代に茶商，山本嘉兵衛によって広められた(4)。すなわち，緑茶は日本を代表する文化であり，食品の第二次機能（嗜好性）に特化した食品である。しかしながら，緑茶成分，特にEGCGの生理活性の学術的成果が，緑茶を本来の役割（嗜好性食品）から第三次機能（体調調節機能）を強調する（保健を意識した）食品にシフトさせてしまったと考える。

古くからの医食同源とは，「食生活によって健康が左右される」という主張だと著者は考えている。そして現代の医食同源とは，例えば「メタボリックシンドロームの患者を管理栄養士と医師などが指導して食事および運動療法によって改善する」という主張であると考える。著者は医食同源を例えばEGCGに代表される科学的根拠が明確でない食べ物の特定成分が健康に大いに関与する（例えば，病気を治す，予防する）という主張には賛成できない。

上述のように坪野の疫学調査での緑茶の抗がん作用の否定や保健機能食品制度でのEGCGの抗がんに関する保健機能が認められていないことからもその理由の一つと仮定できるカテキン類の酸化重合の検討は必要であると考える。

著者は現在，上述した考えに基づいて緑茶の本来の機能（嗜好性）を再検討するため，緑茶に起きる化学反応（カテキン類と他分子との結合や酸化重合）が，お茶の味覚とEGCGの生理活性にどう影響するか，科学的に検証している。

この報告では，これまでの著者の緑茶研究成果の中で，おいしい番茶の煎れ方を科学的証明する基礎データーにもなり，番茶カテキン類（特にEGCG）の細胞毒性実験の予備データーにもなる，番茶の酸化重合観察実験の結果と番茶のタンニン量の定量データーを示して考察を行いたい。

２．方法

（１）　番茶の酸化重合観察

市販緑番茶を用いて以下の手順で行った。

①　番茶の調製

お茶のいれ方標準表(5)に従い，番茶を煎れた（表１）。

表１　お茶のいれ方標準表(5)に基づいての番茶の調製

茶葉種類と製造者	煎れ方
番茶 製造者(株)お茶の山一 包装年月日2011.5.15	茶葉量　15g/5人を3g/1人分とした 湯量　650ml/5人を130ml/1人分とした 湯の温度　熱湯 抽出時間　30秒

②　デジタルカメラでの記録

煎れた番茶について0分・5分・10分・15分・30分・1時間・2時間・3時間・6時間・24時間の状況の色調をデジタルカメラで記録した。

③　Image Jによる番茶の色調変化の解析

電気泳動解析やセルカウントに用いられ学術的にも認められている画像解析ソフトImage J（ver. 1.43U）を用いて方法1－②で得られた画像の色調を解析した。

（２）　番茶のタンニン量の測定(6)

（１）の番茶の酸化重合観察の結果を受けて時間経過とともにどのように番茶のタンニンの量が変化したかを酒石酸鉄吸光度法で定量した。

【酒石酸鉄吸光度法使用試薬】

- 酒石酸鉄試薬：硫酸第一鉄（和光純薬工業）100mgおよび酒石酸カリウムナトリウム（和光純薬工業）500mgを水に溶かして100mlとした。
- 1/15Mリン酸水素二ナトリウム（和光純薬工業）溶液（11.867g/ℓ）と1/15Mリン酸二水素カリウム（和光純薬工業）溶液（9.073g/ℓ）を84：16で混合し，pHメーターでpH7.5になるように調製した。

検量線の作成には没食子酸エステル（和光純薬工業）を用いた。測定した番茶サンプルは番茶葉を3g量り，熱湯130mlで30秒抽出したタンニンの測定は入れて直後のものと24時間放置したものを用いた[5]。

3．結果と考察

一般的な煎れ方に従って調整した番茶の０から24時間の酸化の状態は図1に示したようになった。

図1を見てわかるように，番茶を煎れてわずか5分で微妙な色調変化が観察できる。その後，1時間で明確な色調変化が現れ，2時間，3時間と時間が経過すると，黄緑色だったものが褐色に変化し始め，24時間後には紅茶のような色調に変わってしまった（図1）。

実際にこのような状況では酸化重合体として高次のプロアントシアニジンなどが生成されると推定される[7]。また，視覚による色調変化の観察を補完するため，Image Jによる画像解析結果をグラフ化した（図2）。茶碗に煎れた番茶の画像の中心付近から光の映り込みがない部分の面積を画像処理して平均化した値をグラフ化した。その結果，色調変化としては視認したように，5分で変化が見られた（図2）。Image Jでは，色調は数値として結果が示されるが24時間では最初の値よ

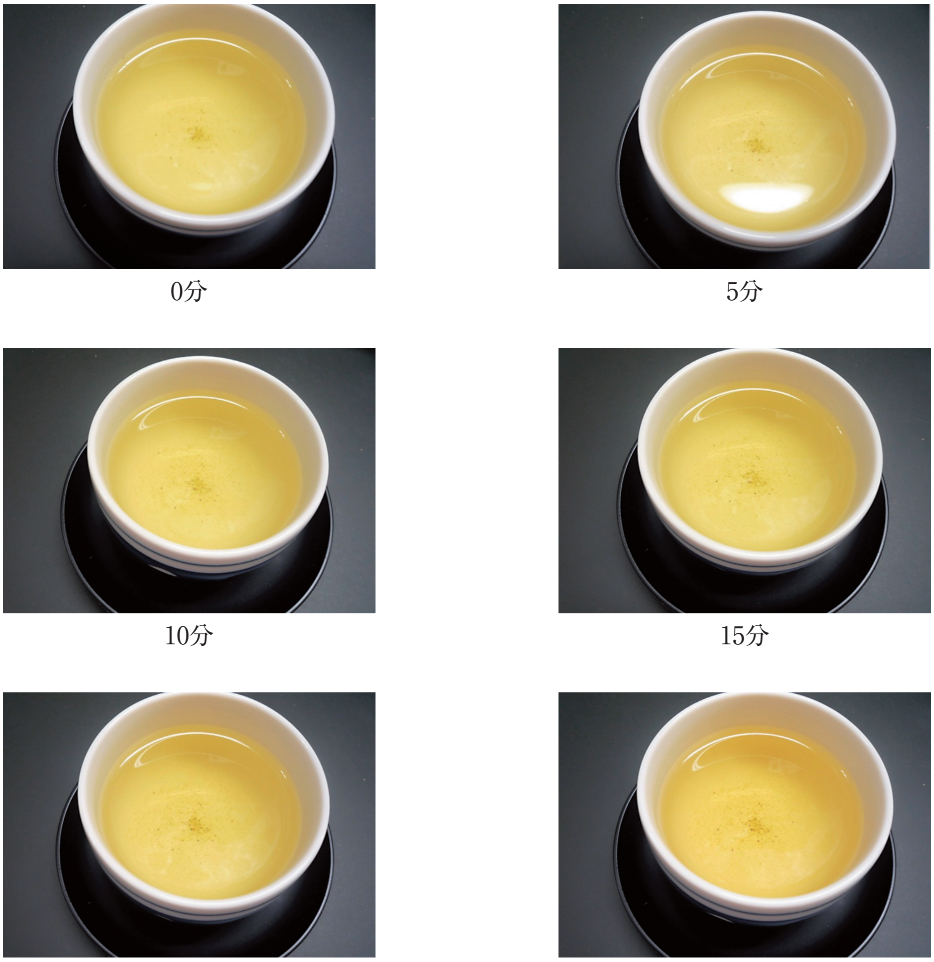


図１　番茶の時間経過による色調変化

２時間

３時間

６時間

24時間

図１つづき　（番茶の時間経過による色調変化）

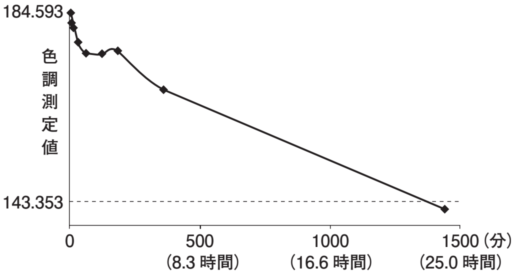


図２　番茶の色調変化（Image Jによる解析）

縦軸は色調測定値で黄緑色から褐色になるにつれ低下する。番茶は0分で色調は184.593で24時間後は143.353まで下がっていた。百分率で換算すると約22.3%下がったことになる。

り22.3%下がっていた。番茶を煎れた0時間後と24時間後の色調変化の差を単純には比較できないが，最初から緑茶の酸化が進んで色調変化を起こしたことが推測できる。

次に図1，2の結果を受けて，番茶のタンニン量について番茶を煎れて0時間と24時間経過したものを測定した。吸光度法の検量線は没食子酸エチルを標品として行い，5，10，15，20，25 mg/100mlの濃度にして検量線を得て，その結果，検量線から$Y= 0.0308\ X + 0.0063$という実験式が得られた（図3）。今回の番茶の調製した時の条件は表2に示したとおりである。

表２　タンニン量測定のための番茶の調製

番茶0時間経過	：茶葉3g・湯130ml　抽出温度86℃・そそぎ温度71℃
番茶24時間経過	：茶葉3g・湯130ml　抽出温度82℃・そそぎ温度65℃

お茶のいれ方標準表[5]に基づいて番茶を調製した。

表2で調製した0時間経過と24時間経過したそれぞれの番茶の吸光度の測定結果からタンニン量に換算したところ，表3のような結果を得た。

表3の結果から，タンニン酸量の明らかな低下（7.1%の減少）があり，カテキン類が重合してもタンニン量

として分析できるプロアントシアニジンが生成された可能性がある[7]。番茶のタンニン量が減少した原因が重合による濃度低下なのか，それ以外の結果によるものか不明であるが24時間経過した番茶のポリフェノール類の生理活性は0時間より減少している可能性があり，酸化による生理活性の有無も詳細に検討する必要があると考える。

今回示したデーターから，美味しいお茶を飲むために煎れた番茶[5]の酸化の経過とタンニン量(カテキン量)の減少を明らかにすることができた。

EGCGに関するin vitroの注目すべき研究としては，九州大学の立花ら[8]が，緑茶などに含まれるEGCGが，がん細胞に発現している67kDa-ラミニンレセプターに結合して増殖阻害を起こすことを発見し，EGCGのがん細胞増殖阻害の明確なメカニズムを初めて明らかにした。立花らの研究は，分子生物学的な手法を駆使しEGCGのがん細胞への作用を明らかにした研究でin vitroでのEGCG研究では最も信頼できる内容である。その一方で前述のように坪野ら[2]の主張からはEGCGに抗がん作用を期待するのは難しいと考えられる。

今後，上記のような緑茶に関する科学的に優れた成果を参考にしながら，手軽に美味しさを楽しむ番茶に

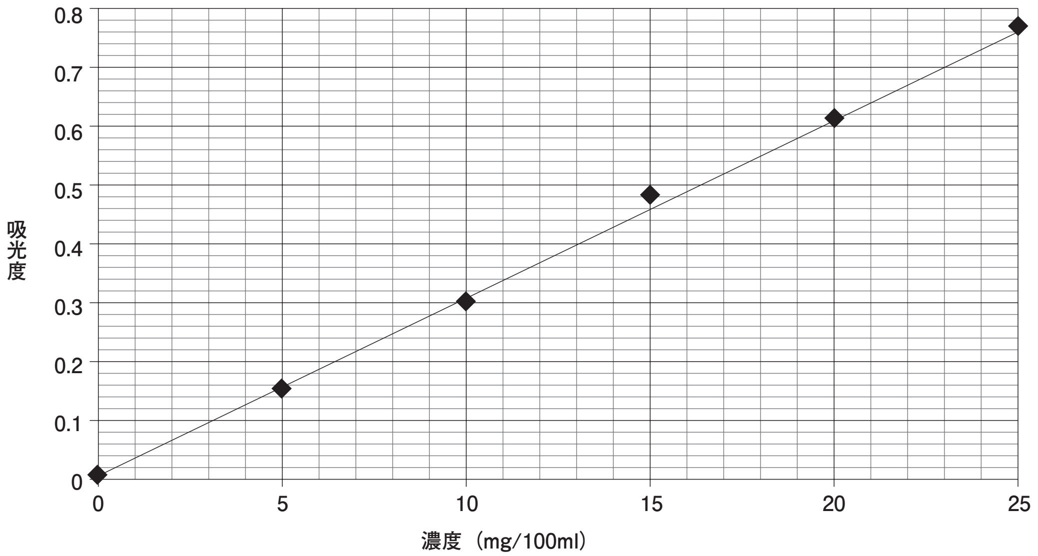


図３　没食子酸エチルによる検量線

最小二乗法により検量線の近似一次直線はY ＝ 0.0308X + 0.0063となった.

表３　番茶のタンニン量の変化

	吸光度	濃度※1	タンニン量/100ml (濃度×1.5)	タンニン量/130ml※2
0時間経過した番茶	0.486	15.57468	23.36	30.37
24時間経過した番茶	0.452	14.47078	21.71	28.22

※１　Y = 0.0308 X + 0.0063のYに吸光度値を代入して濃度を求めた。
※２　タンニン量にして24時間後7.1%減少した。

なんらかの生理活性を期待してよいのか，今回のデーターを，番茶を用いた細胞毒性実験に生かしたいと考える。

最後に本研究は，常磐大学2010年度課題研究（各個研究）助成によって行われたものであり，本研究助成に深く感謝する。

また本研究を遂行するにあたり，実験を中心的に行ってくれた本研究室ゼミ生の人間科学部健康栄養学科4年茂木麻友美さんに深く感謝する。

参考文献

（1）Mamoru Isemura, Kouichi Saeki, Takashi Kimura, Sumio Hayakawa, Takeshi Minami and Masaki Sazuka, Tea catechins and related polyphenols as anti-cancer agents, 2000, Bio Factors, 13（1－4）, 81-85.

（2）坪野吉孝, 2004,「がん」は予防できる，講談社α新書.

（3）田中平三, 門脇　孝, 篠塚和正, 清水俊雄, 山田和彦, 2008, 健康食品のすべて-ナチュラルメディシン・データベース - 特定保健用食品成分データベース第二版, 同文書院, pp.898-900.

（4）高野實, 谷本陽蔵, 冨田　勲, 岩浅 潔, 中川致之, 山田新市, 2002, 新訂緑茶の辞典, 柴田書店, pp.281-284.

（5）谷本陽蔵, 1997, 緑茶入門, 保育社, p.53.

（6）佐塚正樹, 三好規之, 鈴木康夫, 小山ゆう, 早川清雄, 2010, 食べ物と健康の基礎実習, 理工図書, pp.102-103.

（7）村松敬一郎偏, 1991, 茶の科学, 朝倉書店, pp.115-123.

（8）Hirofumi Tachibana, Green tea polyphenol sensing, 2011, Proc. Jpn. Acad., Ser. B, 87（3）, 66-80.

執筆者一覧（掲載順）

長谷川　幸一	人間科学部	教授
日向野　弘毅	人間科学部	教授
林　寛一	コミュニティ振興学部	教授
文堂　弘之	国際学部	准教授
砂金　祐年	コミュニティ振興学部	准教授
岡部　玲子	人間科学部	准教授
三宅　光一	常磐短期大学幼児教育保育学科	教授
石川　勝博	人間科学部	准教授
太幡　直也	人間科学部	助教
佐塚　正樹	人間科学部	准教授

編集委員

小林　晶子　　瀬川　薫　　太幡　直也

長井　進　　中西　貴行　　永野　勇二

常磐大学人間科学部紀要　人間科学　第29巻　第2号

2012年3月20日　発行
非売品

編集兼発行人　常磐大学人間科学部　〒310－8585　水戸市見和1丁目430-1
代表者　冨田信穂　電話　029-232-2511（代）

印刷・製本　株式会社　あけぼの印刷社

ISSN-0289-9760

HUMAN SCIENCE

(Faculty of Human Science, Tokiwa University)

Vol.29, No.2 **March 2012**

CONTENTS

Articles

Theoretical and empirical consideration about the transformation of organizations in contemporary society – mainly the organizations of Ibaraki Prefecture –
…… K. Hasegawa, K. Hayashi, K. Higano, H. Bundo, & S. Isago 1

Hisaishi's musical features in Miyazaki's animated film "Spirited Away"
………………… R. Okabe & M. Miyake 21

A study on the job seeking activities among university students in the Department of Communication, Faculty of Human Science, at Tokiwa University Part Ⅱ ……………… M. Ishikawa 47

Effects of social skill training to develop teamwork in university students
………………… N. Tabata 59

Research Note

Progress of the oxidation of the green tea ingredient; the first report – The observation of the color change of green tea and the quantitation of tannin for the green tea to examine cytotoxicity –
………………… M. Sazuka 71

Edited by Editorial Committee

Faculty of Human Science, Tokiwa University

Mito Ibaraki 310-8585 Japan